厳島における考古学的踏査とその検討（2）

－大川浦遺跡に関する考古学的検討－

古瀬　清秀・加藤　　徹・竹広　文明
脇山　佳奈・荒木　亮司

はじめに

広島大学文学研究科考古学研究室ではこれまでに、厳島に関する考古学的踏査を6回にわたって実施してきた。その都度、島の各所で考古学的な遺物の散布に遭遇し、これまで知られていなかった未知の遺跡も数多く確認してきた。この一連の踏査活動のきっかけとなったのが大川浦遺跡である。広島大学考古学研究室とこの大川浦遺跡の関わりは、平成12（2000）年11月までさかのぼる。この時、厳島対岸の佐伯郡大野町（現廿日市市）在住のアマチュア考古学研究者荒木亮司氏がこの大川浦遺跡で採集したという瑞花双鳥八稜鏡を、安芸郡蒲刈町（現呉市）の文化財保護委員長を務めていた松浦宣秀氏のもとに持ち込んだことに始まる。この鏡の概要と、その発見の経緯について、松浦氏から古瀬に連絡があったが、興味を感じながらもそのままになっていた。平成16（2004）年になってようやく、松浦氏・荒木氏とともに大川浦遺跡で実地踏査を実施した。その結果、八稜鏡出土地点についての状況を知ることができ、同時に縄文時代の包含層の存在を確認し、縄文土器を始め、いくつかの考古資料をも採集した。全く人の手の加わっていない遺跡の遺存状況の良好さに驚くとともに、改めて厳島の原始古代に強い関心を持つこととなった。

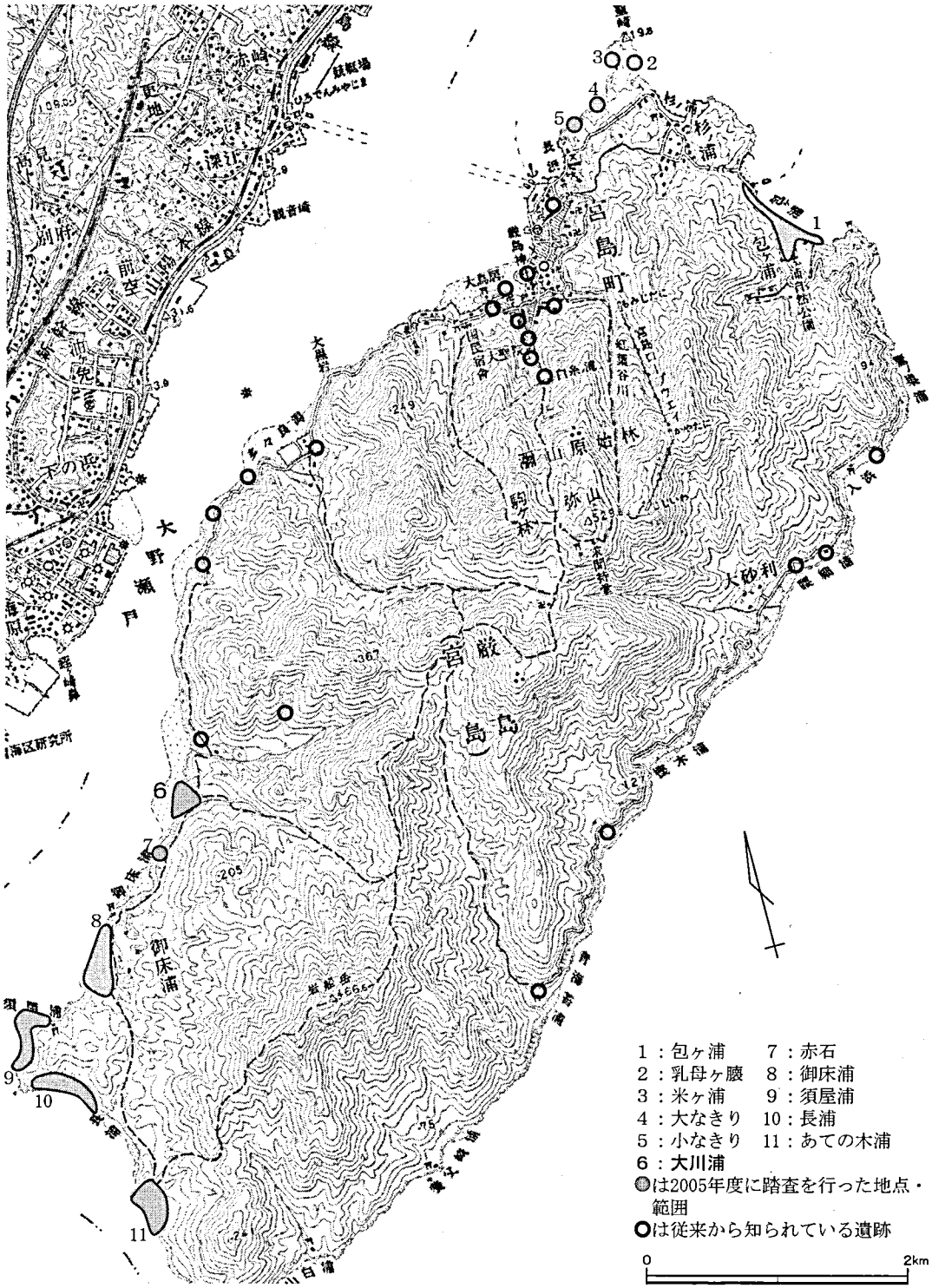
今回の報告では、踏査時に我々が採集した資料に合わせて、荒木氏がこれまでに大川浦遺跡で採集してきた多量の考古資料を紹介することにした。（古瀬　清秀）

1．大川浦遺跡について

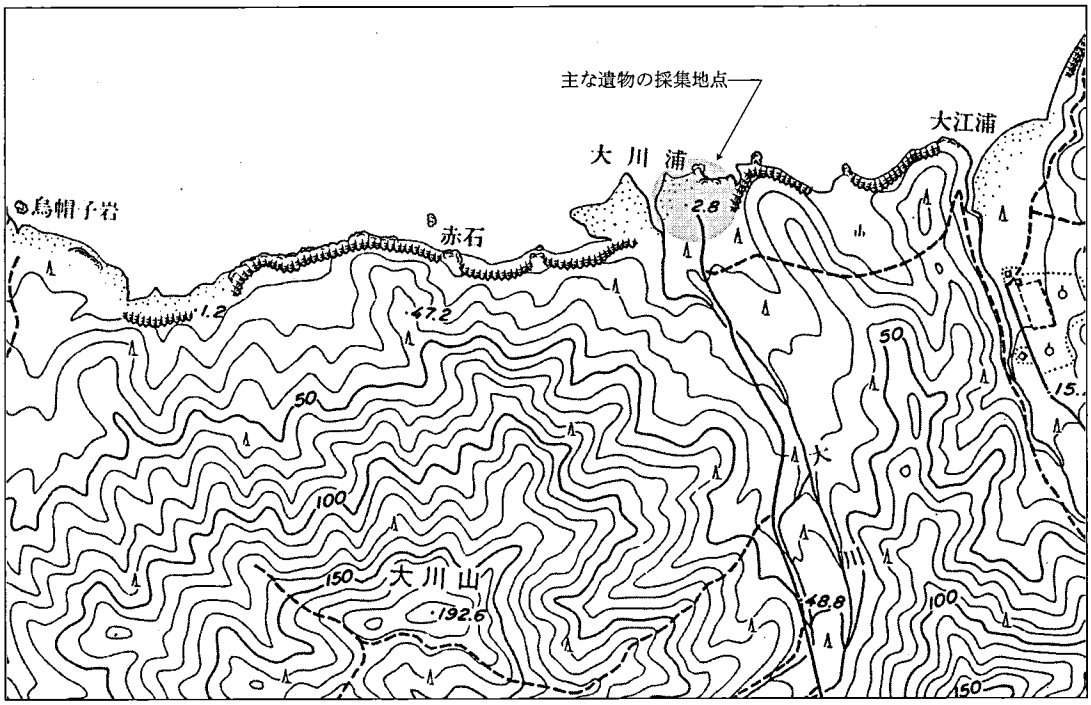
大川浦遺跡は厳島の北西岸、大江浦の南側に位置し、上室浜と須屋浦のほぼ中間地点に当たる。厳島神社のある宮島町市街から大野瀬戸側の海岸沿いに約5km西南に行った地点が大川浦で、対岸の廿日市市側とは約1.3kmの距離を隔てている。岩船岳北麓の谷間を北流する大川によって形成された谷平地が海に向かってV字形に広がり、河口には長さ約125m、奥行き約38mの円弧形を呈する砂州が形成されている。砂州の背後には顕著な後背湿地は形成されず、砂州を挟むように大川が分流している。砂州の先は遠浅となって、干潮時には広い砂浜が出現する。

砂州の背後には、周囲の砂浜よりも一段高くなった扇状地状の平坦面が谷奥まで続いている。この平坦地の海岸側には、護岸用の石垣が設けられているが、相次ぐ高潮の影響か、北半では石垣の大部分が崩落し、石材が散乱した状態となっている。

この平地の北半から奥部にかけて、昭和初期に対岸の大野の水野家が経営していた胡粉工場跡があり、石垣やレンガ等で作られた水路や水槽などが残る。この周辺にはカキの貝殻や石臼、陶磁器や瓦の破片等が散乱している。また、付近にはトラック3台の残骸とともに、広島営林署による「宮島林道大川線（車道）、幅員三.〇m、延長一.七一二km」等と書かれた、朽ちかけた標識が残っており、か



第１図　宮島における遺跡の分布（Ｓ＝１／50,000）
（カシミール３Ｄ、５万分の１地形図を使用）



第２図　大川浦遺跡周辺地形図（Ｓ＝１／10,000、図上が北）

つては車道が設けられていたことが窺える。

大川浦遺跡の遺物は、主に砂州と平地の境目周辺から採集されており、平地内部に包含されていた遺物が、風雨や高潮等で洗い出されたものと思われる。また、平地北端の波打ち際付近では、近年幾度か襲来した大型台風により土砂が大幅に削られ、縄文時代前期の二枚貝調整による条痕文土器片、安山岩・姫島産黒曜石の剥片を含む黄褐色粘質土層と、縄文時代後期の土器を多く含む黒色土層が露出している。

また、先に述べた胡粉工場跡付近に見られる断面には、地表下に20～30cmほどの厚さで、アサリなどの貝殻を多く含む黒色土層が８ｍほど続いており、わずかに須恵器や土師質土器の破片を含む状況が確認できる。

なお、瑞花双鳥八稜鏡については、縄文土器包含層を覆っていた新しい堆積の砂層中から露出した状態で採集された。採集したのは遺跡の北端に近く、海にもっとも張り出す地点で、周辺に遺構等はまったく確認できず、風波に洗われてこの地点に出現したものといえる。したがって、この鏡がどのような遺構に伴われて、この遺跡に遺存したのかは不明である。　　（古瀬　清秀・荒木　亮司）

２．大川浦遺跡採集の遺物

(1)　土器

ｉ　縄文土器（第３～９図、写真図版２～６）

前期土器（第３図、写真図版２）

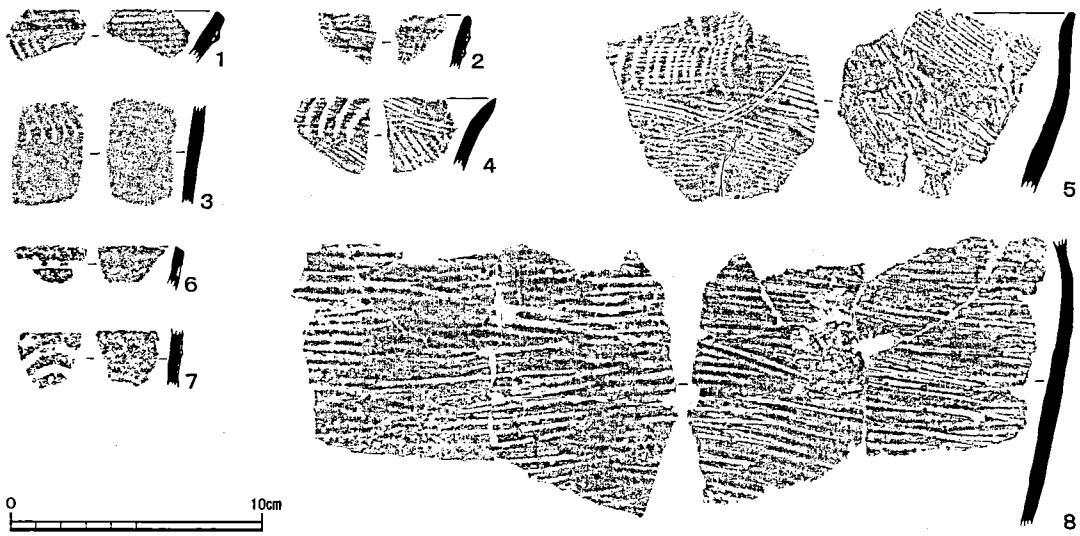
１～２は口縁部直下に隆起帯を巡らせた轟Ｂ式併行期の土器と考えられる資料である。隆起帯の太

さや間隔は異なることから別個体であると考えられる。３～５は爪形文を巡らせた羽島下層（新）式併行期の土器と考えられる資料である。３は半截竹管による逆「C」字形の刺突を施している。４～５は二枚貝条痕地に、二枚貝の腹縁を用いた「C」字形の刺突を押引刺突文状に施しており、同一個体と考えられる。なお５は、刺突を２列施しているが、上の列は口縁端からはみ出ている。６～７は、ナデ調整した器面にヘラ状工具を用いた押引刺突文を巡らせた彦崎Ｚ１式併行期の土器と考えられる資料である。６は口縁直下に横位の、７は胴部に円弧状に３列の押引刺突文を巡らせている。器厚や胎土および内面の色調、刺突の幅等が類似しており、同一個体の可能性もある。８は器壁の内外面に二枚貝条痕が顕著にみられる土器で、胴部は緩やかに内湾しながら上方へのびており、前期に位置づけられると考えられる。後で述べる後期の土器に比べて資料数は非常にすくないものの、前期の一時期に限られるのではなく、前半～後半にかけての数型式の資料が存在している。

後期土器（第４～８図、写真図版３～６）

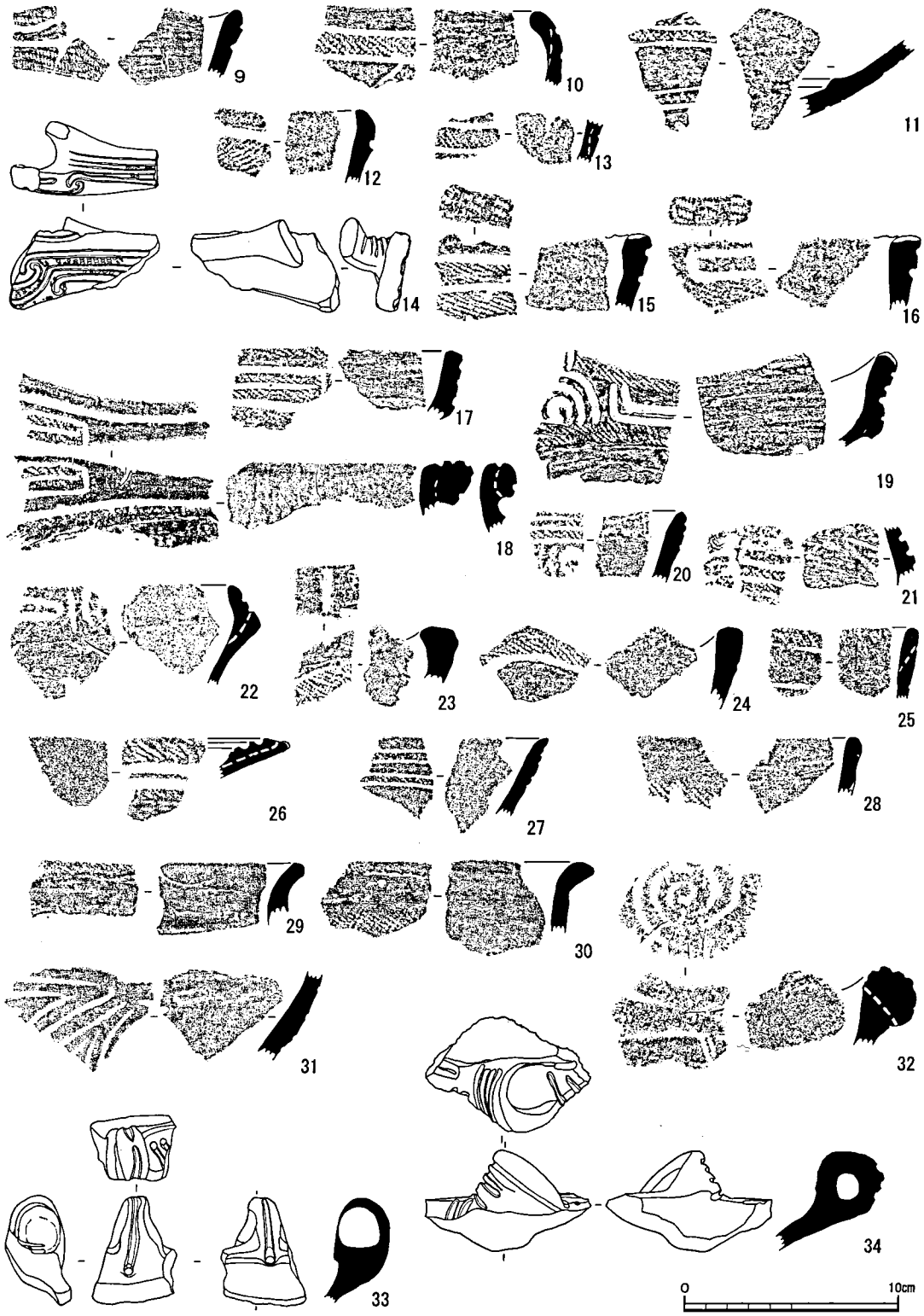
９～81は福田ＫⅡ式～彦崎ＫⅡ式併行期の土器と考えられる資料であり、中心は津雲上層式～彦崎ＫⅠ式併行の時期である。当該時期の資料は今回の報告の中で最も多く73点に達するが、表面採集資料ということもあり、層位的な報告ができないため、今回は主に文様と、口縁部の肥厚の状況の観察をもとに、以下のように分類をして報告をおこなっている。第１基準は文様の有無、第２基準は縄文の有無、第３基準は器形、第４基準は文様の施文部位、第５基準は口縁部の肥厚の状況である。これによって、各型式別ではなく、以下のような順で報告をおこなっている。９～30は縄文（擬似縄文を含む）を有する資料、31～40は文様が縄文をもたず沈線を中心として展開している深鉢、41～60は文様に縄文をもたず口縁端部を中心に刻目あるいは沈線によって文様が構成されている深鉢、61～65は文様に縄文をもたない浅鉢、66～68は無文の浅鉢、69～81は無文の深鉢である。

９～30は文様中に縄文（あるいは擬似縄文）が含まれる資料である。９は今回報告する資料中で唯一巻貝による擬似縄文を施した資料で、後期前半の土器であろう。10～13は福田ＫⅡ式併行期の土器と思われる資料である。10は太めの沈線で区画された磨消縄文であるが、沈線は連続しておらず、途



第３図　大川浦遺跡採集遺物実測図１（縄文土器１、Ｓ＝１／３）

切れて下方へと伸びている。11は浅鉢かと思われる資料である。磨消縄文の縄文帯は狭く、沈線も細いが、内面に突帯状の隆起を巡らせた形態は、広島県福山市の洗谷貝塚のⅧ類とされる資料中にもあり[1]、福田KⅡ式併行期の土器である。12・13は小破片で時期を特定するのは難しいが、後述する他の資料に比べ太い沈線とやや幅の広い縄文帯をもつことなどやや古い要素をもっており、10に近いような時期と考えられる。14は福田KⅡ式併行期～縁帯文成立期の資料であると考えられる。器壁は全体に丁寧なミガキが施されており、入組文も整った形をしている。幅の広い上面にも磨消縄文が施されているほか、その口縁は途中から「U」字状に分岐（あるいは収束か）しているが、それがどのようにのびているのかは折損のため明らかでない。15～24までは津雲上層式土器と考えられる資料である。15～16は口縁部に巻貝による刻目を施した磨消縄文である。15は12と同様に区画の沈線がやや太く、縄文帯も広くやや古相を呈しているが、他の採集資料の例から当該時期に位置づけておく。16は逆「コ」字状に方向を転換した沈線の間ではなく、その外側に縄文を残しているが、風化が進んでおり、縄文の範囲が口縁上端まで広がっているかどうかは明らかでなく、やや新しい様相を呈している。17・18は方形に区画した沈線間に縄文を残して、沈線外を磨消している。18は口縁下部に巡らせた沈線の下方にも縄文を残しているほか、破片の下端、頸部あるいは肩部にも沈線を巡らせている。19・20は円弧状の沈線と直線的な沈線を組み合わせた文様をもち、19が沈線の文様帯の上下に、20は沈線間に縄文を残している。19は口縁部文様帯の下端の縄文を施した部分を肥厚させている。22はやや内傾した口縁部に、「U」字状の沈線と縦位の直線および円弧状の沈線を施し、屈曲部付近に縄文を残しているが、風化が進んでおり、縄文は不鮮明でありその範囲は明らかでない。19・20の文様が退化したもののようであり、口縁が内傾している点もやや新しい要素と考えられる。21はやや内傾した口縁部の破片と考えられ、その外面に沈線を巡らせ、その間を縄文帯としている。この沈線の施文順位はやや複雑で、最初に正面左側の３本の沈線を描き、次いで中央の縦に走る沈線を描き、さらに右側の沈線を描いている。ただし、縦位の沈線より右側のものは、単なる横に走る沈線ではないようである。上の沈線は、まず縦位の沈線を二度描きするような形でなぞりながら、「L」字状に屈曲して右側へのびている。その下の沈線は縦位の沈線にぶつかる付近から始まる（あるいは終わっている）。さらにその下にもう一本の横に走る沈線が存在し、それは縦位の沈線を完全に切って破片左側からのびる様相を呈しているが、破片のため詳細は不明である。23は外面に沈線の区画内を縄文帯とした磨消縄文であるほか、肥厚させた口縁端部に刻目を施しており、新しい要素を持っている。24はやや太い沈線をもち、その沈線以上の部分を縄文帯として残している。沈線の太さや、口縁形態はやや古相を呈している。25～27は彦崎KⅠ～KⅡ式併行期の土器と考えられる資料である。25は二条の比較的細い沈線を横位に巡らせており、その上下両方を縄文帯としている。26は若干肥厚させた内面に（結節？）縄文を巡らせ、その後に２条のやや太めの沈線を巡らせている。器壁も薄く、口縁端部は尖り気味である。27は外面に２本の細い沈線で区画した縄文帯を設け、それを２列残している。28～30は沈線による区画をもたず、頸部を無文帯として、その上下部分にあたる口縁部外面端あるいは胴部上端付近に縄文を持つ土器である。このような文様をもつ土器は、津雲上層式併行期の土器が比較的まとまって出土している近隣の広島市比治山貝塚の第１貝層下土層の資料だけでなく[2]、香川県永井遺跡の永井Ⅳ～Ⅴ式に同様な型式が存在しており[3]、津雲上層式～彦崎KⅡ式併行期の比較的時間幅をもつ文様である。28は29や30に比べて口縁部があまり外反しておらず、３点の中ではやや古くなると思われる。

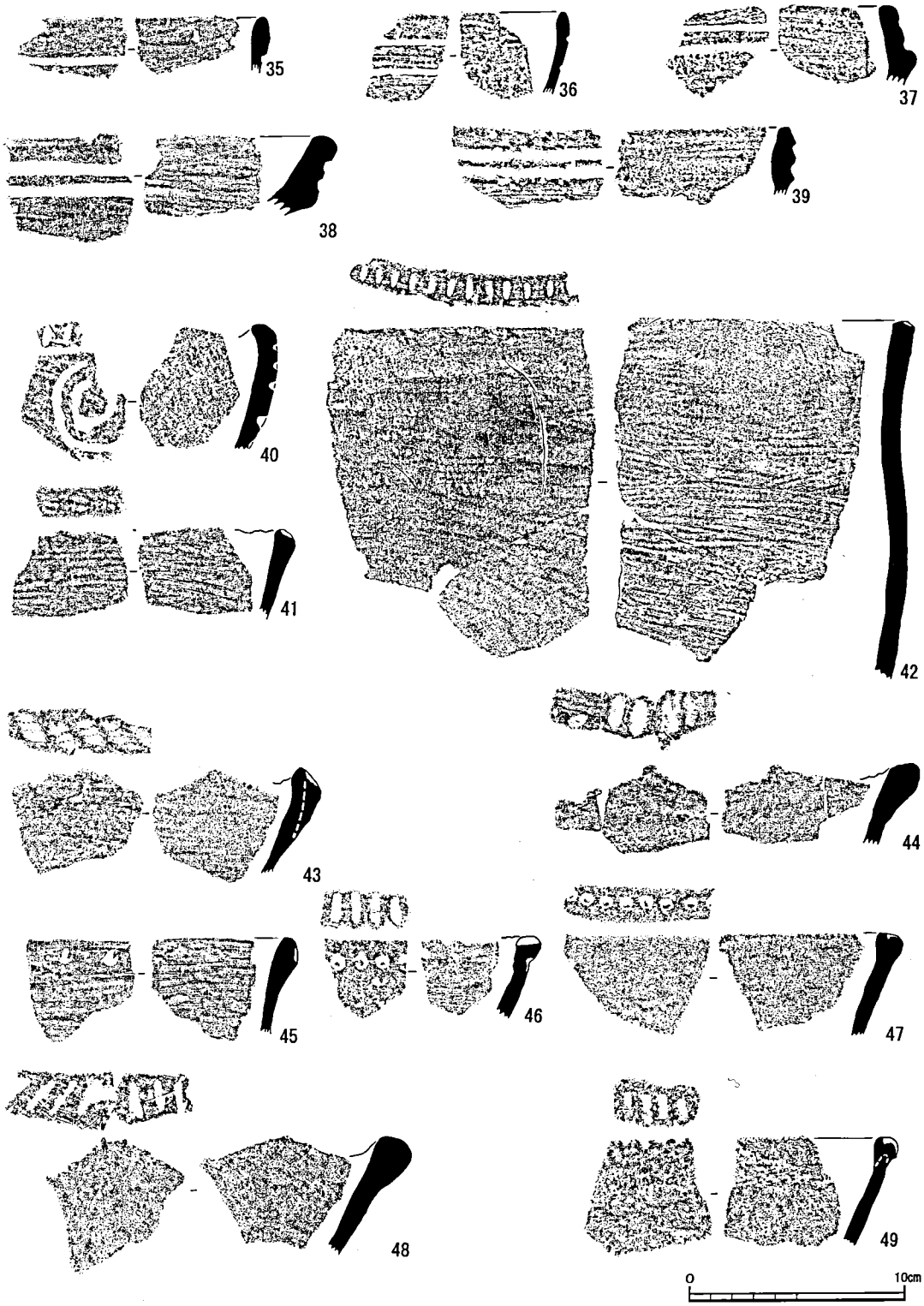


第４図　大川浦遺跡採集遺物実測図２（縄文土器２、Ｓ＝１／３）

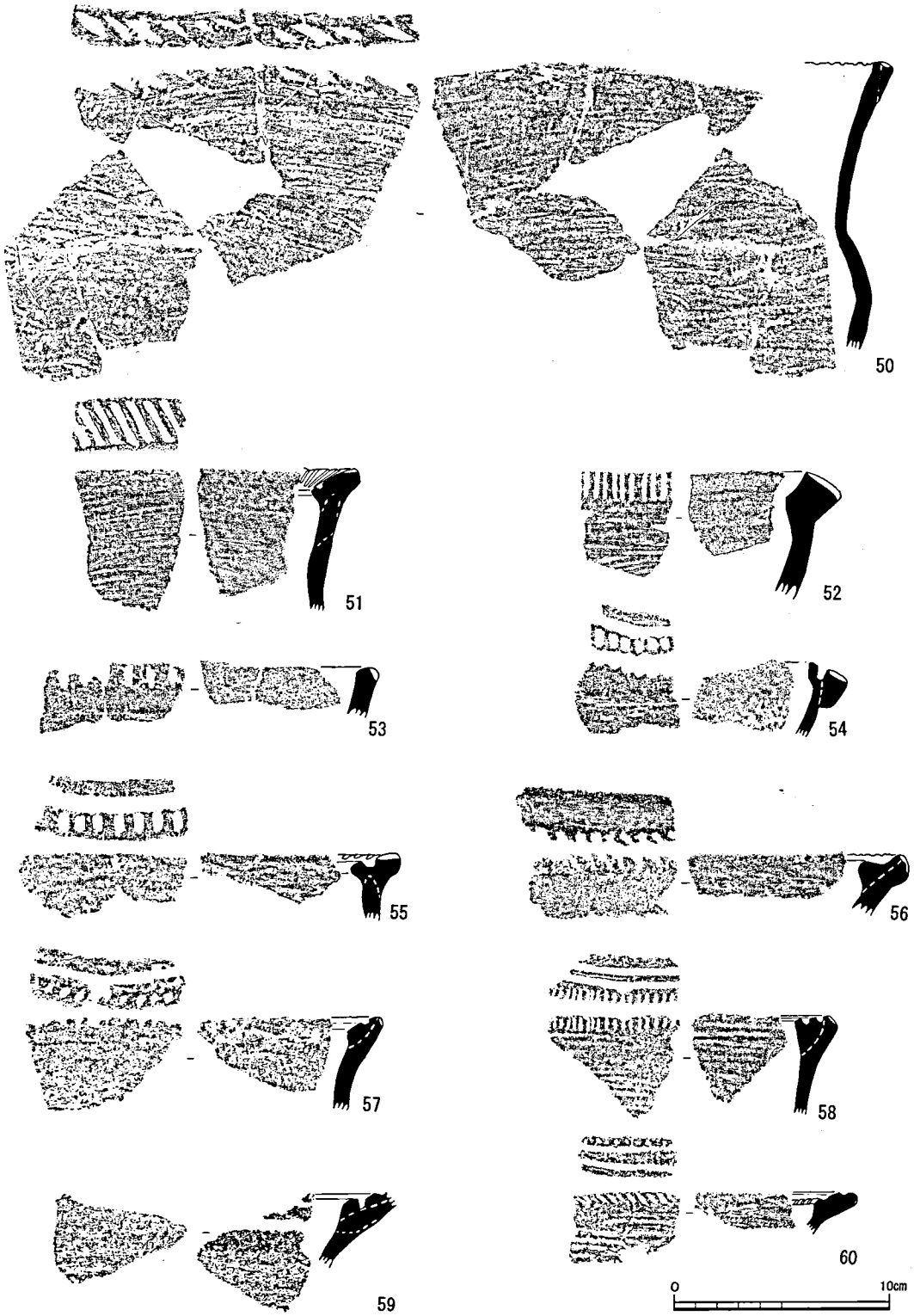
31～34は沈線の配置は磨消縄文をもつ土器に類似するが、縄文がみられない「磨消縄文系」の沈線文土器と考えられる資料である[4]。31は福田ＫⅡ式（新相）併行期の土器と考えられる資料である。横走してきた沈線が斜め左に折れているが、この屈曲点において施文工具は一度器面から離れている。32は、津雲上層式併行期の土器に通有な、口縁部を著しく肥厚させて、そこに渦文を施した資料である。しかし口縁部に文様が限定されるだけでなく、横走してきた沈線が直角に折れ曲がり、下方へと続いている点は古い要素であり、津雲上層式併行期の中でも古い段階に位置づけることができる。時期はやや前後するが、33～34は縁帯文成立期段階の土器と考えられる資料である。内面あるいは上方へと立体的に拡張あるいは肥厚した口縁部に沈線を巡らせている。33は拡張した口縁部の中央付近を若干凹めて薄くしているほか、拡張した口縁頂部に内面～外面にかけて縦位に沈線を施している。わずかな破片ながらその他の口縁端部には、やや広い端面に短い沈線を縦位に施文しているのがわかる。34は袋状に拡張した口縁部の外面に横位の沈線を巡らせている。その他の口縁部では、部分的ながら、やや広い端面の内面側に横位の沈線を、端面外側～外面にかけては沈線を施文している。

35～39は口縁部外面に沈線あるいは凹線を巡らせる土器である。35は口縁部を外側へ肥厚しており、その粘土紐接合部分にやや太めの沈線を施しているが、沈線以下の器厚は３～４㎜と非常に薄い点を考慮すると彦崎ＫⅡ式併行期の土器と考えられる。36も35と同様に、彦崎ＫⅡ式併行期の土器と考えられ、３～６㎜の薄目の器壁に、細目の沈線を巡らせている。37～39は幅広の沈線（37～38）あるいは凹線（39）を巡らせる土器で、永井Ⅷ～Ⅸ式期、あるいは岡山県倉敷市の広江・浜遺跡でみられるような土器であり[5]、彦崎ＫⅡ式よりも新しい後期後半～末頃に位置づけられる。

40～60は口縁端部に刻目を持つ、あるいはそれに沈線が加わる土器である。口縁端部の文様から、さらに刻みのみをもつもの（41～53）、刻目＋沈線を巡らせるもの（54～60）にわけることができ、以下順にみていく。40は、41以下とは若干異なり、磨消縄文系沈線文土器と思われる土器である。胴部から内湾して口縁にいたる。その外面にはやや太めの沈線によって二重の楕円が描かれている。口縁端部にはやや細目の刻目を施す。津雲上層式併行期の土器と考えられる。45を除く41～51までの土器は、肥厚した口縁端部に刻目を施した土器である。これらは口縁端部の肥厚の状況から、口縁外面に肥厚するもの（41・43～46・50）、口縁端部全体を肥厚させるもの（47～49・51～52）、肥厚がみられないもの（53）にわけられる。これらは口縁端部の刻目でみると、外面を肥厚させるものは巻貝の押圧による刻目や、刻目の上端幅が７～８㎜（44）や４～６㎜（46）、４～８㎜（50）と幅が広い点に特徴がある。また口縁端部の文様に巻貝を用いるものだけでなく、口縁外面にも巻貝を用いた刺突（45）も存在する。また、それに似た形状を呈する、斜めに裁断したと思われる竹管による刺突が施されているものもある（46）。42は特に口縁端部を肥厚させているわけではないが、刻目は４～５㎜とやや幅が広い。口縁端部を全体的に肥厚させているものには、肥厚の度合いが低いもの（47～49）と著しく肥厚するもの（51～52）がある。これらは前者では刻目の幅が４～５㎜（48）、３～４㎜（49）とやや広いのに対して、後者では３～４㎜（51）、２㎜前後（52）と狭くなる傾向にある。53は口縁端部の肥厚はみられず、刻目の位置もほかのものとは異なり口縁上面から外面へと変化する角の部分に位置しており、52までの土器よりはむしろ、後述の56以下の土器に近いと考えられる。54～60の刻目＋沈線を巡らせるタイプでは、沈線が１条のもの（54～57）、沈線が２条のもの（58～60）の２つの形態がある。これを口縁端部の肥厚部位でみると、外面肥厚するもの（54～55）、内面肥厚するもの（56～



第５図　大川浦遺跡採集遺物実測図３（縄文土器３、Ｓ＝１／３）



第６図　大川浦遺跡採集遺物実測図４（縄文土器４、Ｓ＝１／３）

第１表　口縁端部に刻目を施す土器の諸属性一覧

図面番号	肥厚部位	沈線の数	沈線上端幅(mm)	刻目上端幅(mm)	刻目の位置	備考
43	外面	－	－	7～9	端部	巻貝による押圧
44	外面	－	－	7～8	端部	
41	外面	－	－	7～8	端部	巻貝による押圧
50	外面	－	－	4～8	端部	
46	外面	－	－	4～6	端部	
55	外面	1	7	4～6	端部	
42	－	－	－	4～5	端部	
48	端部	－	－	4～5	端部	
54	外面	1	5～6	4～5	端部	
56	内面	－	－	4～5	外面隅	端部全体が緩く凹み沈線とはいえない
49	端部	－	－	3～4	端部ー外面	
51	端部	－	－	3～4	端部	
53	－	－	－	3～4	端部	
57	内面	1	3～4	3～4	外面隅	
59	内面	2	3～4	?	?	外面側の沈線は欠損および風化により不明
52	端部	－	－	2	端部	
58	内面	2	3	1～2	外面隅	沈線の太さは２条ともほぼ同じ
60	内面	2	2～3	1～2	外面隅 内面隅	内面の刻目は風化顕著 沈線の幅は２条ともほぼ同じ

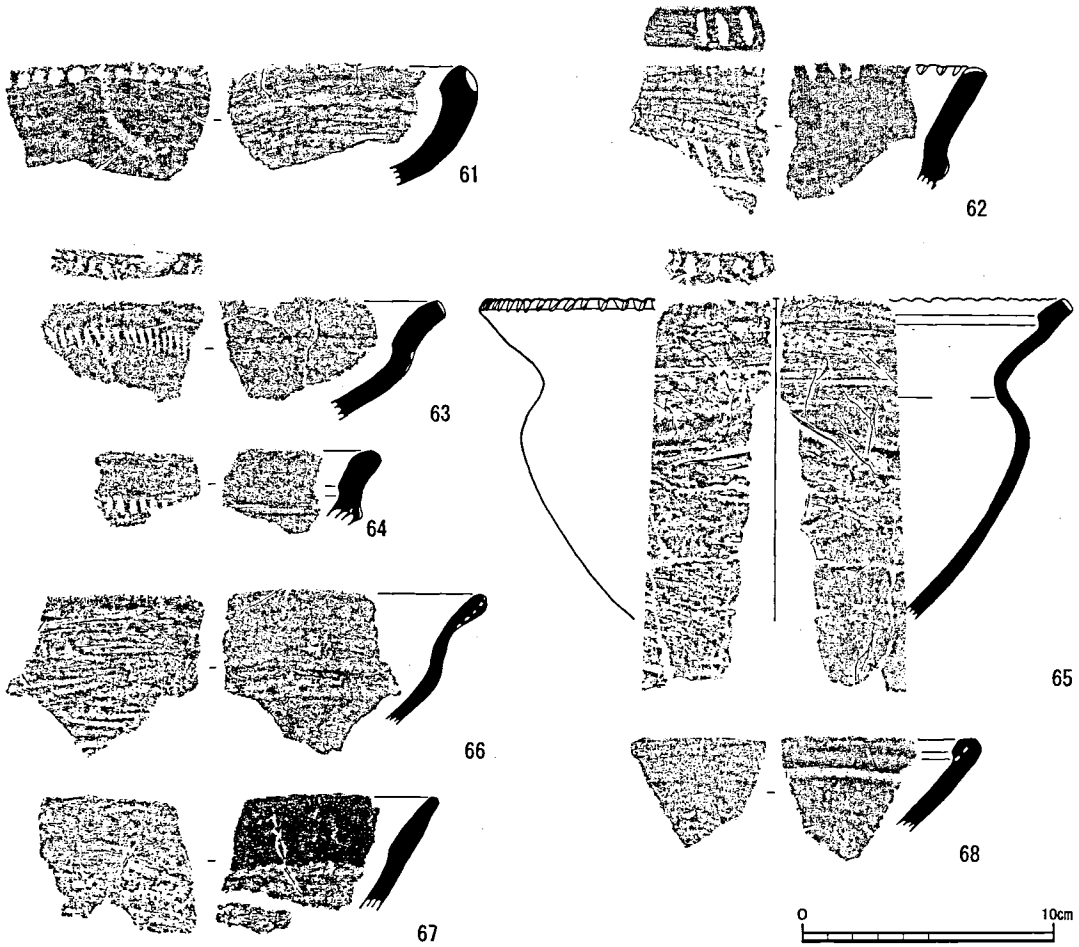
60）のように、後者に内面肥厚のものが多い。また、沈線と刻目の上端幅（以下“沈線幅／刻目幅”で表す）で違いをみると、54は５～６mm／４～５mm、55は７mm／４～６mm、56は刻目幅４～５mm、57は３～４mm／３～４mm、58は３mm／１～２mm、59は沈線幅３～４mm、60は２～３mm／１～２mmのように、沈線を２本巡らせるものの方が、沈線・刻目ともに細くなる傾向にある。このような口縁端部の肥厚部位・沈線数・沈線上端幅・刻目上端幅、さらに刻目の位置を、主に刻目の上端幅順に並べたものが第１表である。この表から、これらの各要素がおおよその相関関係をもって変異していることを窺うことができる。型式学的な観点からも、津雲上層式の外面肥厚から彦崎ＫＩ式の内面肥厚への変化だけでなく、それにともなう沈線や刻目の退化傾向、施文部位の変化なども矛盾していないと考えられる。51を彦崎ＫＩ式併行期の土器ととらえると、刻目が口縁端部隅に移動する49や56を漸移的資料として、表の上半を津雲上層式併行期の土器、表の下半を彦崎ＫＩ式併行期の土器として分離できる可能性があることを指摘しておきたい。ただし、今回の資料をみる限りでは、端部を肥厚させ刻目を施す端部肥厚タイプの系統変化だけではなく、口縁を顎状に肥厚させる磨消縄文からの系統変化が存在する可能性もある点、および今回の報告資料はすべて採集資料であり層位的な検証を行っていない点には注意が必要である。また、口縁端部にやや太めの刻目を施す資料は、対岸に位置する地御前南遺跡においても出土しており（Ⅷ類土器）、その報告中では中津式併行期の土器（報告中のⅦａ類土器）に伴う可能性が指摘されており[6]、古くさかのぼる可能性もある。

61～65は縄文を施さない有文の浅鉢と考えられる資料である。61は62～65の有文浅鉢とは異なり、口縁が内湾しており、口縁端部の刻目も円形に近い形を呈している。62～64は屈曲する肩部に刺突を巡らせるほか、62～63では口縁端部に刻目を巡らせている。肩部から口縁にかけてはまっすぐ、もしくはやや外反する程度である。65は頸部から口縁部が大きく外反する形態で、内面に肥厚した口縁端部に刻目を巡らせている。深鉢での検討を参考に、刻目の上端幅をみると、61では６mm前後、62では４mm前後（肩部の刺突は４～５mm）、63では２mm前後（肩部の刺突も同様）となる。また、64の肩部の刺突が２mm前後となっており、61は津雲上層式併行期的、63～64は彦崎ＫＩ式併行期的、62はその中

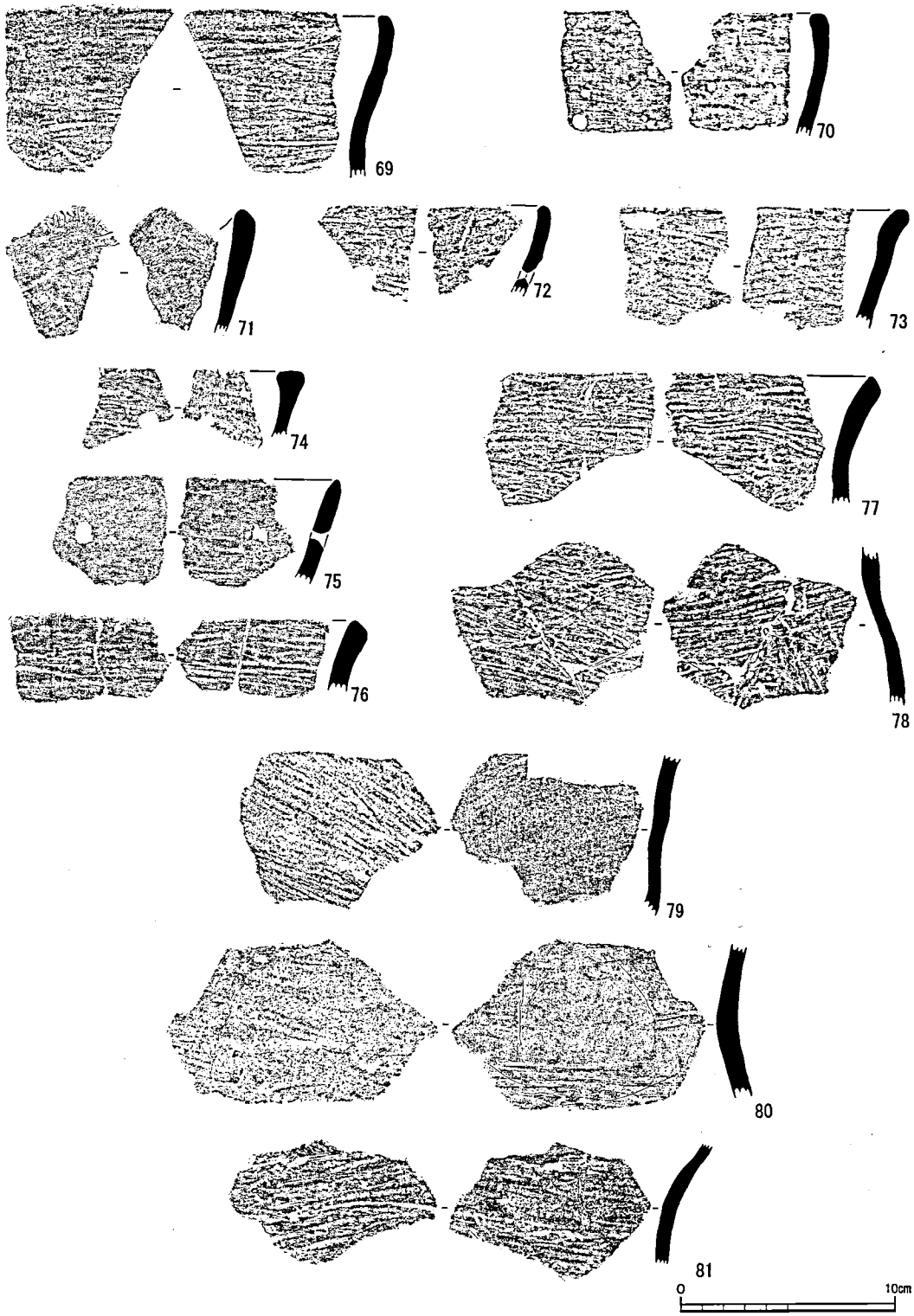
間的要素を示している。一方、内面を大きく肥厚させている66は、刻目上端幅は４～５㎜とやや太い点から、彦崎ＫＩ式併行期の中でもやや古く位置づけられる可能性が考えられる。同様な形態の浅鉢は岩田遺跡や洗谷遺跡でも出土しており(7)、津雲上層式～彦崎ＫＩ式併行期の土器に位置づけられている。

66～68は無文の浅鉢と考えられる資料である。66は63などに形態が類似しているが、肩部の屈曲が明瞭であり、新しい様相を呈している。67は口縁内面を薄く幅広く肥厚させた形態である。68は口縁端部付近の狭い範囲を内側へ肥厚させている。端部の肥厚範囲は狭いが、これは彦崎ＫⅡ式併行期にみられる口縁端部付近に施される沈線への退化がおこる前段階と考えられ、彦崎ＫＩ式併行期の中でも新しい段階に位置づけられる可能性が考えられる。67は今回類例を見つけることはできなかったが、内面を肥厚させている点や、採集資料などの内容などから彦崎ＫＩ式併行期に位置づけられよう。

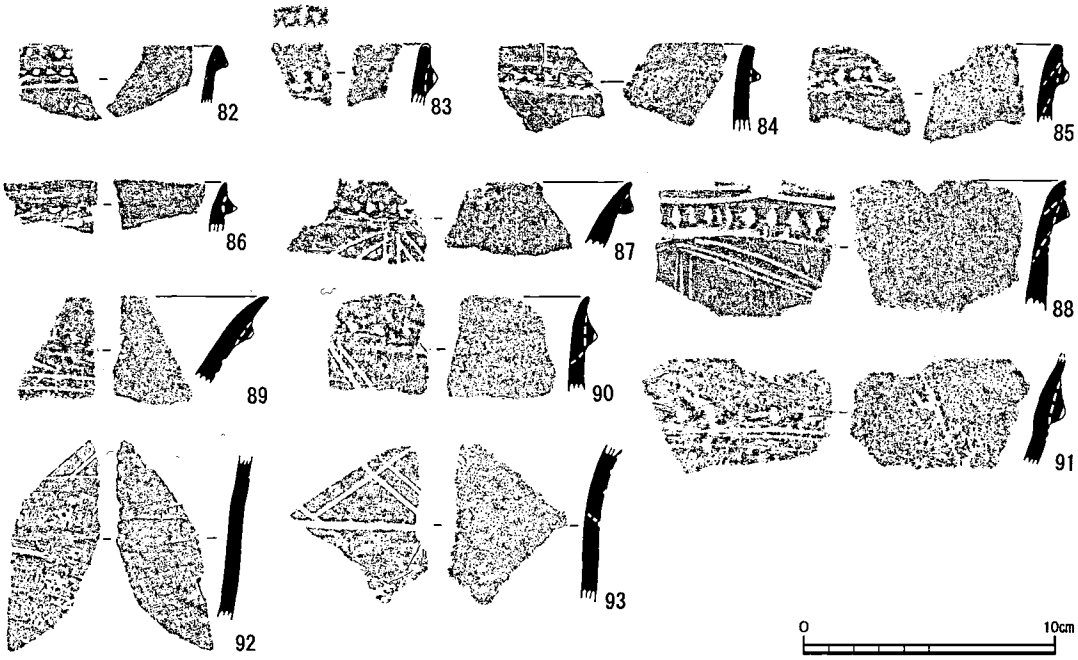
69～81は無文の深鉢と考えられる資料である。これらの中で、79が外面に二枚貝による条痕調整を行っていることが観察されたほかは、明確に二枚貝による条痕調整を認めることはできなかった。口縁部付近の破片では69や70のように内湾するものから、77や76のように外反気味のものまであるほ



第７図　大川浦遺跡採集遺物実測図５（縄文土器５、Ｓ＝１／３）



第８図　大川浦遺跡採集遺物実測図６（縄文土器６、Ｓ＝１／３）



第９図　大川浦遺跡採集遺物実測図７（縄文土器５、Ｓ＝１／３）

か、穿孔を施している資料（72・74～75）など、いくつかの形態や特徴がある。これらの特徴が時期差を示すものかどうかは他の遺跡をみてもあきらかでない。ただし、前述までの採集資料の内容から、津雲上層式～彦崎ＫＩ式併行期の土器が中心となっていると考えられる。

晩期土器（第９図、写真図版６）

82～93は晩期の突帯文土器と考えられる資料であり、突帯が残っているすべての土器に刻目が施されているが、その中には口縁端部に刻目をもつもの（82～83）や、口縁端部に刻目をもたないもの（84～87・89～90）が存在している。また、口縁端部の形態も丸みを帯びたもの（82～83・85）、平らになるもの（84）、尖り気味になるもの（86～87・89～91）がある。さらに、突帯の位置も口縁直下に位置するもの（82・87）や、突帯の断面形態にもバリエーションが認められる。文様は全体の形がわかる資料はないが、２～３本１組の斜位の沈線を基本として、それに縦位あるいは横位の沈線が加わっているようである。このような文様をもつ資料は近隣の広島市中山貝塚出土の縄文時代晩期の土器中にもみられることから、中山Ｂ式併行期とすることができる[8]。そして、これらの土器は、口縁端部に刻目を持つものが少なく、端部が尖り気味である点や、突帯が口縁直下に位置するものがある点など、比較的新しい属性が多いことからも、晩期後半頃の時期と考えられる[9]。ただし、今回の資料整理では、北部九州のように出現期の弥生土器が共伴するという弥生的要素は確認できないため、ここでは弥生時代早期ではなく、縄文時代晩期後半～末頃に位置づけておく。

以上のように大川浦遺跡では縄文時代後期中頃～後半に位置づけられる、津雲上層式～彦崎ＫＩ式併行期を中心として、縄文時代前期前半～後半、縄文時代晩期後半～末頃といったように断続的な利用が確認できた。

ii　弥生土器（第10図、写真図版７）

大川浦遺跡採集資料中の弥生土器には、甕（94～97）・壷（98～101）・高坏（102）がある。４点の甕はすべて前期に位置づけられる資料である。94を除くと、いずれも５条以上のヘラ描きの平行沈線を施している。また、95・96では１列の列点文を挟んでさらに沈線を巡らせている。これらの特徴から95～97は前期末（安芸Ⅰ－４様式）頃に位置づけられる[10]。一方、94は、口縁部の屈曲が緩やかであり、刻目が95・96よりもかなり大きくしっかり施してある点から、やや古い様相を呈しており、安芸Ⅰ－３様式頃に位置づけられよう。

４点の壷は、98・99が前期、100・101が中期に位置づけられる資料である。98は頸部から胴部にかけて比較的残りがよい資料である。頸部は削出しによって作り出した突帯上に３条の沈線を巡らせており、安芸Ⅰ－３様式に、99は３列のヘラ描沈線文の間にそれぞれ２列と１列の貝殻腹縁による刺突文を巡らせており、安芸Ⅰ－４様式に比定できよう。100は頸部が「く」字状に外側へ緩く屈曲している。また、口縁端部を若干肥厚させて格子目文を施しており、文様帯としている。頸部の屈曲が緩い点、口縁端部の肥厚が少ない点から、安芸Ⅱ様式に位置づけられよう。101は２列の波状文を施した肩付近と思われる部位の小破片である。ヘラケズリが見られない点から、安芸Ⅲ様式～Ⅳ様式前半頃に位置づけられよう。

102は高坏脚部と考えられ、上半には10（＋α）条の凹線を巡らせているが、内面にヘラケズリはみられないことから、安芸Ⅳ様式前半に位置づけられる。

以上のように、弥生土器では弥生時代前期末頃の安芸Ⅰ－４様式の土器が最も多いものの、中期後半頃の安芸Ⅳ様式前半頃までの幅広い時期の資料が採集されている。

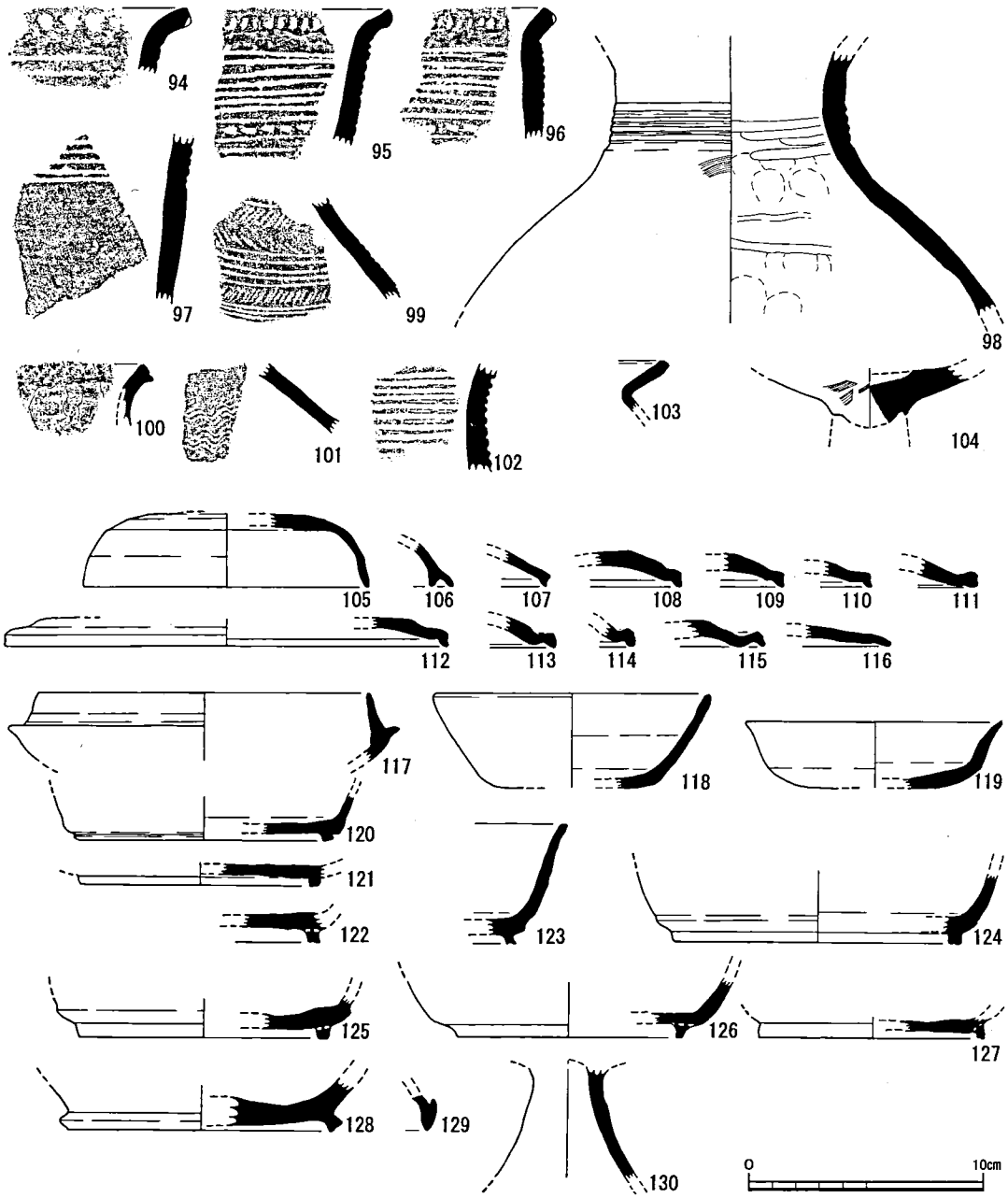
iii　土師器（第10図、写真図版７）

土師器の中で、時期をある程度押えることが可能な資料は、103・104の２点である。103は甕の頸部から口縁にかけての小さい破片である。頸部は鋭く屈曲しており、そこから口縁部はやや内湾し外側へのび、端部は内側に若干立ち上がる。これらの点から、４世紀前半頃、布留１式併行の甕であると考えられる[11]。高坏は坏底部付近のみの破片であるが、破断面の観察から、「完成した杯部をすでに一定時間をへた完成脚台上に載せるように接合した」「接合法」の手法であり[12]、土師器の中ではやや古手の手法であると考えられる。その他に時期が決定可能な資料がないため、高坏も甕と同様に布留1式前後の時期と考えたい。

iv　須恵器（第10図、写真図版７）

今回整理した大川浦遺跡で採集された須恵器には、第10図に示しているように、坏蓋（105～116）・坏身（117～127）を中心として、壷（128）・円面硯（？）（129）・高坏（130）がある。この他、破片のため今回の報告では掲載していないが、甕と思われる資料もある。これらの中で古いと考えられるのは、105～106、あるいは117のように、坏身と坏蓋の形態が逆転する７世紀前半～中頃のTK209～217併行と考えられる資料である[13]。それ以外の資料はこれらよりもやや新しくなると考えられる。坏蓋（107～116）では、口縁部付近のみの破片がほとんどであるが、口縁部が軽く屈曲するものから「Ｓ」字状に屈曲するものなどがあり、およそ８世紀～９世紀頃（MT21～TK７併行）の時期にあた

る型式のものと考えられる[10]。時期が比較的分かりやすい高台付き坏身（120～127）では、破片のため復元した大きさに問題はあるが、高台が底部外縁付近にあり、やや外に踏ん張るものから直立する形態までがあることから、坏蓋と同様にMT21～TK７併行の時期と考えられる。また、128の壷の底部も同様な時期と考えられる。129は小破片であるが、透孔が開けられており、円面硯の可能性が考えられる。130は高坏の脚部と考えられる資料である。129･130ともに小破片であり、時期の特定は難しい



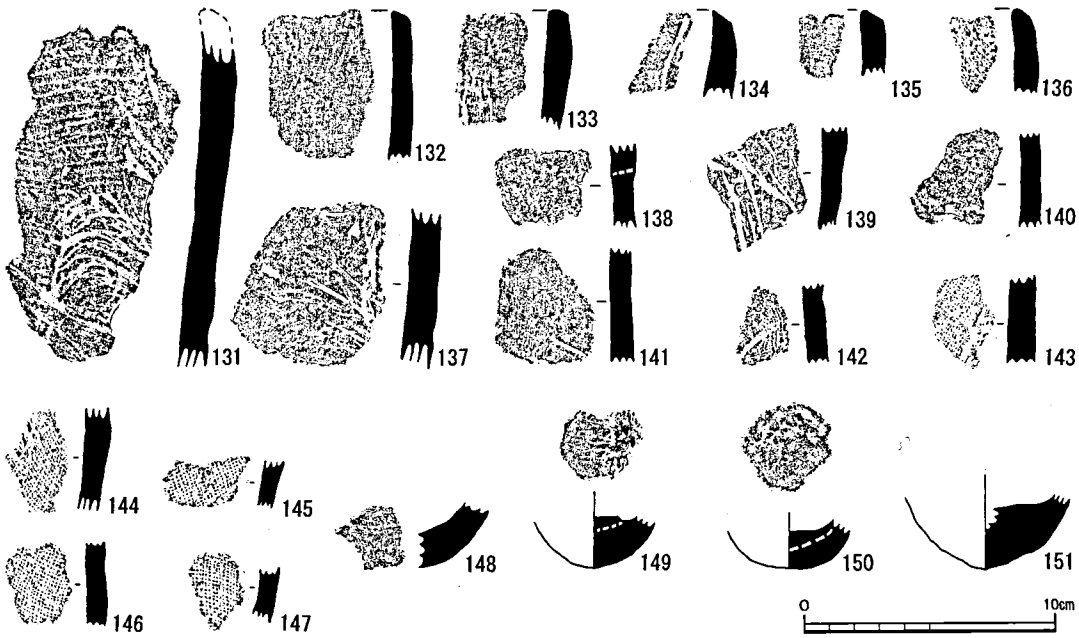
第10図　大川浦遺跡採集遺物実測図８（弥生土器・土師器・須恵器、Ｓ＝１／３）

が、坏身・坏蓋と同様に８～９世紀に属する可能性が考えられる。

ｖ　製塩土器（第11図、写真図版８）

131～151はいずれも、８～９世紀にみられる内面に布目圧痕を持つ六連式焼塩土器（古瀬分類Ｖ類[15]）である。内面の布目圧痕には、非常に細かい布目のもの（137～139）、細かい布目のもの（132～133・140～141）、やや粗い布目のもの（134～135・143・148・150）、粗い布目のもの（136・144～147）がある。また、なかには細かい布目のものとやや粗い布目のものを併用しているもの（142・149）や、布とその他の植物質織物（？）を併用しているもの（131）などがあり、型による土器作りに使用する布の材質や布目の細かさは、時期差を示すものではないことを表している。Ｖ類はTK７併行の時期とされており[16]、前述の須恵器と同時期のものであると考えられる。今回整理を行った資料の中には、これよりも古い型式はみあたらなかった。

以上、大川浦遺跡採集の土器についての整理報告をおこなったが、今回の報告での特徴は縄文時代後期の土器と、古代の須恵器と製塩土器である。縄文時代の資料は昨年度の報告[17]と同様に後期が中心であるが、前期の資料と後期の資料がやや多い点は異なっており、特徴ということができる。また、後期の土器でも津雲上層式併行期から彦崎ＫＩ式併行期にかけてのまとまった土器が採集されている点は、厳島の利用状況を知るうえで貴重である。また、８～９世紀の同時期のものと思われる須恵器と製塩土器が採集されている点も、1168年の平清盛による厳島神社建立の前時代における厳島の利用状況を知ることができる点で同様に評価できる。さらに少数ながら弥生時代～古墳時代の土器も採集されているほか、今回は細片が多く掲載はしていない中世以降と思われる土師質土器も採集されてお



第11図　大川浦遺跡採集遺物実測図９（製塩土器、Ｓ＝１／３）

り、他の地点よりもこの遺跡が頻繁に利用されていたことを窺うことができる。　　（加藤　　徹）

⑵　石器類

大川浦遺跡では、100点あまりの石器類が発見されており、縄文土器とともに採集遺物ではあるがまとまった資料である。多くは縄文時代の石器と考えられる。製品および石核を中心に図化可能のものを掲載したが、以下に石器類の種類ごとに述べていきたい。なお、大きさ、重さ等の計測値（現存値）は一覧表に記してある。

なお、打製石器類については、主にサヌカイト・安山岩が利用されていたが、肉眼的な特徴により、以下のように分類して、記述していきたい。

サヌカイト・安山岩の分類

a　剥離面でみると青黒色に風化し、フィッシャーにそった白筋が顕著でザラザラとしており、金属質の質感のある石材である。また、石理にそった縞目の認められる資料もある。

b　石質としては、aに類似するが、風化が進み灰色味～黄褐色味を呈する。

c　剥離面で見ると、表面は緻密で、光沢感はない。青黒色～青灰色を呈する。

d　その他　種々の資料があるが、それぞれ1～数点であり、個別には分類は行っていない。

なお、a類およびb類の自然面では、石理にそった筋目が顕著であった。c類の例では、気泡状の風化面が観察される例や「(」形の衝撃痕で覆われた例も認められたが、a、b類にくらべ、石理は明瞭ではなかった。

i　各石器類の特徴

槍先形尖頭器（第12図、写真図版8）

152は、先端を欠損しているが、復元長5cm程度の小型の槍先形尖頭器である。両面ともに全面にわたり丁寧に加工されているが、基部付近の側面には自然面が残る。サヌカイト・安山岩c類製。旧石器時代終末～縄文時代草創期のものと考えられる。

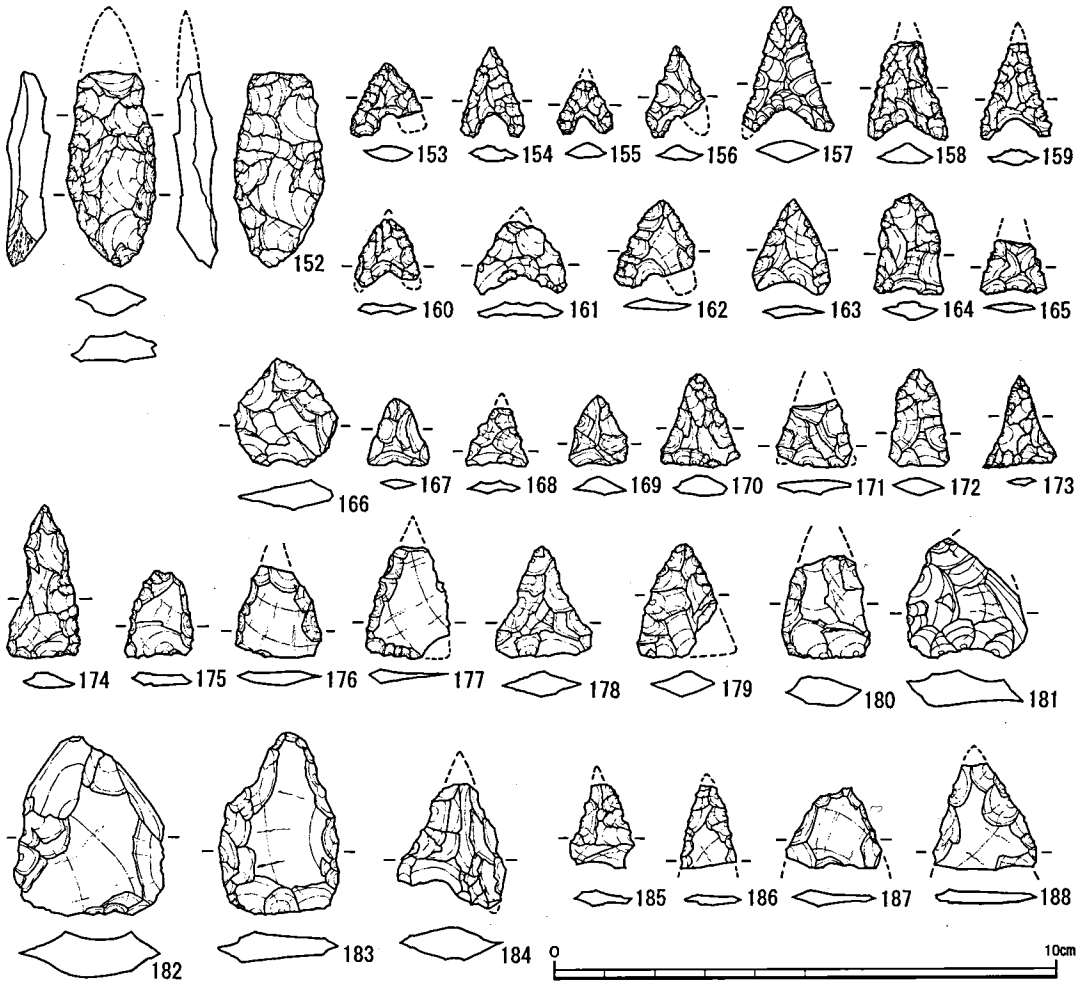
石鏃（第12図、写真図版8）

採集資料の大半である36点を図化しているが、灰白色黒曜石製2点（157、181）以外はサヌカイト・安山岩製である。石鏃の形態分類については、基部形態および茎の有無を基準とした佐原真の分類[08]に従い、また、凹基無茎式については、抉りの形態により次のように4類に細分し[09]、記述していきたい。1類は、抉りが浅く弧状に近い形を呈する石鏃、2類は抉りが比較的浅く低三角形に近い形を呈する石鏃、3類は抉りが深く正三角形ないし長三角形に近い形を呈する石鏃、4類は抉りが深く逆U字に近い形を呈する石鏃である。なお、185～188については、基部を欠損した資料である。また、石鏃の加工については、両面ともに全面に加工を施した例、周辺あるいは一部のみ加工し素材面を大きく留める例などが認められた。全面加工の例でも、中央に素材面とみられる面を小さく留めている例も認められた。なお、加工の特徴については、一覧表に記しておいた。

これらの石鏃はいずれも採集資料のためセット関係などは分からないが、形態から見ると数時期におよぶ時期差が認められるようである。153は凹基式石鏃で基部の抉りが深く逆U字状を呈した4類であり、また、182はやや加工の弱い粗製であるが、大型厚手の平基無茎式の石鏃と考えられる。これ

らの形態の石鏃は、広島市早稲田山遺跡[20]、島根県堀田上遺跡褐色土中出土資料[21]など、中国地方西部で早期の黄島式押型文土器段階に特徴的にみられる形態である。ちなみにこれらは、サヌカイト・安山岩c類製資料であるが、この石材にはこうした古相の資料が含まれるようである。

比較のためにサヌカイト・安山岩製の種類ごとに石鏃の形態をみてみよう。c類では、平基無茎式3点（171、177、182）、凹基無茎式1類1点（166）、2類1点（184）、3類1点（155）、4類1点（153）である。b類では、平基無茎式2点（169、180）、凹基無茎式1類2点（163、167）、2類1点（158）、3類2点（154、156）である。a類では、平基無茎式6点（170、172～174、176、178）、凹基無茎式1類2点（164、165）、2類1点（160）である。風化の進んだb類と概して風化の新しいa類の間で、形態の面で平基式の増加といった差が認められるのは興味深い。この平基式の形態の石鏃は、近くでは尾道市因島大浜遺跡の晩期の資料に特徴的な形態であり[22]、この時期に対比されるものと考えられる。採集土器からみると前期、後期から晩期の数時期におよぶ石鏃が混在した状況を示しているものと考えられる。なお、灰白色黒曜石製の石鏃については、157は大型で丁寧な作りの凹基無



第12図　大川浦遺跡採集遺物実測図10（槍先形尖頭器・石鏃、S＝2／3）

茎式２類であるが、181は同１類とみられるが厚手で粗い作りの資料である。なお、先端は欠損している。

石錐（第13図、写真図版９）

いずれもサヌカイト・安山岩ａ類製で、錐部とともにつまみ部を二次加工により作り出している。つまみ部には表裏ともに素材剥片の剥離面が残る。使用に伴う摩耗痕は特には観察されない。189は、比較的丁寧に二次加工が施されている。190は、錐部については大きめ剥離の二次加工を施した後、部分的に細かな加工で成形しており、また、つまみ部上縁については折断およびその後の小加工により成形しており、比較的簡略な作りである。

スクレイパー（刃器）（第13図、写真図版９）

サヌカイト・安山岩製および水晶製がある。なお、石匙に相当するものは今回の資料には認められなかった。

サヌカイト・安山岩製のスクレイパーの内、192～194、197は、横長状の剥片の末端縁辺部に刃部を作っている。193、197は、刃部を両面加工により作出しているが、197については、スクレイパーの背部側は折損している。192、194は、素材剥片の主要剥離面側の片面に刃部加工が施されており、192については背部側の正面から見て右半には加工が認められる。193、194、197はサヌカイト・安山岩ｂ類製、192はサヌカイト・安山岩ｃ類製である。195、196、198は不定形剥片の主に一辺に刃部が作られている。195、198は剥片末端側の縁辺に刃部を作っており、198については折損している。196は剥片の打面側から側縁に刃部を作っている。これらはサヌカイト・安山岩ａ類製である。

水晶製の191は、縦長状の剥片の両側縁に細かな剥離が認められるので、スクレイパーとして捉えているが、あまり整った加工のものとは言えない。

楔形石器（第13～14図、写真図版９）

いずれもサヌカイト・安山岩製である。200～205、207～209のように多くは両極剥離に伴う截断面を有しており、199については楔形石器の截断によって生じた削片（スポール）である。

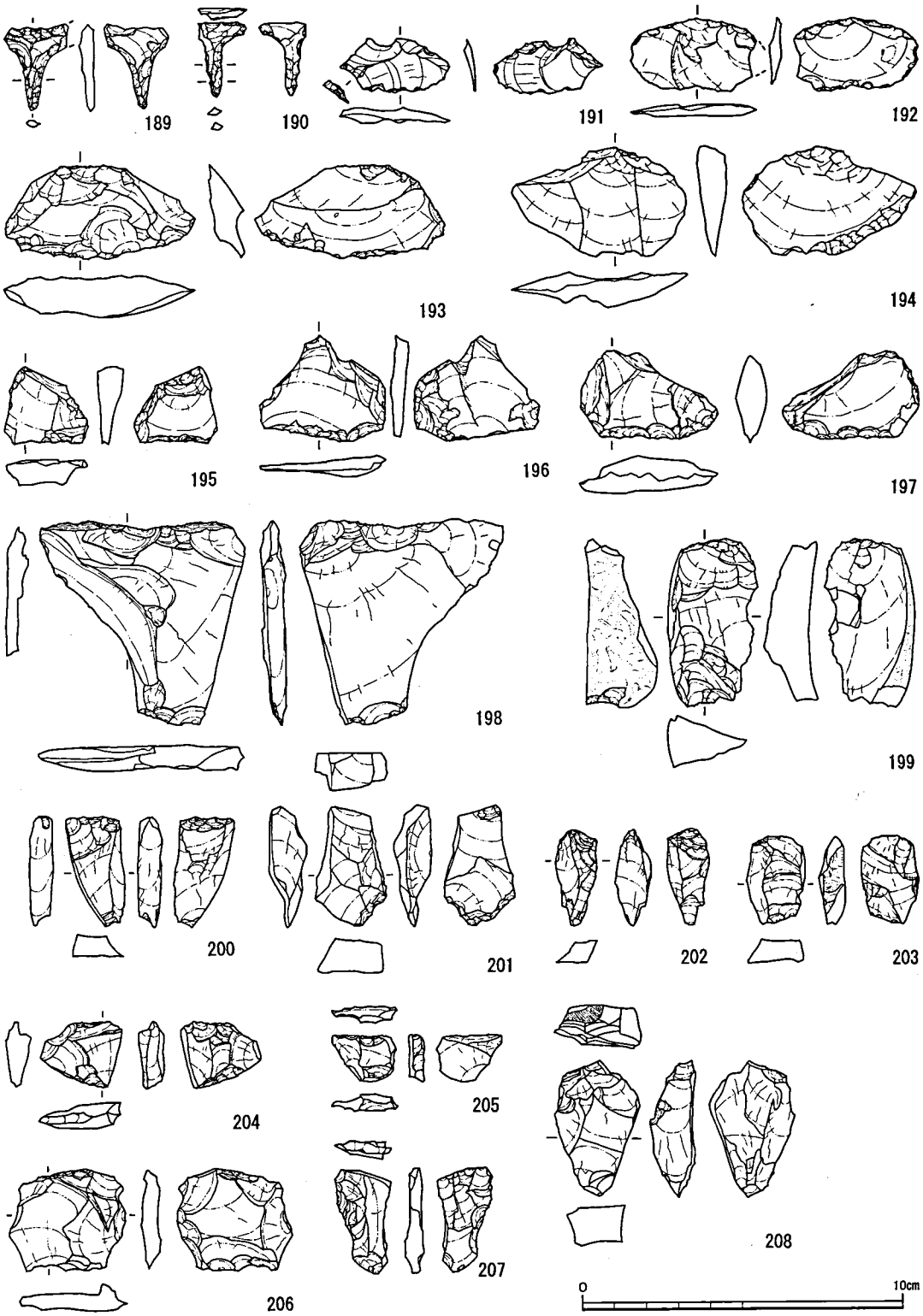
本遺跡の楔形石器の断面形状等の特徴から見ると２種類が認められ、一つは断面が厚さの違いはあるものの板状を呈する例（200～208）、いま一つは断面が比較的湾曲した形状をもつ例（209、なお199は削片ではあるが同様の特徴をもつ）である。前者では、サヌカイト・安山岩の内、ａ類６点、ｂ類２点、ｃ類１点で、ａ類が多いのに対し、後者はいずれもｃ類であり、以上の特徴の差は石質あるいは素材の差に関連するものとみられる。なお、207は上面が截断面で、ここから両極剥離が加わっており、205では、上下面がいずれも截断面でここから両極剥離が加わっている。これらは、先ほどの前者の例に含まれる資料である。

打製石斧（打製土掘具）（第14図、写真図版９）

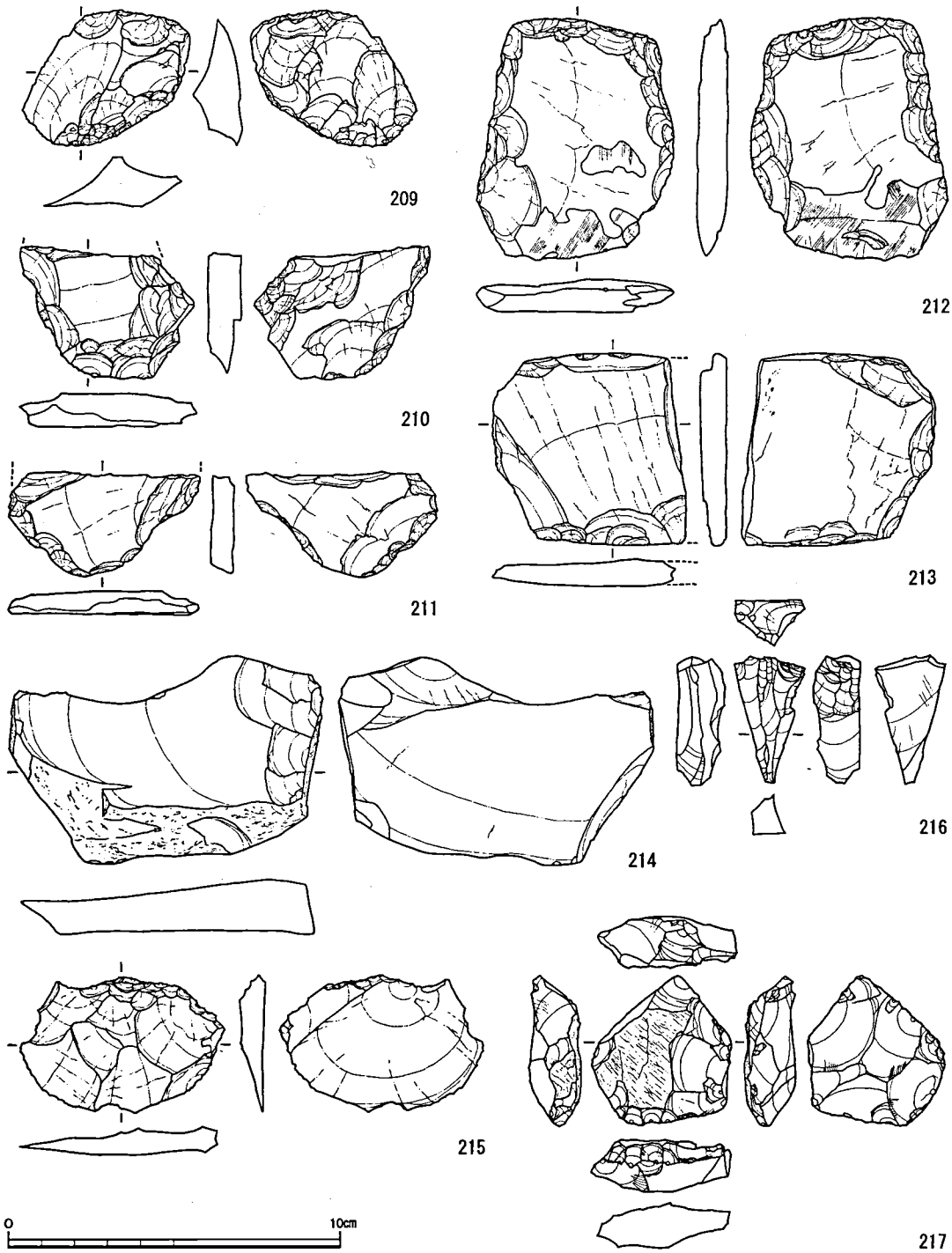
210、211は、淡緑色の片岩系の石材を使用しており、210には白色の節理が脈状に貫入している。いずれも板状に剥離された素材の縁辺部に加工が施されており、打製石斧（打製土掘具）の可能性が考えられる。なお、使用に伴う磨耗痕などは特に観察されない。

部分磨製刃器（第14図、写真図版９）

212は、淡緑色の片岩系の石材を使用しており、白色の節理が認められる。板状に剥離された素材の上辺および両側辺の縁辺部に打撃による二次加工が施されており、下辺およびその周辺の体部の一部



第13図　大川浦遺跡採集遺物実測11（錐・スクレイパー・楔形石器１、Ｓ＝１／２）



第14図　大川浦遺跡採集遺物実測図12
（楔形石器２・打製石斧・刃器・剥片・石核１、Ｓ＝１／２）

は研磨が施されている。なお、下辺の研磨面の一部には磨き残された剥離面の痕跡が認められ、研磨以前に下辺にも打撃による加工が施されていたとみられる。研磨面は、打製石斧（打製土掘具）の使用に伴う磨耗痕である可能性も考慮されるが、整った形状となっており、刃器として利用されている可能性を想定した。

石核・剥片類（第14～16図、写真図版９～10）

石核・剥片類としては、サヌカイト・安山岩製のものが多く、灰白色黒曜石の資料も認められる。この他には、数は少ないが、黒色黒曜石製の例などもある。以下、石材ごとに石核・剥片類の特徴を述べていきたい。

・灰白色黒曜石製資料

大分県姫島産黒曜石製と推定される資料である。216～218は、石核である。216、218は、打面と作業面を固定し一方向から剥片を剥離している。216は、上面が打面、正面および右側面が作業面であり、裏面には素材剥片の主要剥離面が残っており、剥片素材の石核である。218は、上面が打面、正面が作業面であり、裏面は図では礫面状の表現となっているが、黄白色の不純物も認められる面である。裏面のこうした特徴は姫島産黒曜石の節理状の面でよく見られるもの[23]であり、自然面ではなく節理で割れた面の可能性も考えられる。217は、裏面下部にポジティブな面が認められ、剥片素材の石核である。剥片を素材とし、縁辺で打面と作業面を適宜交代しながら剥片剥離している。以上の灰白色黒曜石製石核の内容は、近くでは山口県岩田遺跡などの姫島産黒曜石の石核に共通するものである[24]。本遺跡では、以上のように石核類も認められ、姫島産黒曜石で剥片剥離を含む石器製作が行われていたと考えられる。

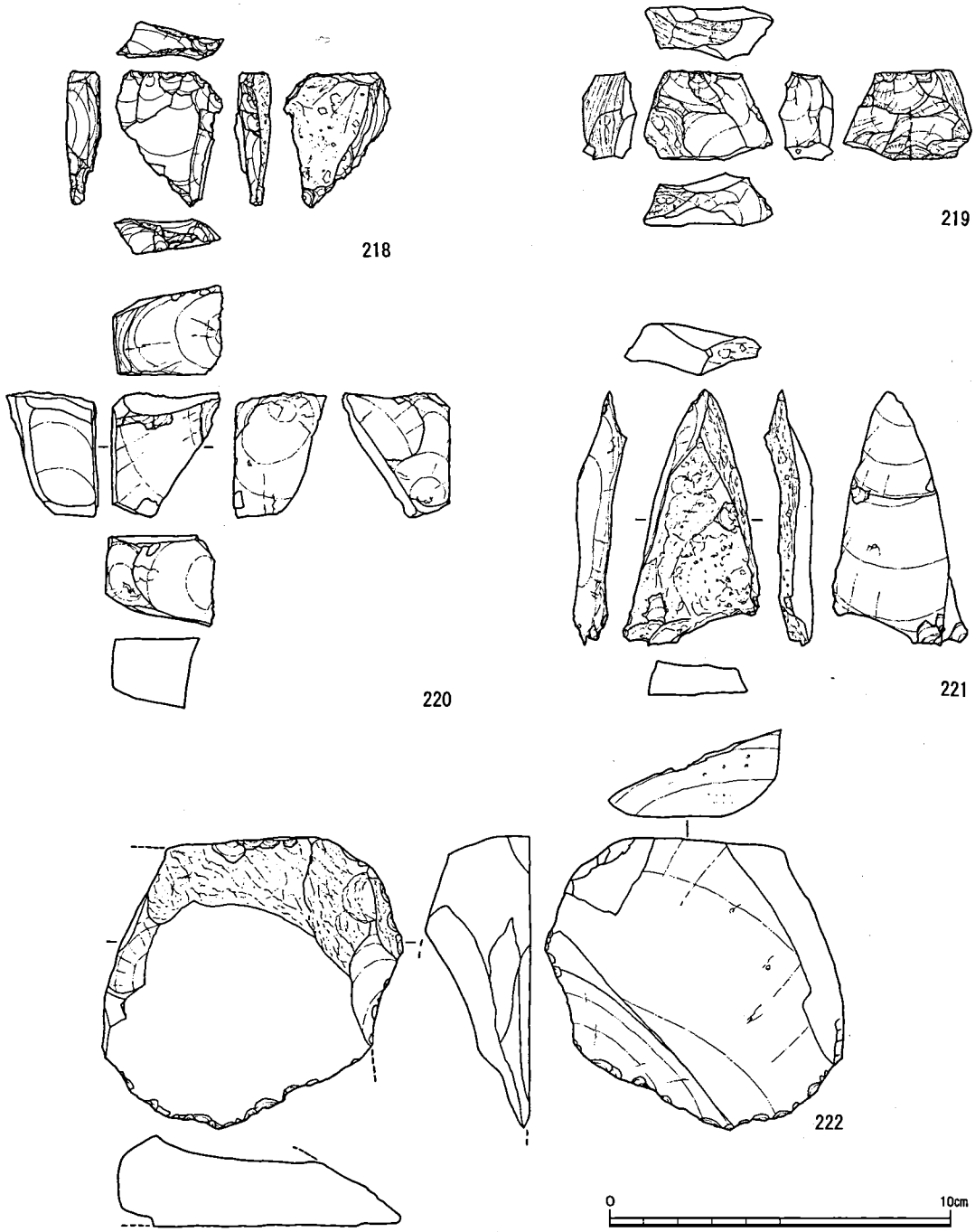
・サヌカイト・安山岩製資料

サヌカイト・安山岩製の石核・剥片類については、特にａ類およびｂ類製のまとまった資料が認められた。

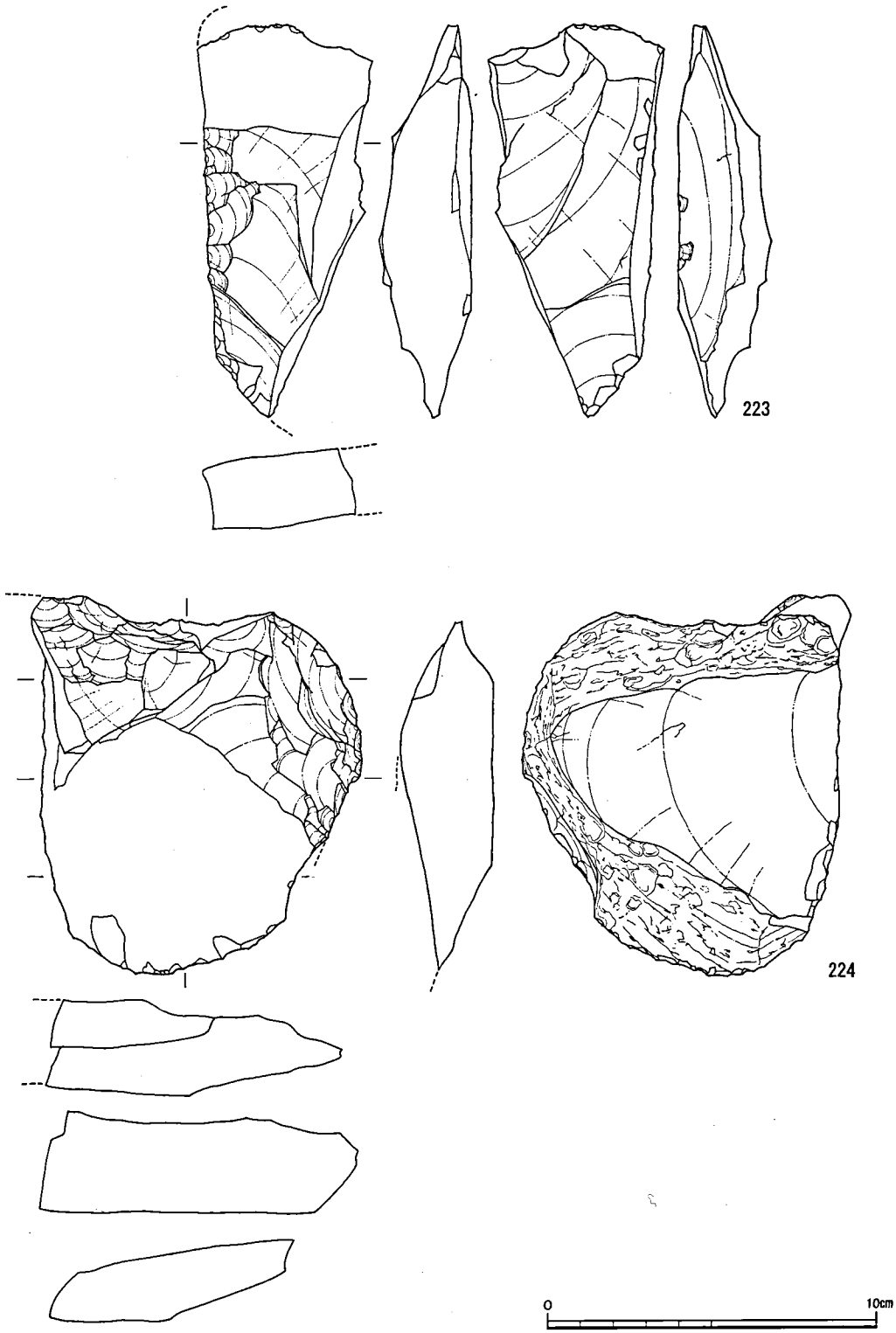
222～224は、剥片を剥離したネガティブな面が認められ、石核として分類される資料であるが、大型厚手の板状を呈する資料であり、瀬戸内を中心に広域に分布する香川産サヌカイトの、石器原材である板状石材[25]に共通する特徴をもっている。石材は、サヌカイト・安山岩ｂ類製である。これらの資料は、いずれも新しい欠損面がみられ、元々はより大型であったものである。重さは、現存値でそれぞれ、188.7ｇ、171.7ｇ、390.1ｇである。なお、222、224には側面を中心に自然面が認められる。223の両面および224の正面には、ネガティブな小剥離痕が多く認められ、遺跡において剥片生産に利用されていたことが想定される。しかし、222～224のいずれの資料も、片面もしくは両面に、原石から板状に剥離した際の、大剥離面が部分的に残っており、ほぼ板状の石器原材の形態を留めているものと考えられ、厚さも、それぞれ3.1cm、2.8cm、3.1cmと厚手である。なお、224については接合資料であるが、接合面の風化はほとんど進行しておらず、これは新しく割れた小片が接合したものである。また、223の新しい割れ面は、222、224の黒い割れ面よりは風化しており、再利用の可能性もあるが、表面採集品のため、その認定は難しい。

220は、洗谷型剥片剥離技術による板状石材からの剥片生産の際に生じる、原材・石核片[26]に相当する資料である。サヌカイト・安山岩ａ類製である。正面および裏面の一部には、原石から板状の石器原材を剥離した際の大剥離面の平坦な面が残っており、この面での厚さは2.7cmであり、222～224の厚

さにほぼ対応している。220の上下面、両側面は截断面であり、これらの数枚の截断剥離によって、板状の石器原材もしくは石核から破砕したものである。なお、下面截断面については、裏面の一部まで剥離面が及んでいるが、打点は剥離面の内部に収束している。



第15図　大川浦遺跡採集遺物実測図13（石核２、Ｓ＝１／２）



第16図　大川浦遺跡採集遺物実測図14（石核３、Ｓ＝１／２）

219は、両極剥離による石核であり、形態的には楔形石器に近い。正面から見て上面および左側面は自然面であり、右側面および下面は截断面である。なお、左側面の截断面の後に下面の截断面が生じている。上面の自然面と下面の截断面を打面として、両極剥離により剥片が剥離されている。サヌカイト・安山岩a類製である。

221は、石核の破片であり、正面から見て左側面は折損面である。正面および側面には自然面を留める。裏面下半にはポジティブな剥離面が認められ、原石から剥離された剥片が素材となっていることが分かる。裏面にはこの面の後にネガティブな面が剥離されており、石核として分類した。板状の石器原材の破片の可能性も考えられる資料である。サヌカイト・安山岩b類製である。215は、サヌカイト・安山岩b類製の剥片で、扁平な石核の縁辺から交互剥離的な方法で剥離されている。

以上に示したサヌカイト・安山岩製の石核・剥片類の内容から見ると、瀬戸内中央部を中心に分布する洗谷型剥片剥離技術の内容に相当していると考えられる。また、この技術で石器原材として利用された、板状石材に相当する資料も認められる。なお、板状石材に相当すると考えられる資料である222～224の剥離面の風化度は、福山市洗谷貝塚の洗谷Ⅸ類土器（彦崎ＫⅠ式）段階の板状石材[20]と比較すると、概して風化が進んでいる。

・その他の石材製の資料

黒曜石では、灰白色製の資料以外に、黒色黒曜石製の剥片1点がある。長さ1.5cmの小型の資料であるが、刃こぼれ状の剥離が認められ、使用痕ある剥片の可能性がある。透明感のある石材であり、西北九州産の黒曜石の可能性がある。

また、214は剥片として分類した資料である。裏面側の主要剥離面とみられる面は、摩耗のためかリング、フィッシャーがあまり明瞭ではないが、打点側を欠損していると考えられる。打面および側面は、自然面とみられる。剥離面でみると淡灰褐色に風化した石材であるが、新しい欠損面は黒色である。頁岩あるいは粘板岩に類似した石材とみられる。

石錘（第17図、写真図版10）

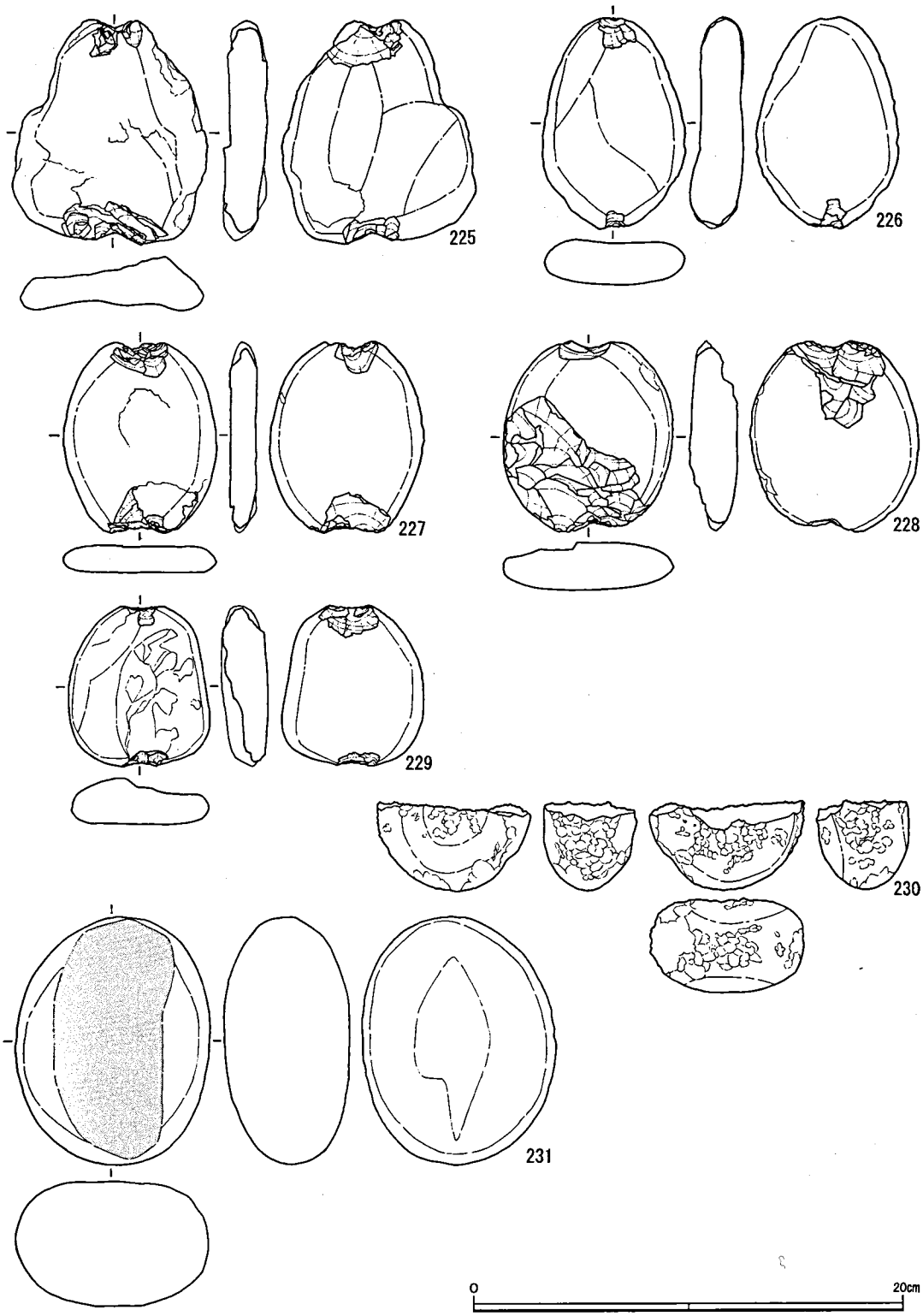
礫の上下両端に打撃による加工を施した、打ち欠き石錘である。225は、ややいびつで扁平な亜円礫、226～229は扁平な円礫を素材としている。

磨石（第17図、写真図版10）

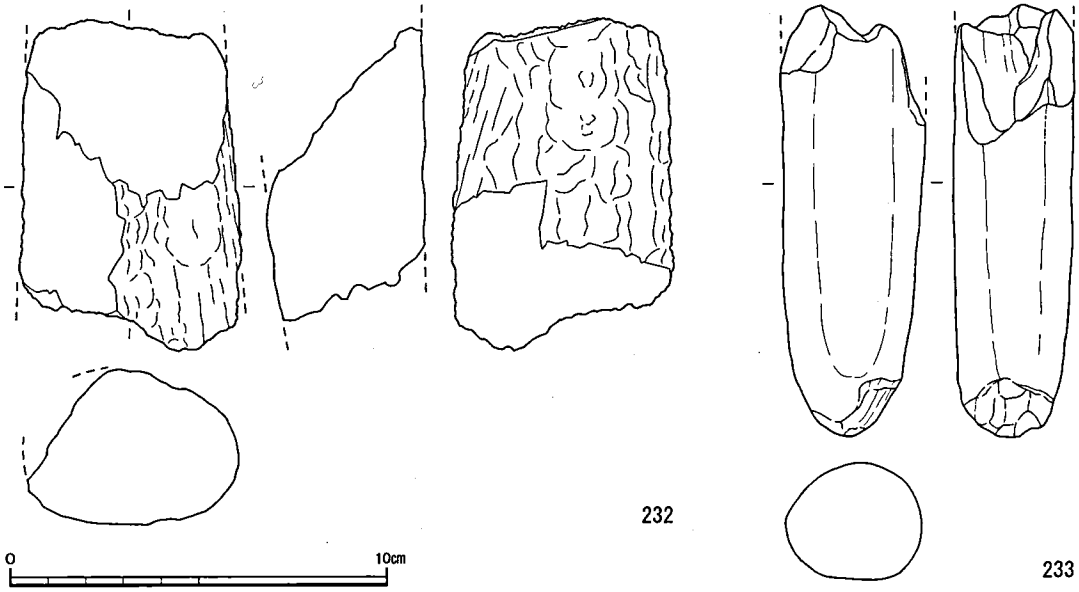
230は、欠損しているが、両面には磨痕および敲打痕、側面および下面に敲打痕の認められる資料であり、磨石兼敲石として使用されている。231は、両面に磨痕が認められる。正面の磨面については、よく研磨が進み、また、湾曲しながら上下両端近くまで長く磨面が及んでいる。この面が主要な使用面であったとみられる。

石製品ほか（第18図、写真図版９・11）

232、233は、石棒の可能性が想定される資料である。233は、淡緑色の片岩系の石材を使用しており、端部のみの破片である。棒状の体部には、石材の石質に因るとみられる縦方向の筋目の他は、敲打痕とみられる痕跡が散見される。端部については、敲打痕跡が集中してみられる。形態から石棒の可能性を想定した。232は、銀色味を帯びた灰黒色の片岩系の石材を使用しており、上下端を欠損している。棒状の体部には、石材の石質に因るとみられる縦方向の筋目、敲打痕とみられる痕跡が認められ、表面は凹凸が顕著で、あまり整った器面とはなっていない。形態的に石棒の可能性を想定してい



第17図　大川浦遺跡採集遺物実測図15（石錘・磨石、S＝1／3）（トーンは磨面を示す）



第18図　大川浦遺跡採集遺物実測図16（石棒、S＝1／2）

るが、原材のもともとの形状に因るものであるかどうかも考慮が必要であろう。当地域の同様な類例の増加をまって検討を加える必要がある。

233は、濃緑色の片岩系の石材を使用しており、正面から見て右半部を欠損している。板状に剥離された素材の上下両端および正面左側辺には、小剥離が両面に施されている。また、上面および下面は研磨により面取りされており、裏面にも一部研磨が施されている。平面形が長方形状の扁平な製品を作ろうとしているようであるが、性格については不明である。

ii　大川浦遺跡採集の石器類について

今回報告した石器資料は、すべて採集品ではあるが、形態的に時期の推定できたものも認められた。土器資料をみると、縄文時代には後期を中心に前期、晩期のものがあり、石器類も基本的には、こうした時期に対応しているとみられる。ところで、石器類には、槍先形尖頭器のように旧石器時代終末～縄文時代草創期の資料、石鏃の282、359のように早期中葉に相当すると考えられる資料も認められ、こうした時期にも本遺跡は活動の場になっていたと考えられる。

また、石鏃の項でも指摘したが、サヌカイト・安山岩ｃ類には、このような縄文時代でも古い段階の資料が含まれているようであり、槍先形尖頭器についても、この石材を使用していた。サヌカイト・安山岩ｃ類については、広島市早稲田山遺跡の早期の石器類[20]など縄文時代では古い段階を中心に広島湾岸地域などで利用されている、広島県冠山地域産の安山岩に共通した特徴をもっている。なお、ｃ類の自然面については、槍先形尖頭器152と楔形石器209では、気泡状の小さな凹凸で覆われた自然面であり、早稲田山遺跡の石器類の自然面と共通の特徴を示していた。楔形石器199については、円礫状の自然面で、表面は摩滅し、「(」状の衝撃痕で覆われていた。こうした自然面の特徴の差は、原石の採取地の違いを示すものであろう。

一方で、石鏃、スクレイパー、石錐、楔形石器などの打製石器類では、多くは、サヌカイト・安山岩製ａ類およびｂ類が使用されていた。石核・剥片類の検討からすると、これらの石材の石核・剥片類の内容は、技術的には瀬戸内中央部を中心に広域に認められる、香川産サヌカイトを利用した洗谷型剥片剥離技術の特徴に共通していた。サヌカイト・安山岩ａ類およびｂ類の石理の顕著な特徴は、金山産サヌカイトを代表とする香川産サヌカイトに通ずるものであり、今後、岩石学的検討や理化学的な分析などの研究も必要であろう。広島湾岸地域においては、遺跡出土石器類の産地推定例は少ないが、前述した早稲田山遺跡以外では、廿日市市地御前南遺跡の縄文時代後期の資料について、冠山地域産安山岩とともに金山産サヌカイトが利用されているとする推定例はある[29]。今回の大川浦遺跡の資料については、板状石材に相当する資料も認められ、広島湾岸では従来あまり知られていなかった香川産サヌカイトの石器原材が流入していた可能性を示す資料としても重要である。そして、この石材の打製石器類、石核・剥片類の内容から見ると、石器原材も搬入し、ある程度一貫した工程の石器製作が本遺跡で行われていたと考えられる。なお、姫島産黒曜石と推定される灰白色黒曜石製の資料についても、石核や剥片も認められ、本遺跡で石器製作まで行われていることが読み取れた。

また、サヌカイト・安山岩ａ類製の石鏃には、縄文時代晩期に特徴的にみられる平基式石鏃もまとまって認められた。そして、サヌカイト・安山岩ｃ類は前述したように古相の資料を含んでいたが、こうした面から見ると、サヌカイト・安山岩製石器類については、概してｃ類製からｂ・ａ類製への利用石材の変化があったことを示していると考えられる。こうした変化は、本遺跡の位置する厳島、そして広島湾岸地域の縄文時代遺跡の、多地域との関係、あるいは地域間交流に関わっている問題と考えられ、今後さらに体系的に研究を進めていく必要があろう。　（竹広　文明）

(3) 青銅鏡

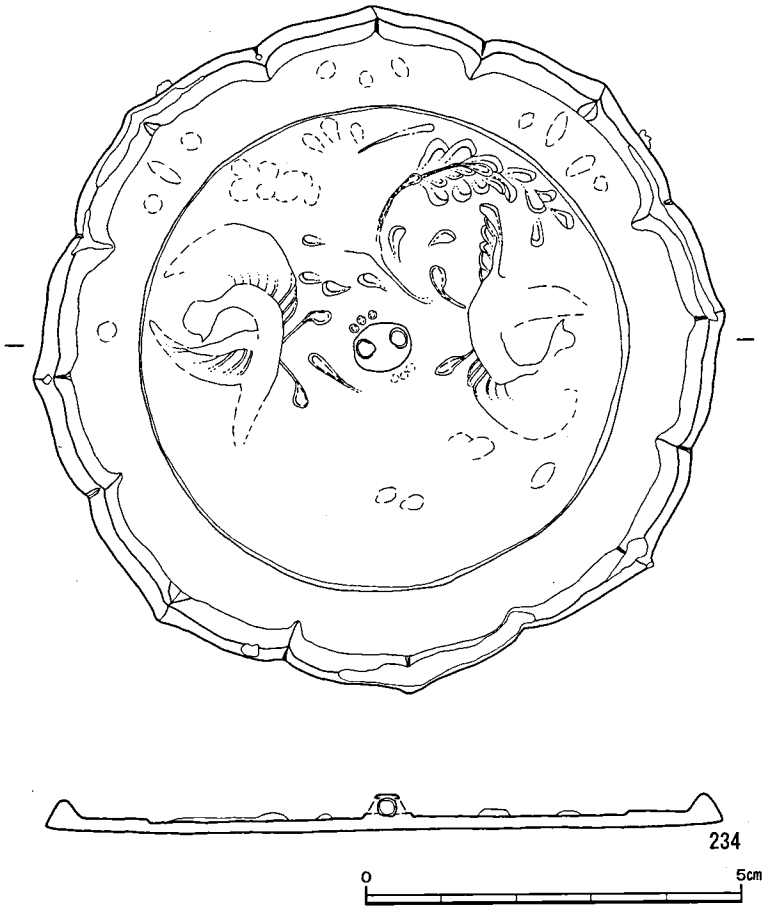
本鏡は、瑞花双鳥八稜鏡である。直径9.05cm、縁厚４㎜、重さは61.4ｇである。全体的に錆で覆われている。また、踏み返しによる製品のためか鋳上がりが悪く、文様は非常に曖昧である。内区は鈕側に足を向けた一対の鳥が対置して配されている。その間には瑞花１対が配されているが、一部分しか確認できない。

鈕は、径6.8㎜、高さ５㎜である。鈕の周りには直径１㎜ほどの珠文が配されている。外区にも一部に文様がみられるが、はっきりと確認することができない。また、内区と外区との段差が明瞭でない点も本鏡の特徴であり、これも踏み返しを受けたためと考えられる。研磨痕についても、錆が著しく、確認できなかった。

瑞花双鳥八稜鏡に関しては、杉山洋によって分類と編年が行われている[30]。本鏡は、内区鳥文の、簡略化の程度から杉山分類のＤもしくはＥに相当するものといえる。内区唐草文に関しては、文様が不明瞭である。鳥文の配置は、鈕をはさんで外向きに配される分類Ｂで、鈕座は分類Ｃ、圏界の形は円圏で分類Ａ、外形は、八稜が整っていないタイプで分類Ｂ、面径は９cm前後で分類Ｃ、外縁の形状は三角形で分類Ｂとなる。これらを総合すると、本鏡は、面径が９cm前後で、それぞれの様相が比較的新しいものと判断できる点から、Ｖ式に比定される。Ｖ式に関しては、面径11cm前後のものと９cm前後のものに二分でき、それぞれＶ１式、Ｖ２式としている。したがって本鏡は、杉山分類Ｖ２式に相当する。

大川浦遺跡の瑞花双鳥八稜鏡の年代については、Ⅴ２式は10世紀末～11世紀に出現し、12世紀にかけての使用が指摘されており、そうした時期の範囲でとらえられるものであろう。

（脇山　佳奈）



第19図　大川浦遺跡採集遺物実測図17
（瑞花双鳥八稜鏡、S＝1／1）

3．まとめ

大川浦遺跡は厳島北岸にあって、本土側に最も近在する遺跡の一つである。考古資料から見ると、旧石器時代末～縄文時代草創期の石槍、縄文時代前期・後晩期の土器、石器類、弥生時代前期の土器、奈良・平安時代の須恵器類、製塩土器および小型鏡などが目立つものである。この時期的な展開は、本遺跡の周辺に形成された御床浦遺跡、室浜遺跡、須屋浦遺跡などと共通するものである。これまでに確認された考古学的な資料の質および量から見ると、この一帯が厳島においては原始古代以来、中心地を形成してきた地区と見なすことができる。

大川浦遺跡は、厳島においては生活水の獲得も容易であると同時に、遠浅の海に面し、貝採集などの漁労活動には最適の立地といえる。また、遺跡の形成された海浜の背後は比較的幅のある谷平地が深く入り込み、その両側は急峻な山地形となっている。動物たちが水を求めて集まる格好の猟場ともいえる。

こうした様々な利点を有する大川浦遺跡は、厳島の数ある海浜の中でも古代以来の人間の生活活動にはもっとも条件の整備された環境にあったといえる。

厳島ではこれまでの踏査や採集資料の調査から、旧石器時代から中近世に至るまで、人間の生活痕跡を示す資料が多く出土している[31]。しかし、縄文時代前期・後期、奈良・平安時代および中世以降にピークが認められ、かなり断続的な利用となっている。内容的には狩猟、漁労、製塩など生業活動に関する遺物類が多く、定住生活が行われていたかどうかについては、発掘調査等による検証が必要であろう。とくに対岸の本土側には縄文時代後晩期を中心とする規模の大きな地御前南遺跡が海浜に面して形成されており、ここに生活のベースがあり、季節的な生業活動を大川浦遺跡などで行ったと考えることもできよう。県北部の帝釈峡遺跡群では、小規模遺跡は拠点遺跡から出発する狩猟時のキャンプサイトとしての位置づけも想定されている。こうした遺跡利用法を厳島の遺跡の在り方に重ねてみると、対岸本土側にある拠点集落からの一時的利用と見ることも当然、可能である。ただしかし、この遺跡に近在する海浜部にはほぼ同一の時期に生業活動が行われていたいくつかの遺跡があり、厳島には複数の小さな海浜集落が定住的に形成されていたと考えるほうが無理がないかもしれない。

また、これまでの検討では、厳島においては縄文時代中期における生活痕跡が希薄である。この事実は興味深いことで、前述の帝釈峡遺跡群においても規模の大きな拠点遺跡、たとえば、庄原市寄倉岩陰遺跡、神石高原町観音堂洞窟遺跡などにおいてのみ縄文時代のほぼ全期間において生活痕跡が認められるが、比較的規模の小さい遺跡では中期における生活が非常に希薄である。広島県域では縄文時代中期には南北地域ともに活動が衰退する現象が認められるようである。

厳島全体を考古学的に眺めてみると、本土に対接する北側海浜では遺跡が多く、しかも考古資料の種類も豊富で、多量である。一方、外海に面する南側海浜では入浜や樫の木浦、青海苔浦など浜堤の状態は良好であるものの、北側海浜に比べて採集される遺物の量は相対的にみて極めて少ない。外海に面し、背後に急峻な山地形を持ち、それぞれが孤立的に立地するという自然環境の違いが、そうした遺跡内容に濃淡を生んだのであろう。

なお、大川浦遺跡では厳島の遺跡の中では特異な考古資料が採集されている。その一つは製塩土器である。製塩土器といっても六連式土器と呼称される、焼塩用の土器で、内面に布目痕を持つ筒形土器である。８～９世紀頃に多用されるもので、厳島では須屋浦遺跡で確認されている。奈良・平安時代に盛んに製塩活動が行われていたことが分かる。

二つ目は瑞花双鳥八稜鏡が出土したことである。この鏡は遺跡地を覆う砂層表面に露出した状態で採集されたものである。砂層は風波による二次堆積であり、包含層ではない。したがって、鏡は原位置を保って出土したのでもなければ、遺構に伴われる状況でもなかった。文様構成、面径などの特徴から、杉山洋氏の分類ではＶ２式に相当するもので[32]、これは10世紀末から11世紀初頭に出現し、12世紀前半頃までの使用が想定されている。ところで、現在のところ、この遺跡での採集資料には、この鏡の年代観を示す10世紀代以降の土器類など、他の考古遺物はほとんどみられない。

さて、瑞花双鳥八稜鏡はこれまでの出土例を参考にすると、経塚、埋葬、祭祀に伴われるようである。広島県内出土例を中心に、その利用状況を見ると、経塚出土例では、三原市本郷町の西野田経塚例がある。この八稜鏡は杉山分類Ⅲ式とされるもので、10世紀前半の製作と考えられている。西野田経塚自体は経筒や青白磁合子から12世紀代に位置づけられており、約200年の伝世の後、経塚に埋納されたものと評価されている。経塚は12世紀になって盛行するので、この鏡式の鏡はいくらかの伝世の

後、埋納されることが多いようである。

次に埋葬についてみると、福山市神辺町所在の亀山遺跡ではＳＸ1028から鉄刀子、土師器椀、黒色土器椀などとともに出土している[33]。八稜鏡自体はＶ１式で土器類からは10世紀末から11世紀初頭の年代観が得られている。東広島市吉光谷遺跡では土壙墓から杉山分類Ⅳ～Ⅴ式に相当する例が検出されている[34]。Ⅳ式は10世紀後半に、Ⅴ式は西暦1000年前後に出現するとされているが、土壙墓自体は出土須恵器から12世紀代に比定できるものである。

祭祀に伴うものについては、広島市可部古墳群の給人原６号墳横穴式石室内からの出土例がある[35]。この八稜鏡が確実に祭祀に伴うかどうかは不明であるが、杉山分類ではⅤ式に相当する。文様構成や鋳上がり状態が粗雑で、面径も7.9cmと小さい。糸切り底を持つ土師器皿が伴出したとされ、12世紀前後の埋納と見られる。八稜鏡を伴う祭祀遺跡の代表として、栃木県男体山や奈良県金峯山を挙げることができる[36]。ここではいずれも山頂に祭祀や経塚の遺跡が確認され、多くの祭祀遺物とともに100面以上の八稜鏡が出土している。いずれも仏教祭儀に伴う祭具として使用されている。前者では杉山分類の各型式が含まれるが、10～11世紀初頭頃の古い型式が中心の組成となっている。したがって、その頃一括して埋納されたことが考えられる。一方、後者では古い型式は少なく、Ⅴ～Ⅵ式が組成の中心をなしており、年代的には若干後出する可能性が高い。なお、金峯山では奈良三彩や和同開珎も検出されており、それ以前の９世紀から10世紀にかけても、祭祀の対象は不明であるが、祭祀活動が活発になされていたようである。

さて、八稜鏡を伴う遺跡の在り方を概観してきたが、大川浦遺跡出土例はどのように評価できるであろうか。この遺跡で、初現が10世紀末～11世紀初頭、使用の中心が11世紀～12世紀前半とされる、経塚にも多く埋納された八稜鏡が出土した意味は一体どこに求められるのであろうか。当然ながら考えられるのは厳島との関わりであろう。厳島は古来、神の島として崇められてきた経緯があるが、その原形はよく分かっていない。神社縁起には推古元（593）年に社殿が設けられたとあるが、検証はできていない。その後、840年完成の『日本後紀』、901年完成の『日本三代実録』には伊都岐嶋神に関する文字記録が見えるようになるが、ただ、現在の社殿の原形は平清盛による12世紀後半の建造と考えられており、それ以前の様相はよく分かっていないのが実情である。周辺で考古学的に検証できるのは12世紀後半代の築造が想定される経尾経塚がある。ここでは銅製経筒、陶製甕容器、鏡、青白磁合子、鉄刀片などが出土している。鏡は山吹草鳥文鏡で、新しい鏡式の和鏡である。ここにはどこにも大川浦遺跡の八稜鏡と繋がる形跡は認められない。

12世紀後半以前に厳島信仰の原形がどこに形成されていたのかは不明ではあるが、現在の社殿のある地区が中心であった可能性は高い。しかし一方、厳島において大川浦一帯もまた、中心地であったことは考古学的に立証されるところである。したがって、現在のところ、この地区においても10世紀末以降12世紀代にかけての墳墓、経塚、祭祀のいずれの遺構が構築されていてもなんら不思議ではない。

ところで、瀬戸内海の島嶼部では９、10世紀には遣唐使・遣新羅使派遣に伴う、海上交通に関わる祭祀活動が活発になされていたようである。広島県域では福山市宇治島北の浜遺跡、呉市倉橋島亀の首遺跡などで奈良三彩、皇朝十二銭などの祭祀具が検出されており、そうした祭祀行動が具体的に検証されている。こうした国家の係わる祭祀とともに、地乗り航路あるいは海浜生産に関係する祭祀が

地元中心に執り行われたことも当然想定できる。大川浦遺跡にはこうした役割が期待されていた可能性も指摘しておきたい。

今回の報告では八稜鏡の性格については確定することができなかったが、厳島における大川浦遺跡およびこの一帯の位置づけについて、その歴史的重要性を浮かび上がらせることはできた。大川浦一帯の発掘調査を伴う調査活動が今後、ますます期待されるところである。　　（古瀬　清秀）

註

(1) 小都　隆『洗谷貝塚』福山市教育委員会・洗谷貝塚発掘調査団、1976年。

(2) 広島大学文学研究科考古学研究室所蔵資料による。

(3) 渡部明夫編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第９冊　永井遺跡』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団、1990年。

(4) 幸泉満夫「西日本縄文後期土器組成論－瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究－」『考古学研究』第48巻第３号、考古学研究会、2001年。

(5) 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣『広江・浜遺跡』、倉敷市教育委員会、1979年。
前掲註(3)文献

(6) 河瀬正利「広島県佐伯郡廿日市町地御前南遺跡出土の遺物について」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅶ、1984年。

(7) 前掲註(1)文献
潮見　浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部　紀要』第18号、広島大学文学部、1960年。

(8) 松崎寿和・潮見　浩「16　中山貝塚」日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』東京堂、1961年。
広島大学文学研究科考古学研究室所蔵資料による。

(9) 平井　勝「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備』第18集、古代吉備研究会、1966年。

(10) 以下弥生土器の編年は、次の文献による。
妹尾周三「４　安芸地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社、1992年。

(11) 寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊、奈良県立橿原考古学研究所、1986年。

(12) 前掲注文献

(13) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』、平安学園考古学クラブ、1966年。
佐藤　隆「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築に向けて－」『大阪歴史博物館　研究紀要』第２号、～大阪市文化財協会、2003年。

(14) 前掲註12田辺1966年文献
佐藤　隆「８世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係－陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その２－」『大阪歴史博物館　研究紀要』第３号、～大阪市文化財協会、2004年。

(15) 古瀬清秀「Ⅱ－４広島県」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店、1994年。

(16) 前掲註文献

(17) 古瀬清秀ほか「厳島における考古学的踏査とその検討(1)」『内海文化研究紀要』第34号、広島大学大学院文学研究科付属内海文化研究施設、2006年。
(18) 小林行雄・佐原　真『紫雲出　香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』詫間町文化財保護委員会、1964年。
(19) 竹広文明「石器」「縄文時代の石器について」角田徳幸編『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－堀田上・今佐屋山・米屋山遺跡の調査－』島根県教育委員会、1991年。
なお、中越利夫は厳島の上室浜遺跡採集の石鏃について、形態の時期的変遷を検討している。
中越利夫「大野瀬戸周辺の遺跡・遺物(2)－宮島町上室浜遺跡採集の石鏃について－」『内海文化研究紀要』第24号、1996年。
(20) 潮見　浩「広島市牛田町早稲田山遺跡の発掘調査報告」『広島考古研究』第２号、1960年。
(21) 角田徳幸編『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－堀田上・今佐屋山・米屋山遺跡の調査－』島根県教育委員会、1991年。
(22) 川越哲志「芸備地方最近の発掘調査から～」『芸備地方史研究』64、1976年。
広島大学文学研究科考古学研究室所蔵資料による。
(23) 藁科哲男・中越利夫「大分県姫島黒曜石産出地《原石産出地と原石の分布》」潮見　浩編『探訪縄文の遺跡　西日本編』有斐閣選書Ｒ34、有斐閣、1985年。
(24) 竹広文明「中国地方縄文時代の剥片石器－その組成・剥片剥離技術－」『考古学研究』第35巻第１号、61-88頁、1988年。
(25) 竹広文明「縄文時代の石器原材獲得－金山産サヌカイトをめぐって－」『潮見　浩先生退官記念論文集　考古論集』潮見　浩先生退官記念事業会、1993年。
竹広文明『サヌカイトと先史社会』渓水社、2003年。
(26) 前掲註(25)竹広2003年文献、123頁。
(27) 前掲註(1)文献
(28) 前掲註(20)、(24)文献。
(29) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌「蛍光Ｘ線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅲ）」『考古学と自然科学』第10号、1977年。
(30) 杉山　洋「「今様の鏡」と「古射の鏡『MUSEUM』４月号（No.481）、東京国立博物館、1991年。
(31) 前掲註(17)文献
(32) 前掲註(30)文献
(33) 新谷武夫編『亀山遺跡～第１次発掘調査概報』広島県教育委員会、1982年。
(34) 石井隆博編『吉光谷遺跡発掘調査報告書　Ⅱ』東広島市教育文化振興事業団文化財センター、2001年。
(35) 井手三千男・善入義信『可部古墳群～目で見る給人原古墳群』はにわ会、1974年。
(36) 石田茂作・矢島恭介『金峯山経塚遺物の研究』帝室博物館学報第八冊、帝室博物館、1937年。
斉藤　忠・佐野大和・亀井正道ほか『日光男体山　山頂遺跡発掘調査報告書』日光二荒山神社、角川書店、1963年。

参考文献

沖　憲明ほか『冠遺跡群』Ⅷ（冠遺跡群発掘調査事業最終報告書）、広島県教育委員会・㈶広島県埋蔵文化財調査センター、2001年。

河瀬正利「広島県佐伯郡廿日市町地御前南遺跡出土の遺物について」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅶ、1984年。

小林青樹編『縄文・弥生移行期の石製呪術具』１、考古学資料集12（平成11年度文部省科学研究費補助金特定研究Ａ１『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』考古学研究成果報告書）、2000年。

京都国立博物館編『経塚遺宝』臨川書店、1986年。

楠見　久・吉野言生ほか編『宮島の自然　地形・地質編』宮島町教育委員会　1994

久保智康『中世・近世の鏡』日本の美術394、至文堂、1999年。

奈良国立博物館編『厳島神社国宝展』読売新聞社大阪本社、2005年。

本報告を作成するに当たり、資料の実測図作成・図トレースなどの作業を広島大学文学研究科院生加藤　徹・脇山佳奈・石貫弘泰・今井千佳子・塩冶琢磨・順田洋一・須崎瀬里奈・永田千織および荒木亮司が、写真撮影および図面レイアウトは加藤が担当した。また、12世紀以前の厳島神社に関する文献史学的理解は、広島大学文学研究科西別府元日教授のご教示によるところが大きい。

第２表　縄文土器観察表

（「口縁形態」の「平」は平縁の口縁、「波状」は波状口縁を表す。「砂粒の含有状況」の「英」・「長」・「雲」・「赤粒」・「黒粒」は、それぞれは石英・長石・雲母・赤色の粒子・黒色の粒子を表す。以下表も同じ。）

図面番号	口縁形態	文　　様	調整（内面／外面）	色　調（内面／外面）	砂粒の含有状況	備　　考	整理番号
1	平	口縁直下に１条の隆起帯	二枚貝条痕→ナデ／二枚貝条痕（縦位）→ナデ	淡褐色／淡褐色	１㎜以下長微量、微小雲やや多		340
2	平	２条の隆起帯	二枚貝条痕？／ナデ？	淡褐色／淡褐色	外面：微小長、内面：１㎜以下英・長やや多		339
3	―	２段の逆Ｃ字形の爪形文	ナデ？／（条痕→）ナデ？	暗褐色／暗褐色	１㎜英微量、赤粒微量、微罪長	内外面風化	385
4	平	Ｃ字形の爪形文（二枚貝腹縁、押引状）	二枚貝条痕／二枚貝条痕	褐色／褐色	１～２㎜英・長微量、１㎜以下の英・長少量		332
5	平	Ｃ字形の爪形文（二枚貝腹縁、押引状）	二枚貝条痕／二枚貝条痕	黄褐色／黄褐色	器表面：１㎜以下雲少量のみ、破面：１㎜英・長多量		331
6	平	押引刺突文	ナデ／ナデ	淡赤褐色／淡赤褐色	２～３㎜英・長少量、微小雲多量		210
7	―	押引刺突文	ナデ？／ナデ？	淡黄褐色／淡褐色	２～３㎜英・長微量、１㎜英・長		329
8	―	―	二枚貝条痕／二枚貝条痕	黄灰色／黄灰色	器表面：砂粒微量、破面：３㎜英・長微量、１㎜以下長多量		288
9	波状	磨消縄文（巻貝による疑似縄文）	巻貝条痕→ナデ／ナデ？（磨消縄文）	黄褐色／黄褐色	２～３㎜英・長少量		507
10	平	磨消縄文	ミガキ／ミガキ（磨消縄文）	黄褐色／黄褐色	３㎜長少量、１㎜雲少量、内面微小雲多量		233
11	―	磨消縄文	ナデ？／ミガキ（磨消縄文）	褐色／黄褐色	0.5㎜以下英・長微量	内面に突帯、浅鉢？、内面風化	505
12	平	磨消縄文	ナデ？／ナデ（磨消縄文）	褐色／褐色	２㎜以下英・雲やや多	内面風化	313
13	―	磨消縄文	ナデ／（磨消縄文）	黄褐色／暗褐色	２～３㎜英・長微量、１㎜以下英・長	内外面風化	361
14	平	磨消縄文	ミガキ／ミガキ（磨消縄文）	黄褐色／黄褐色	１㎜英・長微量	縁帯文	406
15	波状	磨消縄文；口縁端部に刻目（巻貝）	ミガキ／（磨消縄文）	黄褐色／黄褐色	１～２㎜英・長微量	外面風化顕著	223
16	平	磨消縄文；口縁端部に刻目（巻貝）	ナデ？／ナデ？（磨消縄文）	淡褐色／淡黄褐色	３～４㎜英・長微量、１～２㎜英・長、0.5㎜赤粒少量	内外面風化	374
17	平	磨消縄文（口縁端にも縄文）	ナデ／（磨消縄文）	淡黄褐色／淡黄褐色	0.5～２㎜英・長		28
18	平	磨消縄文	ミガキ／ミガキ（磨消縄文）	暗褐色／淡赤褐色	２㎜以下英・長多量		211
19	波状	磨消縄文	巻貝条痕→ナデ／ナデ（磨消縄文）	暗灰褐色／淡橙褐色	１㎜以下英・長少		256
20	平	磨消縄文	ナデ／（磨消縄文）	暗黄褐色／黄褐色	１～２㎜英・長少量		398
21	―	磨消縄文	巻貝条痕→ナデ／（磨消縄文）	褐色／赤褐色	１～２㎜長少量		410
22	平	磨消縄文	ナデ？／ナデ？（磨消縄文）	黄褐色／黄褐色	１㎜英・長・雲	内外面風化	373
23	平	磨消縄文；口縁端部に刻目	ナデ／ナデ（磨消縄文）	黄褐色／黄褐色	２㎜以下英・長やや多		501
24	波状	磨消縄文	ナデ？／ミガキ（磨消縄文）	褐色／淡褐色	内面１～２㎜英・長多量	内面風化顕著	320
25	平	磨消縄文	ナデ／ナデ（磨消縄文）	赤褐色／赤褐色	３㎜以下英多量		522
26	平	磨消縄文	ナデ（磨消縄文）／ナデ？	淡赤褐色／淡赤褐色	１㎜英・長少量		358

図面番号	口縁形態	文　　様	調整（内面／外面）	色　調（内面／外面）	砂粒の含有状況	備　　考	整理番号
27	平	磨消縄文	ナデ？／（磨消縄文）	暗灰褐色／暗灰褐色	3～4㎜長少量、1㎜以下長多量		206
28	平	胴部付近に縄文	ナデ／ナデ	黄褐色／褐色	1㎜以下英・長少量		412
29	平	口縁外面端部に縄文	ナデ／ナデ	淡褐色／赤褐色	0.5～6㎜英、0.5～2㎜長		29
30	平	胴部付近に縄文	ミガキ／ミガキ	褐色／赤褐色	器表面：1～3㎜英・長少量、破面：1～3㎜英・長多量		432
31	平	沈線文	ナデ／ミガキ	褐色／暗褐色	1㎜以下長・英少量		436
32	―	沈線文	ナデ？／ナデ？	灰褐色／淡褐色	1～2㎜英・長	内外面風化	200
33	平	沈線文	ナデ／巻貝条痕、口縁部：ナデ？	黄褐色／淡暗褐色	4㎜長微量、1㎜以下英・長		222
34	平	沈線文	ナデ／ナデ	暗褐色／淡赤褐色	3～4㎜英・長やや多、0.5㎜以下雲少量	外面風化顕著	234
35	平	沈線文	巻貝条痕→ナデ／ナデ	淡黄褐色／淡黄褐色	1㎜英・長少量、微小雲		428
36	平	沈線文	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ	褐色／褐色	1～2㎜英・長やや多		333
37	平	沈線文	巻貝条痕→ナデ／ナデ？	淡褐色／黄褐色	1㎜以下英・長やや多	外面風化	427
38	平	沈線文	巻貝条痕→ナデ／ナデ	淡黄褐色／淡黄褐色	6㎜英微量、0.5～3㎜英・長多量（破面）、微小雲多量（内面）		30
39	平	凹線文	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕	淡褐色／淡褐色	1～2㎜英・長多量		405
40	平	沈線文；口縁端部に刻目	ナデ？／ナデ？	黒褐色／暗褐色	3㎜長やや多、1㎜長多量、1㎜雲多量	内外面風化顕著	253
41	平	口縁端部に刻目（巻貝）	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ	黄褐色／暗褐色	3㎜以下長少量、微小雲やや多		523
42	平	口縁端部に刻目		黒褐色／黄褐色	3㎜英・長やや多		257
43	波状	口縁端部に刻目（巻貝）	巻貝条痕→ナデ？／巻貝所紺→ナデ？	赤褐色／暗褐色	1㎜以下英・長多量	内外面風化	537
44	波状	口縁端部に刻目	ナデ／ナデ	暗褐色／暗褐色	3～4㎜英少量、1㎜以下英・長やや多		525
45	平	口縁部外面に刺突（巻貝？）	巻貝条痕／巻貝条痕→ナデ	暗黄褐色／暗黄褐色	1～2㎜英・長少量、微細長少量		434
46	平	口縁部外面に刺突（竹管？）、口縁端部に刻目	条痕？／？	暗褐色／赤褐色	0.5～2㎜長やや多	外面風化顕著	408
47	平	口縁端部に刻目（竹管？）	ナデ？／ナデ？	灰褐色／淡黄褐色	3㎜以下英・長多量	内外面風化	497
48	波状	口縁端部に刻目	ナデ／ナデ？	淡褐色／褐色	4～5㎜英少、1～2㎜英・長	外面風化	201
49	平	口縁端部に刻目	？／？	赤褐色／赤褐色	2㎜以下英・長やや多	内外面風化顕著	535
50	平	口縁端部に刻目	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕	黒褐色／灰褐色～黒褐色	3㎜以下英・長多量		290
51	平	口縁端部に刻目	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ	淡赤褐色／淡赤褐色	1～2㎜英・長少量、1～2㎜雲微量		488
52	平	口縁端部に刻目	ナデ／二枚貝条痕→ナデ	淡褐色／暗褐色	1～2㎜英・長、0.5㎜以下雲		27
53	平	口縁部外面端に刻目	ナデ？／ナデ？	褐色／褐色	2㎜以下英・長少量	内外面風化	509
54	波状?	口縁端部に刻目と1条の沈線	ナデ？／ナデ？	黄褐色／黄褐色～淡赤褐色	4㎜長微量、1㎜以下英・長	内外面風化	235
55	平	口縁端部に刻目（・沈線）	ナデ／ナデ？	淡黄褐色／淡黄褐色	2～3㎜英・長やや多	外面風化顕著	473
56	平	口縁部外面端に刻目	ナデ／ナデ	淡赤褐色／褐色	3㎜以下英・長少量		514

図面番号	口縁形態	文　　様	調整（内面／外面）	色　調（内面／外面）	砂粒の含有状況	備　　考	整理番号
57	平	口縁端部に沈線と刻目と１条の沈線	巻貝条痕→ナデ？／巻貝条痕→ナデ？	黄褐色／淡赤褐色	2～4㎜英・長やや多、1㎜以下英・長	外面風化顕著	249
58	平	口縁端部に刻目と二条の沈線	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ？	黄褐色／暗灰褐色	3㎜英・長微量		261
59	平	口縁端部に２条の沈線	（条痕→）ナデ？／条痕→ナデ	褐色／暗褐色	2～5㎜英・長やや多、0.5㎜雲少量、赤粒・黒粒少量	内外面風化	346
60	平	口縁端部に刻目と二条の沈線	巻貝条痕？→ナデ／巻貝条痕→ナデ？	明褐色／明褐色	3～4㎜英・長やや多、1㎜以下英・長多量		296
61	平	口縁外面端に刻目	ミガキ／ミガキ	淡赤褐色／淡赤褐色	1㎜以下英・長少量		513
62	平	口縁端部に刻目；頸部に刺突	ミガキ（口縁端部まで）／巻貝条痕→ナデ	淡褐色／淡褐色	1～2㎜英・長微量、0.5㎜雲やや多		471
63	平	口縁端部に刻目；頸部に刺突文	ナデ／ナデ	淡褐色／淡褐色	2㎜英・長若少量、1㎜以下長		215
64	平	頸部に刺突	口縁部：ナデ、頸部以下：ミガキ／ナデ	暗灰色／灰色	1～2㎜英・長・雲少量、0.5㎜以下英・長		494
65	平	口縁端部に刻目	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ	暗褐色／暗褐色	2～3㎜英・長やや多		292
66	平	－	ミガキ／胴部：（巻貝？）条痕、肩部以上（巻貝？）条痕→ナデ	濃褐色／淡褐色	1～2㎜英・長少量		295
67	平	－	ナデ／ナデ	褐色／赤褐色	3㎜以下英・長やや多、		499
68	平	－	ナデ／巻貝条痕→ナデ	褐色／褐色	1㎜以下の英・長多量		516
69	平	－	（巻貝）条痕→ナデ／（巻貝）条痕→ナデ	暗褐色／褐色～赤褐色	1～2㎜英・長少量、微小雲多量		31
70	平	－	ミガキ／ミガキ	灰褐色／灰色褐色	2㎜英・長微量、1㎜以下の英・長微量		478
71	平	－	ナデ／ナデ	赤褐色／赤褐色	0.5㎜以下英・長少量		491
72	平	－	ナデ／巻貝条痕	黄褐色／赤褐色	2～3㎜英少量、1㎜以下英・長やや多	胴部に穿孔	476
73	平	－	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ	黄褐色／黄褐色	2～3㎜英微量、1㎜以下英・長少量		508
74	平	－	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ／	黄褐色／赤褐色	3～4㎜長少量、1～2㎜英・長少量	胴部に穿孔	396
75	平	－	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ	赤褐色／褐色	器表面：0.5㎜以下英・長、破面：2～3㎜英少量	胴部に穿孔	394
76	平	－	巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ	暗褐色／暗褐色	2～3㎜英焦慮、2㎜以下英・長少量		510
77・78	平	－	巻貝条痕／巻貝条痕	褐色～暗褐色／赤褐色	3～4㎜長少量、1㎜以下英・長少量	※	214・483
79	－	－、	ナデ／二枚貝条痕→ナデ？	淡橙褐色／淡橙褐色	2～3㎜長微量、1㎜以下英・長、	外面風化	293
80	－	－	肩部付近以下：巻貝条痕、口頸部付近：巻貝条痕→ナデ／巻貝条痕→ナデ？	淡褐色／淡褐色	外面：4㎜英・長微量、1㎜以下英・長多量、内面1㎜以下英・長少量	外面風化顕著	421
81	－	－	巻貝条痕／巻貝条痕	明褐色／暗赤褐色	1～2㎜英・長少量		297
82	平	口縁端部に刻目；口縁端部外面直下に刻目突帯	ナデ／ナデ	黒褐色／暗褐色	1㎜以下英・長・雲微量		345
83	平	口縁端部に刻目、口縁部外面に刻目突帯	ナデ／ナデ？	黒褐色／赤褐色	1㎜以下英やや多	外面風化	493
84	平	口縁部外面に刻目突帯	ナデ／ナデ	灰褐色／淡褐色	2㎜以下英・長やや多		496

図面番号	口縁形態	文　　様	調整（内面／外面）	色　調（内面／外面）	砂粒の含有状況	備　　考	整理番号
85	平	口縁部外面に刻目突帯	ナデ／ナデ	暗褐色／暗灰褐色	2㎜以下英やや多。1㎜以下長少量		502
86	平	口縁部外面に刻目突帯	ナデ／ナデ	淡灰褐色／淡褐色	0.5㎜長、0.5～2㎜英		498
87	平	口縁部外面に刻目突帯；突帯下方に沈線文	ナデ／ナデ	暗褐色／黄褐色	1～2㎜英・長少量		258
88	平	口縁部外面に刻目突帯；突帯上方と下方に沈線文	ナデ？／ナデ？	褐色／暗褐色	1㎜英・長・雲微量	内外面風化	344
89	平	口縁部外面に刻目突帯；突帯下方に2条の沈線文	ナデ？／ナデ？	暗褐色／暗褐色	2㎜以下英やや多、雲多量	内外面風化	205
90	平	口縁部外面に刻目突帯；突帯下方に沈線文	ナデ／ナデ	黒褐色／赤褐色	1㎜以下英・長少量、1㎜雲微量		504
91	平	口縁部外面に刻目突帯；突帯下方に沈線文	ナデ？／ナデ？	黄褐色／淡橙褐色	3㎜長やや多、1㎜長	内外面風化	236
92	－	沈線文	ナデ→ミガキ／ヘラケズリ、沈線文およびその周辺：ヘラケズリ→ナデ	黒褐色／淡黄褐色	外面：1㎜以下英・長やや多、内面：砂粒ほとんど無し		411
93	－	沈線文	？／ヘラケズリ、文様周辺：ヘラケズリ→ナデ	淡灰褐色／褐色	0.5㎜以下英・長多量、3～4㎜英少量		236

※図面番号77・78は接合することが後になって判明したが、整理時間等の都合上、実測図は接合前の状況のまま、写真図版は接合後の状況という異なるものになってしまった。

第3表　弥生土器・土師器観察表

図面番号	器形	文　　様	調整（内面／外面）	色　調（内面／外面）	砂粒の含有状況	備　　考	整理番号
94	甕	口縁端下部に刻目；頸部以下に2条（＋α）の沈線文	？／ナデ？	風化により不明／黄白色	3㎜以下英・長多量		229
95	甕	口縁端下部に刻目；頸部以下に8条の沈線文・1列の列点文・2条（＋α）の沈線文	ナデ？／ナデ？	明褐色／淡赤褐色	3～5㎜の英・長多量	内外面風化	221
96	甕	口縁端下部に刻目；頸部以下に9条の沈線文・1列の列点文・1条（＋α）の沈線文	ナデ／ナデ？	橙褐色／橙褐色	2㎜以下英・長多量		417
97	甕	5条（＋α）の沈線文	ナデ／ヘラミガキ、沈線間横位ハケメ残る	黄褐色／黄褐色	1～2㎜英・長やや多		515
98	壺	頸部に削出突帯；突帯上に3条の沈線文	横位ヘラミガキ（頸部以下は粗い）／ハケ？	赤褐色～淡赤褐色／明黄褐色－赤褐色	3～4㎜英・長やや多、1㎜以下長		538
99	壺	上方から1条（＋α）の沈線文・2段の刺突文（貝殻腹縁）・5条の沈線文・1段の刺突文（貝殻腹縁）・3条（＋α）の沈線文	ナデ／ナデ？	黄白色／黄白色	1㎜以下英・長微量		519
100	壺	口縁端部に格子状の沈線文	？／口縁下：ナデ、頸部以下：縦位ハケ	風化により不明／淡赤褐色～橙褐色	2㎜以下英微量	内面風化顕著	232

図面番号	器形	文　　様	調整（内面／外面）	色　調（内面／外面）	砂粒の含有状況	備　　考	整理番号
101	壺	2段の櫛描波状文	ナデ？／ナデ？	淡橙褐色／橙褐色	3㎜英・長微量、1㎜以下英・長やや多		286
102	高坏	10（＋α）の凹線文	ナデ／ナデ？	暗褐色／赤褐色	1～2㎜英・長やや多、1㎜以下雲やや多		400
103	甕	－	横位ハケ／横位ハケ？	淡橙褐色／明灰褐色	1～3㎜長少量	口縁端部が若干内側へ肥厚、外面風化	224
104	高坏	－	タタキ？／斜位ハケ？	橙褐色／濃褐色	2㎜以下英・長やや多	接合タイプ、内外面風化	248

第4表　須恵器観察表

図面番号	器形	調整（内面／外面）	色　調（内面／外面）	砂粒の含有状況	復元口径／底径（cm）	復元器高（cm）	備　　考	整理番号
105	坏蓋	横ナデ天井部：横ナデ→一部不定方向ナデ／天井部：ヘラケズリ→一部ナデ、体部：横ナデ	黄灰褐色／灰褐色	2～3㎜英・長多量	12.1	－		246
106	坏蓋	横ナデ／横ナデ	青灰色／青灰色	0.5㎜以下長少量	－	－		243
107	坏蓋	横ナデ→一部に不定方向ナデ／横ナデ	灰褐色／灰白色	0.5㎜以下長少量	－	－		383
108	坏蓋	横ナデ／横ナデ	黄灰色／灰白色	1㎜以下長少量	－	－		380
109	坏蓋	横ナデ／横ナデ	黄灰褐色／黄灰褐色	0.5㎜以下長少量	－	－		289
110	坏蓋	横ナデ／横ナデ	灰黄色／灰黄色	砂粒はほとんど含まない	－	－		381
111	坏蓋	横ナデ／横ナデ	灰褐色／灰白色	0.5㎜以下長微量	－	－		384
112	坏蓋	斜位ナデ→横ナデ／横ナデ	淡青灰色／淡青灰色	砂粒はほとんど含まない	－	－		274
113	坏蓋	横ナデ／横ナデ	灰白色／青灰色	1㎜以下長少量	－	－		379
114	坏蓋	横ナデ／横ナデ	青灰色／青灰色	砂粒はほとんど含まない	－	－		382
115	坏蓋	横ナデ、天井部付近：横ナデ→不定方向ナデ／横ナデ	灰褐色／灰白色	1㎜以下長微量	－	－		415
116	坏蓋	横ナデ／横ナデ	黄灰褐色／青灰色	0.5㎜以下長石少量	－	－		275
117	坏身	横ナデ／横ナデ	青灰色／青灰色	0.5㎜以下長微量	14.0	－		272
118	坏身	横ナデ／横ナデ（底部：ヘラケズリ？）	灰褐色／青灰色	3㎜以下長微量	11.6	4.0	内外面風化顕著	419
119	坏身	横ナデ／底部外面：ヘラケズリ→不定方向ナデ、体部：横ナデ	淡灰色／淡灰色	1～2㎜英・長微量	10.8/5.2	2.8		337
120	坏身	横ナデ／横ナデ	黄灰褐色／灰褐色	0.5㎜以下長少量	11.0	－		273
121	坏身	横ナデ／横ナデ	青灰色／青灰色	1㎜以下長少量	10.0	－	内外面風化	240
122	坏身	横ナデ→不定方向ナデ／底部：ヘラケズリ→横ナデ、底部外縁～体部：横ナデ	青灰色／青灰色	1～2㎜長少量	－	－		351
123	坏身	横ナデ／横ナデ	暗灰色／暗灰色	1㎜英・長少量	－	－		336
124	坏身	横ナデ／横ナデ	黄灰褐色／灰褐色	砂粒はほとんど含まない	12.2	－		241
125	坏身	横ナデ／横ナデ	灰褐色／灰白色	1～2㎜英・長少量	10.5	－	高台の接合が粗い	413
126	坏身	横ナデ／横ナデ	黄灰色／青灰色	0.5㎜以下長少量	9.6	－		348

図面番号	器形	調整（内面／外面）	色調（内面／外面）	砂粒の含有状況	復元口径／底径（cm）	復元器高（cm）	備考	整理番号
127	坏身	横ナデ→不定方向ナデ／底部：ヘラケズリ→横ナデ、底部外縁～体部：横ナデ	灰褐色／灰褐色	砂粒はほとんど含まない	9.6	－		352
128	壺底部	横ナデ／横ナデ	灰褐色／灰褐色	1㎜以下長・雲	11.1	－		338
129	円面硯？	横ナデ／横ナデ	淡青灰色／淡黄灰色	1㎜以下長	－	－	透孔を持つ	347
130	高坏	横ナデ／横ナデ	青灰色／青灰色	砂粒はほとんど含まない	－	－		372

第5表　製塩土器観察表

図面番号	部位残存	布目の細かさ	器厚（cm）	調整（内面／外面）	色調（内面／外面）	砂粒の含有状況	備考	整理番号
131	胴部	目の細かい布と布目以外の腹体を併用	1.2～1.5	布目圧痕・原体不明圧痕／指頭ナデ	赤褐色／赤褐色	7㎜以下英・3㎜以下長やや多		389
132	口縁部～胴部	細かい	0.9～1.0	布目圧痕／指頭ナデ	赤褐色／赤褐色	1㎜以下英・長少量		391
133	口縁部	細かい	0.9～1.1	布目圧痕／指頭ナデ	明褐色／橙褐色	4～5㎜英・長少量、1㎜以下英・長少量		230
134	口縁部	やや粗い	0.9～1.2	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／淡褐色	1～2㎜英・長少量		326
135	口縁部	やや粗い	0.9	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／橙褐色	1～2㎜英・長やや多		328
136	口縁部	粗い	0.9～1.1	布目圧痕／指頭ナデ	濃橙褐色／濃橙褐色	1㎜長・黒粒やや多		263
137	胴部	非常に細かい	1.0～1.3	布目圧痕／指頭ナデ	淡赤褐色／暗褐色	4～6㎜英・長少量、1㎜以下英・長少量		518
138	胴部	非常に細かい	0.9～1.1	布目圧痕／指頭ナデ	淡橙褐色／淡橙褐色	1～2㎜英・長少量		375
139	胴部	非常に細かい	0.7～1.1	布目圧痕／指頭ナデ	赤褐色／赤褐色	2～3㎜英・長微量		390
140	胴部	細かい	0.7～0.8	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／橙褐色	2～3㎜英・長少量		267
141	胴部	細かい	1.0	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／橙褐色	2㎜英・長少量		281
142	胴部	目のやや粗い布と細かい布を併用	0.8～0.9	布目圧痕／指頭ナデ	淡黒褐色～赤褐色／淡黒褐色～赤褐色	1㎜以下長微量		254
143	胴部	やや粗い	0.9～1.2	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／橙褐色	1㎜以下英・長少量		276
144	胴部	粗い	0.8～1.0	布目圧痕／指頭ナデ	赤褐色／赤褐色	7㎜英微量、1㎜以下英・長やや多		484
145	胴部	粗い	0.6～0.8	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／橙褐色	1～3㎜英・長少量		377
146	胴部	粗い	0.7～0.9	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／橙褐色	1～2㎜英少量		378
147	胴部	粗い	0.8	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／橙褐色	1～2㎜英・長少量		376
148	底部	やや粗い	1.2～1.4	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／黄褐色	1～2㎜英少量		255
149	底部	目の細かい布とやや粗い布を併用	2.2	布目圧痕／指頭ナデ	橙褐色／淡橙褐色	1～4㎜英・長少量		388
150	底部	やや粗い	1.5	布目圧痕／？	赤褐色／？（現状では黒褐色）	3㎜以下の英・長多量	外面剥落	392
151	底部	なし？	2.5	？／指頭ナデ	赤褐色／赤褐色	3㎜以下英・長多量	内面の凹凸顕著。明瞭な布目痕跡は確認できない	393

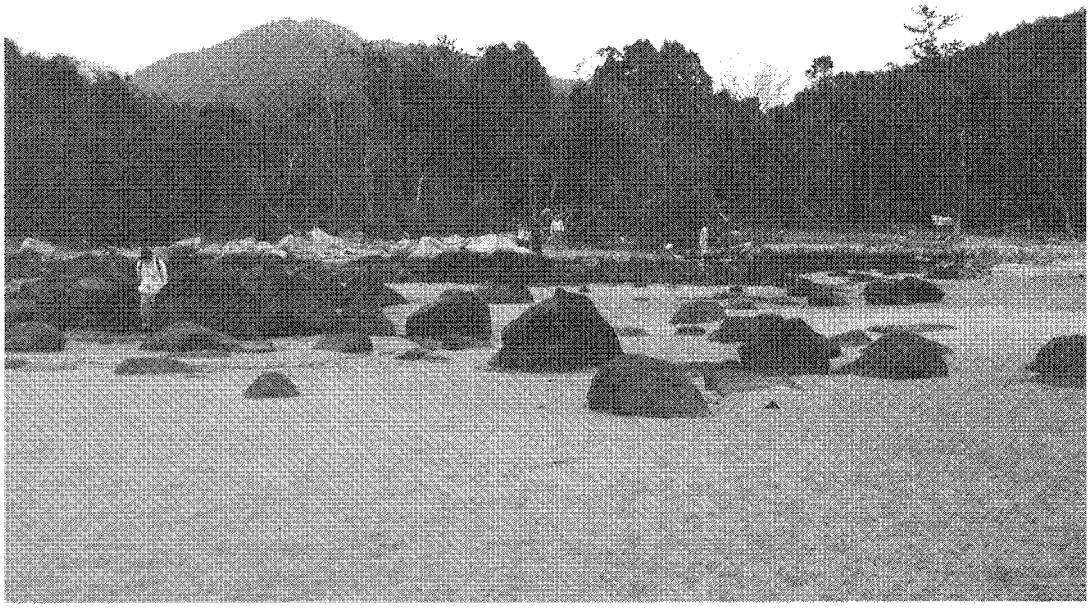
第6表　石器・石製品観察表

図面番号	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考	整理番号
152	槍先形尖頭器	3.85	1.75	0.75	5.5	サヌカイト・安山岩	先端部欠損。	220
153	石鏃	1.50	1.45	0.35	0.4	サヌカイト・安山岩	全面加工。脚部欠損。	282
154	石鏃	1.75	1.25	0.30	0.4	サヌカイト・安山岩	全面加工。	226
155	石鏃	1.10	1.10	0.30	0.3	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部欠損。	264
156	石鏃	1.80	1.20	0.30	0.3	サヌカイト・安山岩	全面加工。脚部欠損。	207
157	石鏃	2.41	1.85	0.43	1.1	灰白色黒曜石	全面加工。脚部欠損。	353
158	石鏃	1.95	1.65	0.40	0.9	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部欠損。	283
159	石鏃	1.90	1.40	0.35	0.6	サヌカイト・安山岩	全面加工。鋸歯縁。先端部欠損。	231
160	石鏃	1.35	1.30	0.20	0.3	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部・脚部欠損。	237
161	石鏃	1.40	1.80	0.33	0.7	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部欠損。	216
162	石鏃	1.74	1.55	0.21	0.5	サヌカイト・安山岩	周辺加工。脚部欠損。	401
163	石鏃	1.90	1.60	0.35	0.7	サヌカイト・安山岩	周辺加工。	342
164	石鏃	2.00	1.40	0.45	1.0	サヌカイト・安山岩	全面加工。	454
165	石鏃	1.10	1.30	0.25	0.3	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部欠損。	325
166	石鏃	2.15	2.05	0.60	2.1	サヌカイト・安山岩	全面加工。	285
167	石鏃	1.35	1.25	0.20	0.3	サヌカイト・安山岩	全面加工。	341
168	石鏃	1.15	1.20	0.25	0.3	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部欠損。	242
169	石鏃	1.45	1.15	0.38	0.4	サヌカイト・安山岩	全面加工。	459
170	石鏃	1.90	1.60	0.45	1.2	サヌカイト・安山岩	全面加工。	266
171	石鏃	1.35	1.60	0.40	0.6	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部欠損。	343
172	石鏃	1.94	1.20	0.40	0.7	サヌカイト・安山岩	全面加工。	362
173	石鏃	1.80	1.40	0.20	0.3	サヌカイト・安山岩	全面加工。加工精巧。基部端欠損。	269
174	石鏃	3.10	1.45	0.32	1.1	サヌカイト・安山岩	表は全面加工、裏は部分加工。	268
175	石鏃	1.70	1.35	0.25	0.6	サヌカイト・安山岩	周辺加工。	307
176	石鏃	1.85	1.70	0.30	1.0	サヌカイト・安山岩	周辺加工。先端部欠損。	460
177	石鏃	2.23	1.70	0.30	1.0	サヌカイト・安山岩	周辺加工。先端部・基部端欠。	452
178	石鏃	2.20	1.60	0.65	1.2	サヌカイト・安山岩	全面加工。	321
179	石鏃	2.26	1.40	0.49	1.1	サヌカイト・安山岩	全面加工。基部端欠損。	453
180	石鏃	2.05	1.70	0.60	2.3	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部欠損。	284
181	石鏃	2.35	2.40	0.65	3.9	灰白色黒曜石	全面加工。先端部欠損。	245
182	石鏃	3.58	2.90	1.35	12.2	サヌカイト・安山岩	部分加工。	359
183	石鏃	3.60	2.40	0.60	5.8	サヌカイト・安山岩	周辺加工。	262
184	石鏃	2.50	2.10	0.65	2.5	サヌカイト・安山岩	表は全面加工、裏は部分加工。先端部欠損。	322
185	石鏃	1.65	1.25	0.35	0.6	サヌカイト・安山岩	全面加工。先端部・基部欠損。	227
186	石鏃	1.60	1.10	0.20	0.4	サヌカイト・安山岩	周辺加工。先端部・基部欠損。	238
187	石鏃	1.64	1.90	0.33	0.9	サヌカイト・安山岩	周辺加工。基部欠損。	456
188	石鏃	2.10	2.05	0.30	1.4	サヌカイト・安山岩	周辺加工。先端部・基部欠損。	251
189	石錐	2.70	2.00	0.50	1.3	サヌカイト・安山岩	つまみ部端欠損。	364
190	石錐	2.29	1.50	0.35	0.6	サヌカイト・安山岩		314
191	スクレイパー	3.40	1.70	0.40	2.0	水晶		204
192	スクレイパー	3.90	2.30	0.50	4.4	サヌカイト・安山岩		218
193	スクレイパー	5.85	2.90	1.00	18.4	サヌカイト・安山岩		35
194	スクレイパー	5.41	3.39	1.00	14.2	サヌカイト・安山岩		319
195	スクレイパー	2.60	2.45	0.80	4.5	サヌカイト・安山岩		461
196	スクレイパー	3.90	3.30	0.70	7.7	サヌカイト・安山岩		335
197	スクレイパー	4.30	2.30	1.05	11.5	サヌカイト・安山岩		349
198	スクレイパー	6.35	6.30	0.80	29.3	サヌカイト・安山岩		463
199	楔形石器	5.25	2.80	2.20	27.7	サヌカイト・安山岩	楔形石器削片。	438
200	楔形石器	3.40	1.70	0.70	5.9	サヌカイト・安山岩		357
201	楔形石器	3.76	2.25	1.40	9.8	サヌカイト・安山岩		334
202	楔形石器	3.00	1.32	1.15	2.6	サヌカイト・安山岩		448

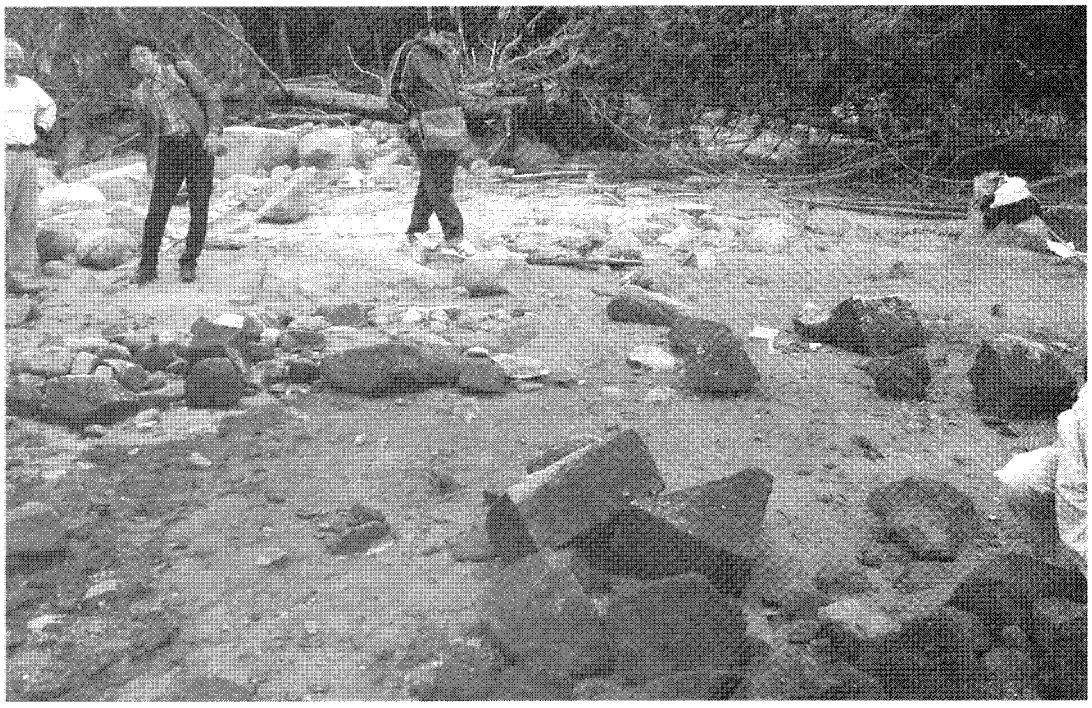
図面番号	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考	整理番号
203	楔形石器	2.75	1.85	0.80	4.4	サヌカイト・安山岩		308
204	楔形石器	2.10	2.25	0.70	4.3	サヌカイト・安山岩		447
205	楔形石器	1.50	2.05	0.50	1.6	サヌカイト・安山岩		303
206	楔形石器	3.15	3.60	0.85	10.0	サヌカイト・安山岩		208
207	楔形石器	3.20	1.75	0.60	2.6	サヌカイト・安山岩		209
208	楔形石器	4.20	2.70	1.25	15.7	サヌカイト・安山岩		302
209	楔形石器	4.10	5.05	1.50	24.9	サヌカイト・安山岩		386
210	打製石斧	4.00	5.85	1.00	28.8	片岩系	欠損。	363
211	打製石斧	3.20	5.80	1.70	17.8	片岩系	欠損。	468
212	部分磨製刃器	6.05	7.30	1.00	69.1	片岩系		350
213	用途不明石製品	5.70	5.75	0.80	52.6	片岩系	欠損。	299
214	剥片	6.20	9.50	1.70	93.9	頁岩あるいは粘板岩に類似		34
215	剥片	4.10	6.20	0.90	20.9	サヌカイト・安山岩		217
216	石核	3.85	2.15	1.40	8.3	灰白色黒曜石		312
217	石核	4.50	4.20	1.55	28.1	灰白色黒曜石		270
218	石核	3.90	3.15	1.05	9.9	灰白色黒曜石		265
219	石核	2.60	3.75	1.40	17.2	サヌカイト・安山岩		309
220	原材・石核片	3.68	3.15	2.70	34.4	サヌカイト・安山岩		367
221	石核	7.50	4.00	1.50	29.5	サヌカイト・安山岩		467
222	石核	8.60	8.70	3.10	188.7	サヌカイト・安山岩		387
223	石核	11.90	5.30	2.80	171.7	サヌカイト・安山岩		202
224	石核	11.50	10.00	3.10	390.1	サヌカイト・安山岩		354 355
225	石錘	10.30	8.80	2.40	280.4			330
226	石錘	9.80	6.65	2.35	203.7			318
227	石錘	8.90	7.10	1.25	163.5			316
228	石錘	8.80	7.85	2.25	222.3			317
229	石錘	7.40	6.55	2.22	140.5			287
230	磨石	3.90	7.10	4.35	146.4		欠損。	539
231	磨石	11.40	8.95	5.80	907.5			315
232	石棒	8.90	5.90	4.30	233.8	片岩系	欠損。	540
233	石棒	11.30	3.85	3.25	231.6	片岩系	欠損。	541

第7表　青銅鏡観察表

図面番号	器種	鈕孔形	直径(mm)	鈕幅(mm)	鈕高(mm)	縁厚(mm)	内区厚(mm)	反り(mm)	重量(g)	備　考	整理番号
234	瑞花双鳥八稜鏡	円　形	90.5	6.8	5.0	4.0	1.5	1.5	61.4	表面風化顕著	542

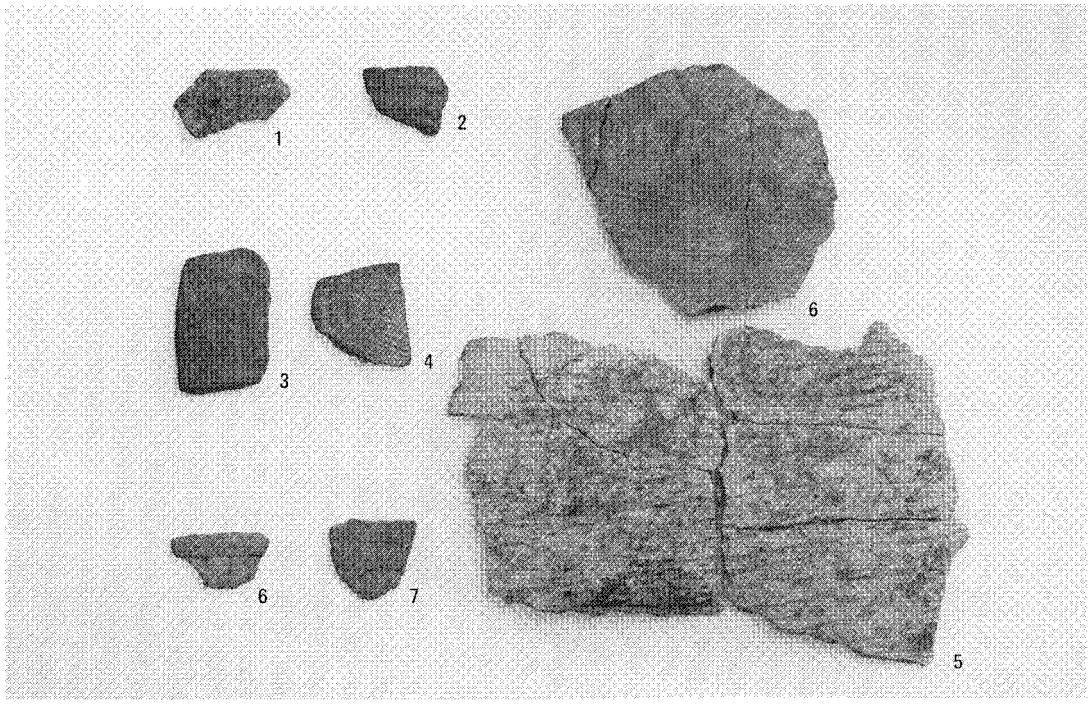


大川浦遺跡近景

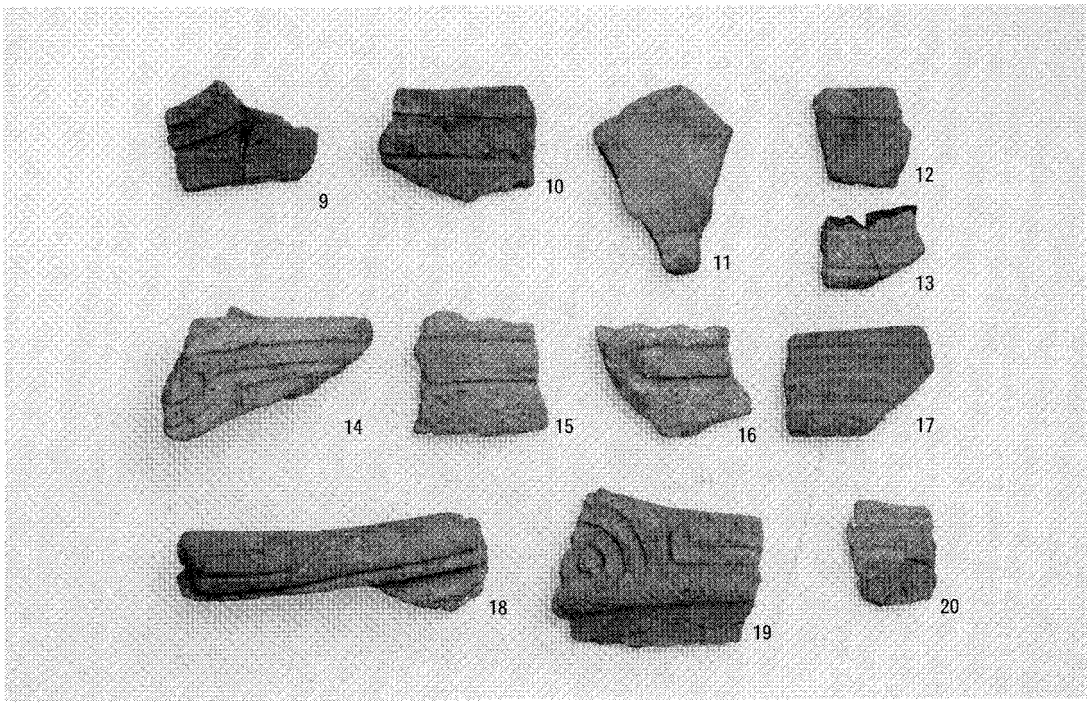


大川浦遺跡遺物採集地点近景

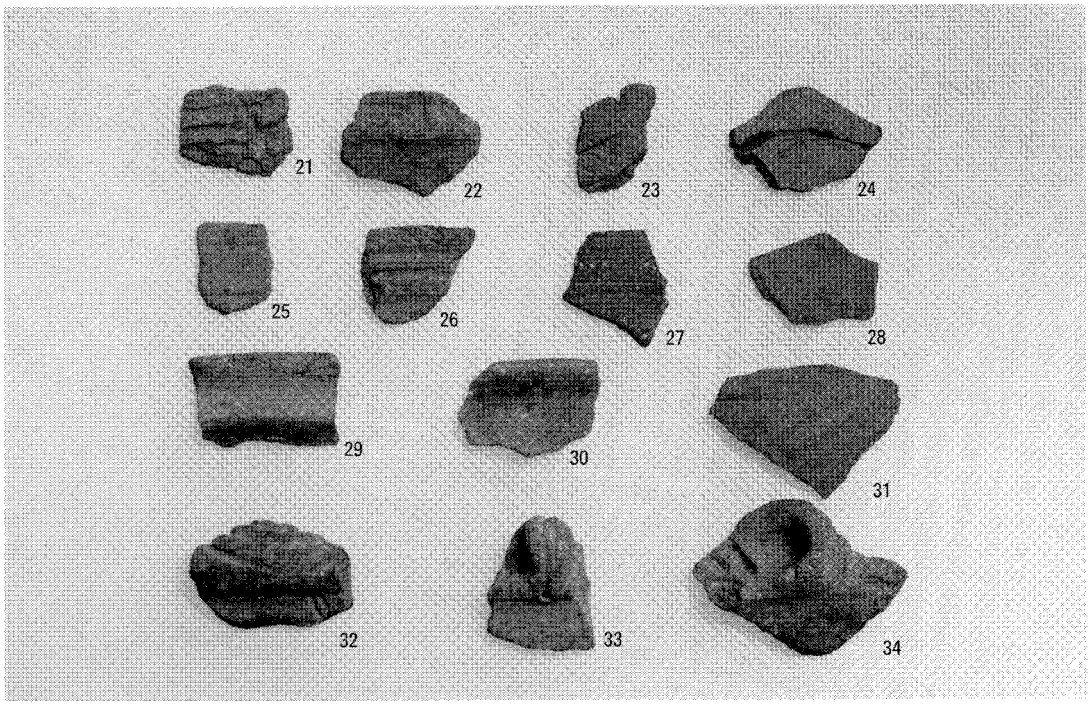
大川浦遺跡から対岸を望む



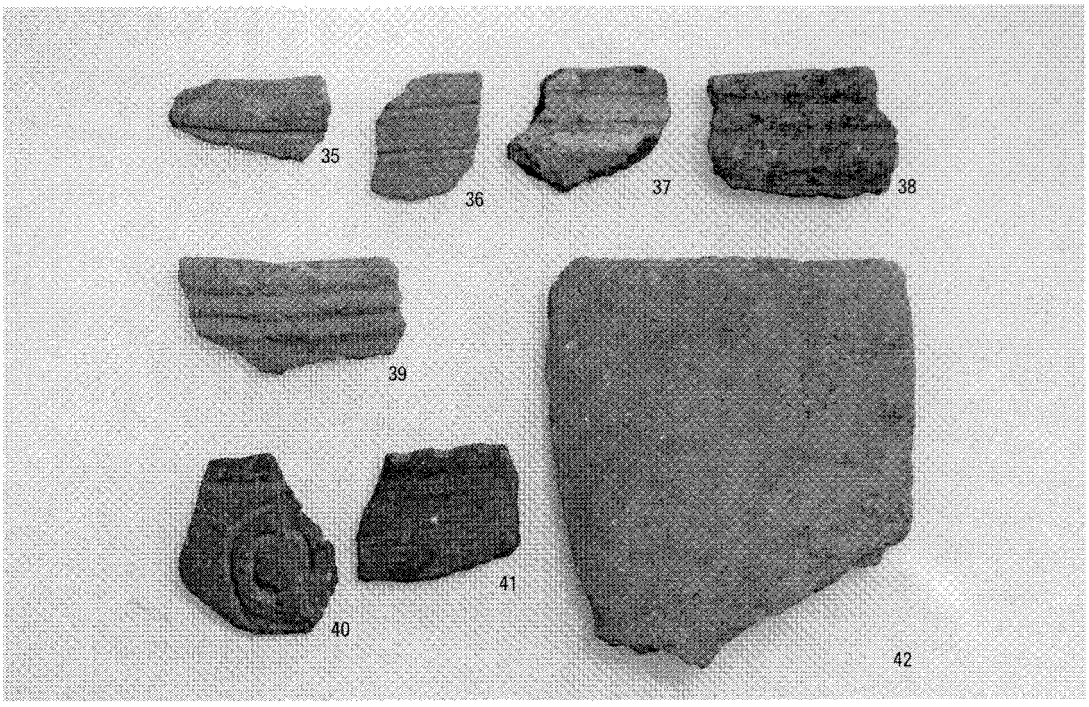
大川浦遺跡採集遺物１（縄文土器１）



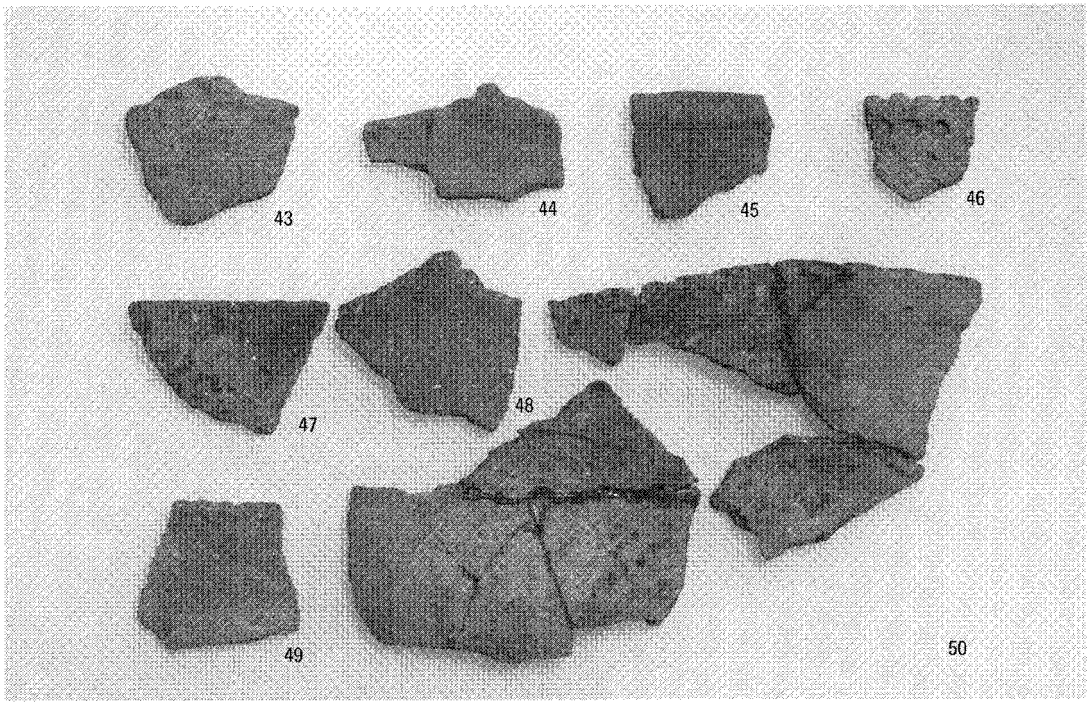
大川浦遺跡採集遺物 2 （縄文土器 2）



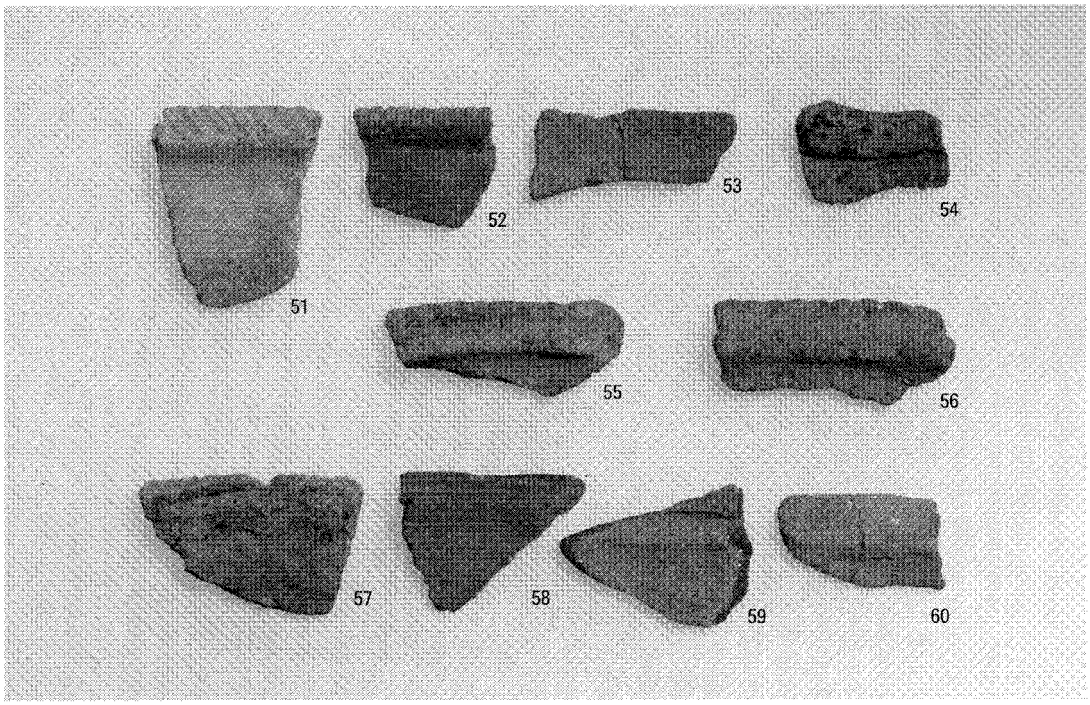
大川浦遺跡採集遺物 3 （縄文土器 3）



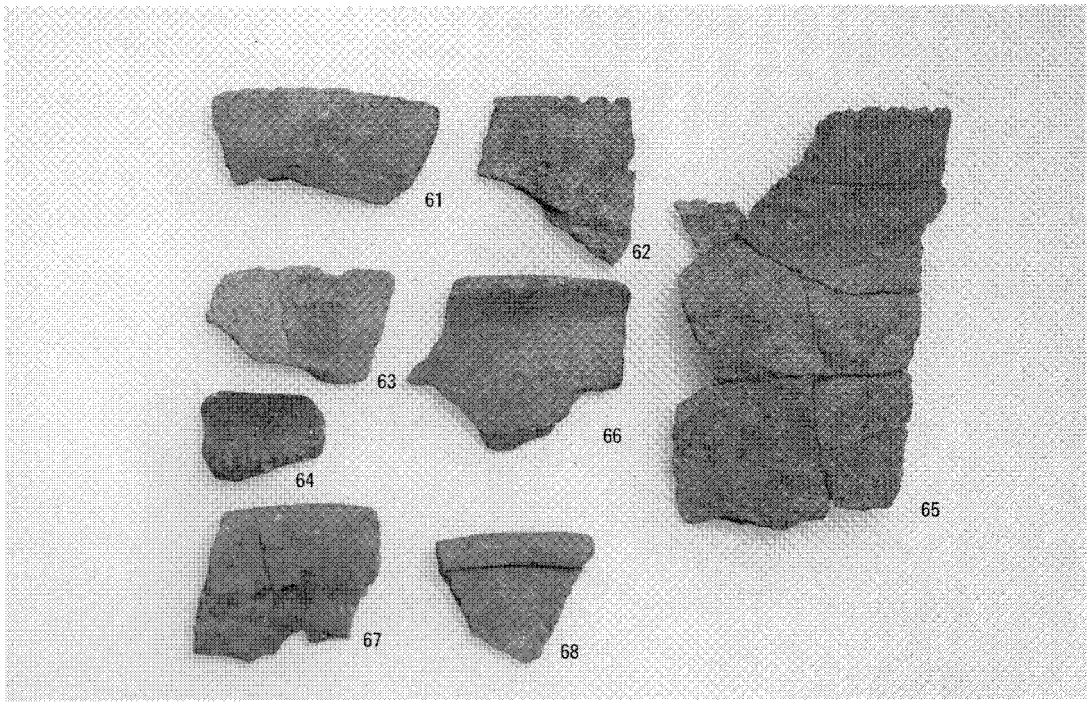
大川浦遺跡採集遺物４（縄文土器４）



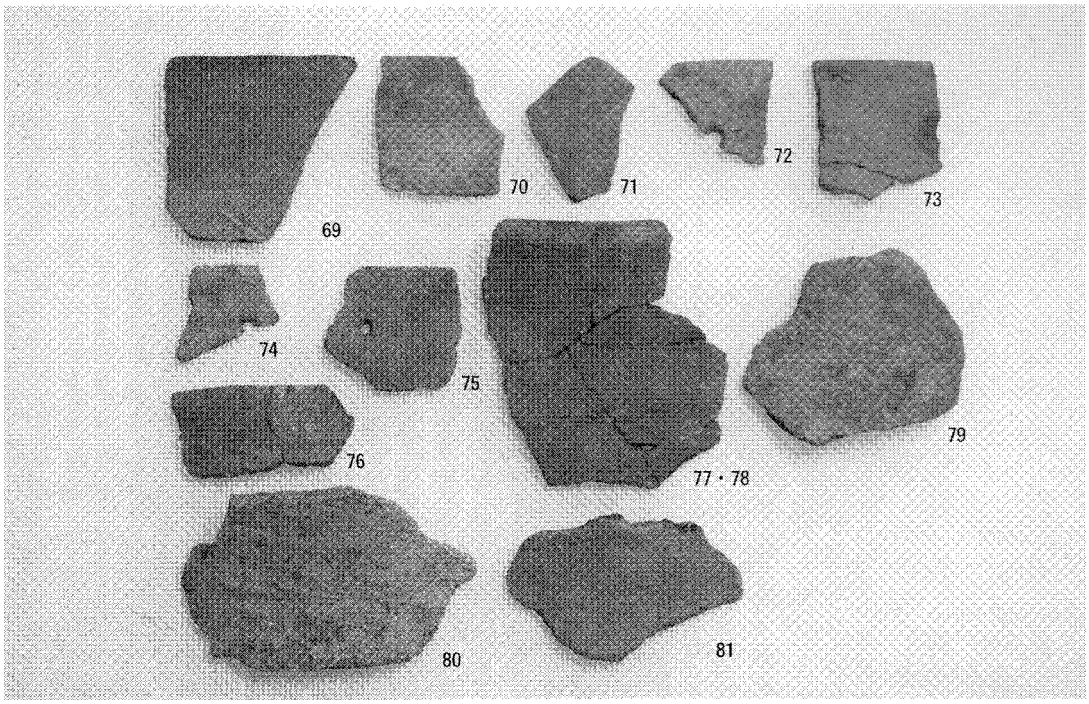
大川浦遺跡採集遺物５（縄文土器５）



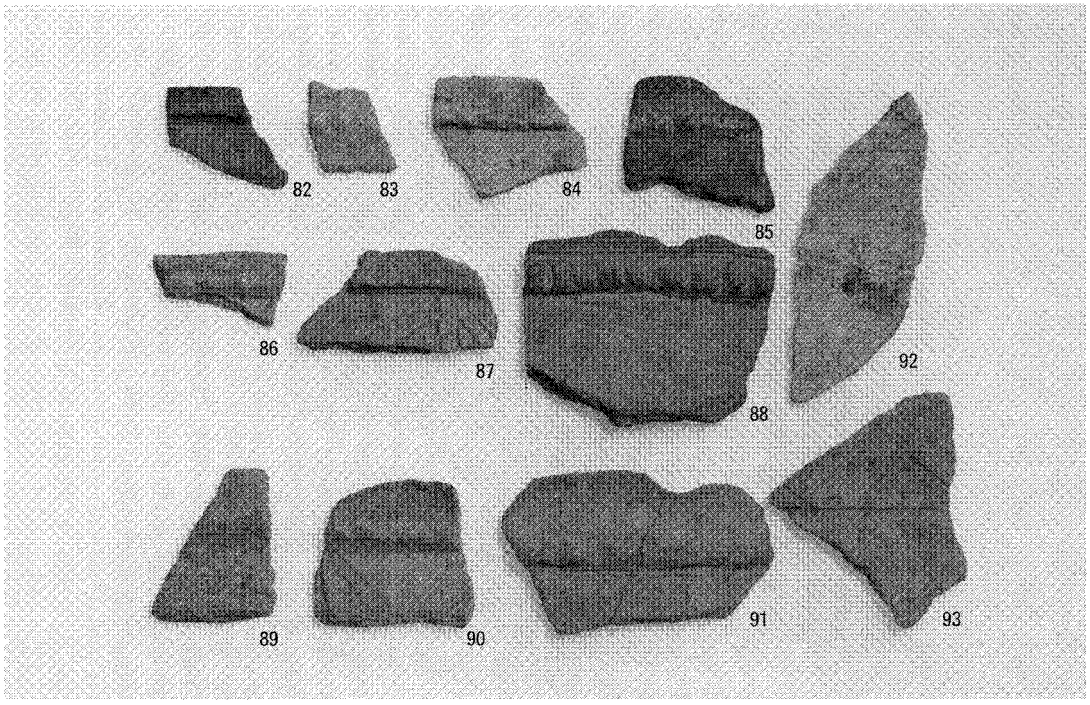
大川浦遺跡採集遺物 6 （縄文土器 6）



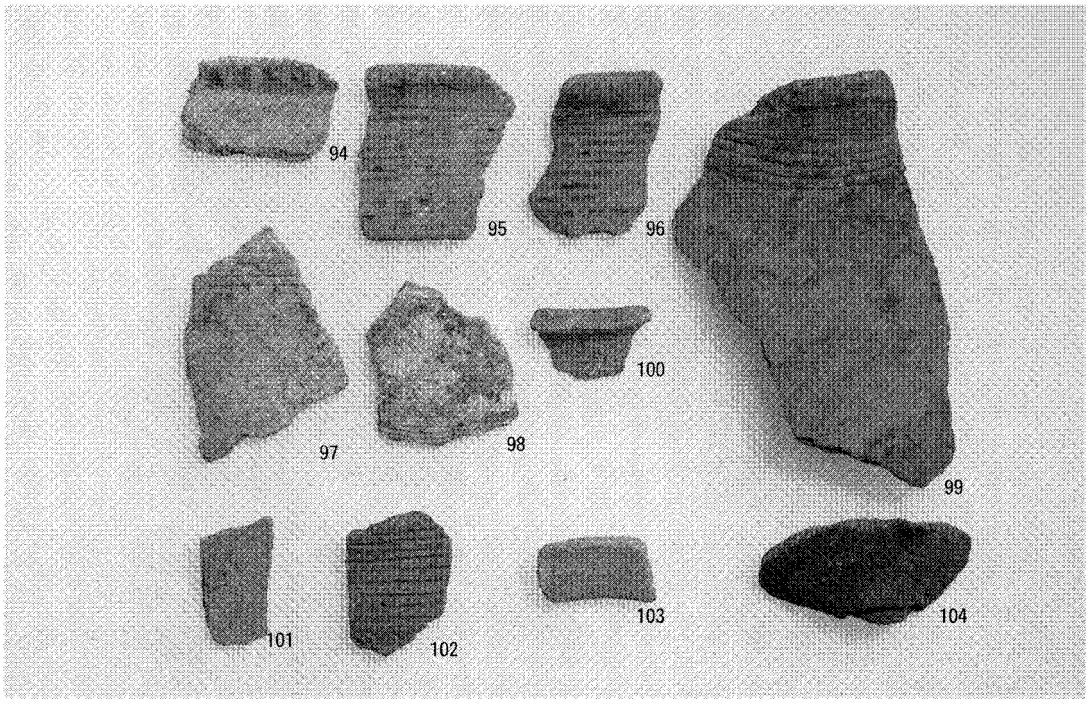
大川浦遺跡採集遺物 7 （縄文土器 7）



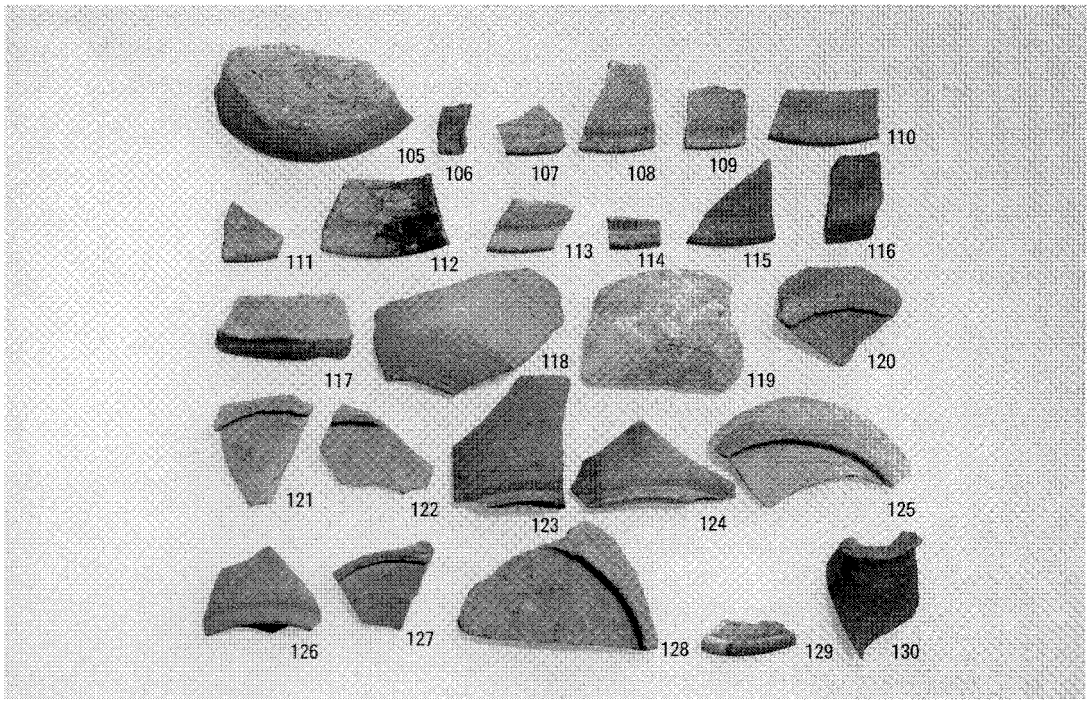
大川浦遺跡採集遺物 8（縄文土器 8）



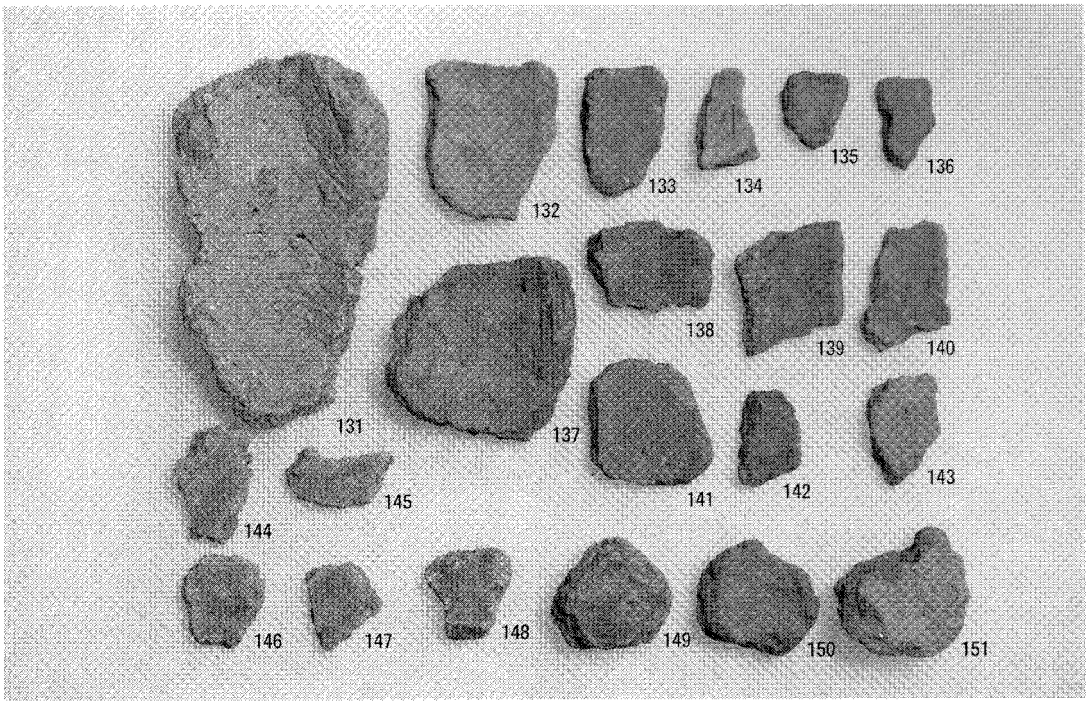
大川浦遺跡採集遺物 9（縄文土器 9）



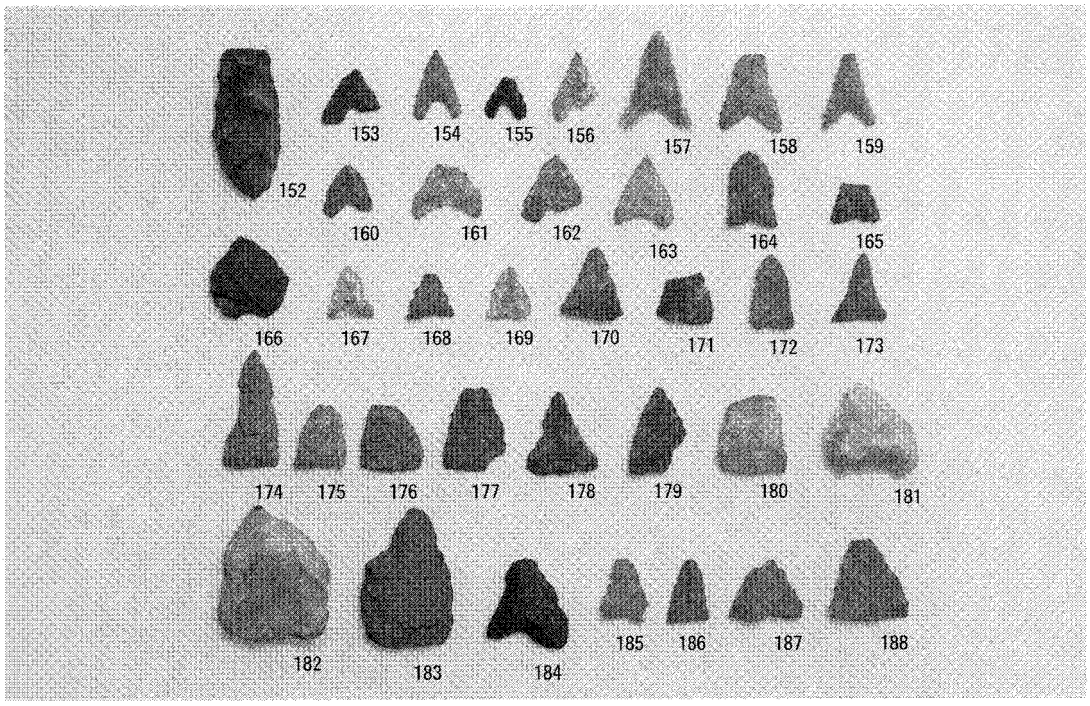
大川浦遺跡採集遺物10（弥生土器・土師器）



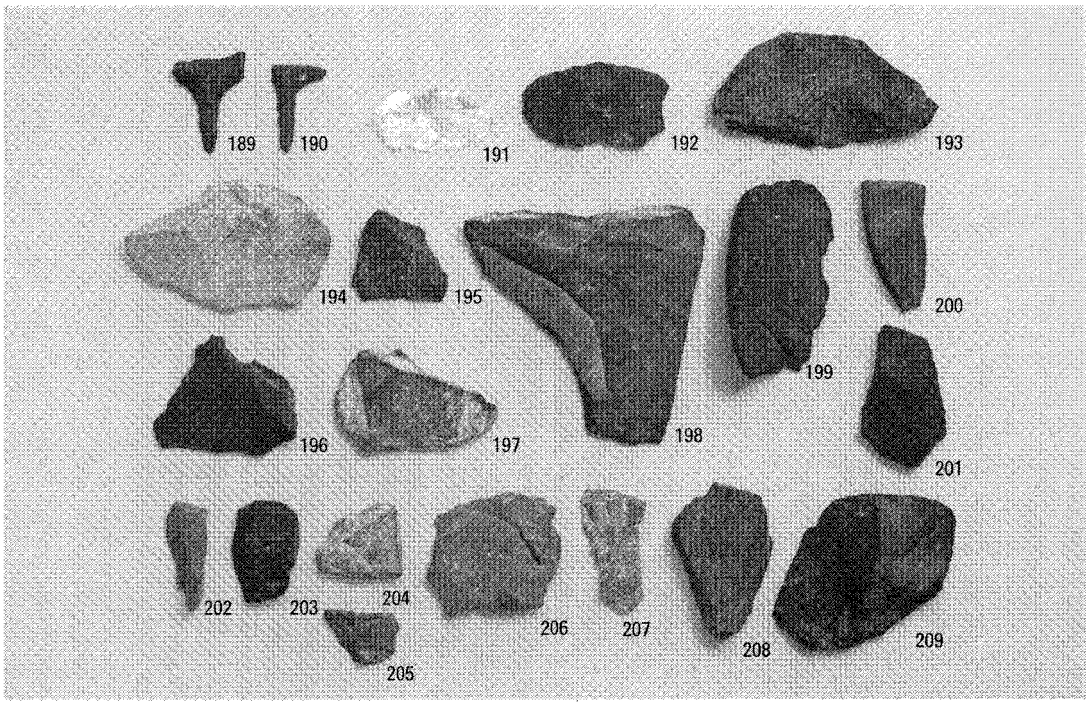
大川浦遺跡採集遺物11（須恵器）



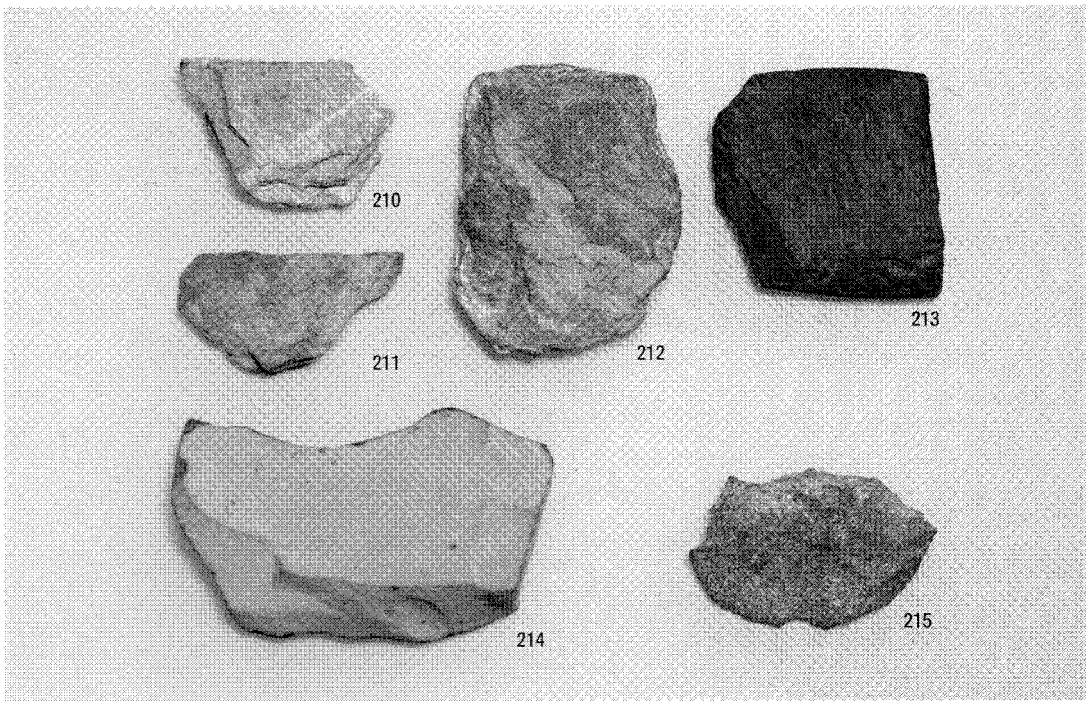
大川浦遺跡採集遺物12（製塩土器）



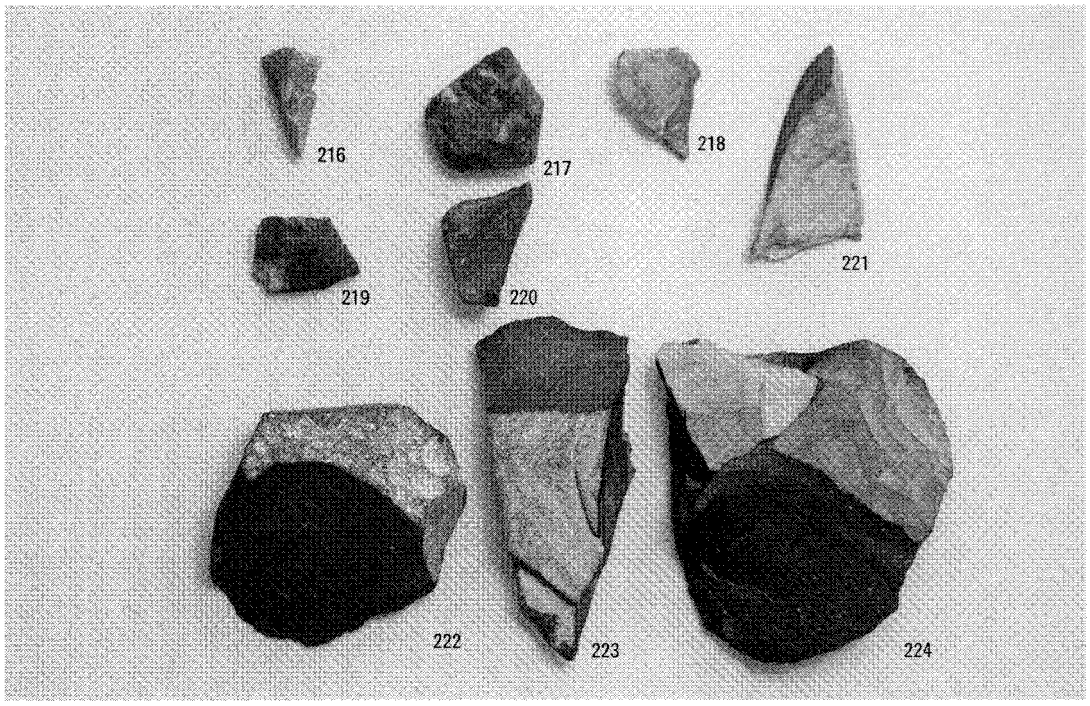
大川浦遺跡採集遺物13（槍先形尖頭器・石鏃）



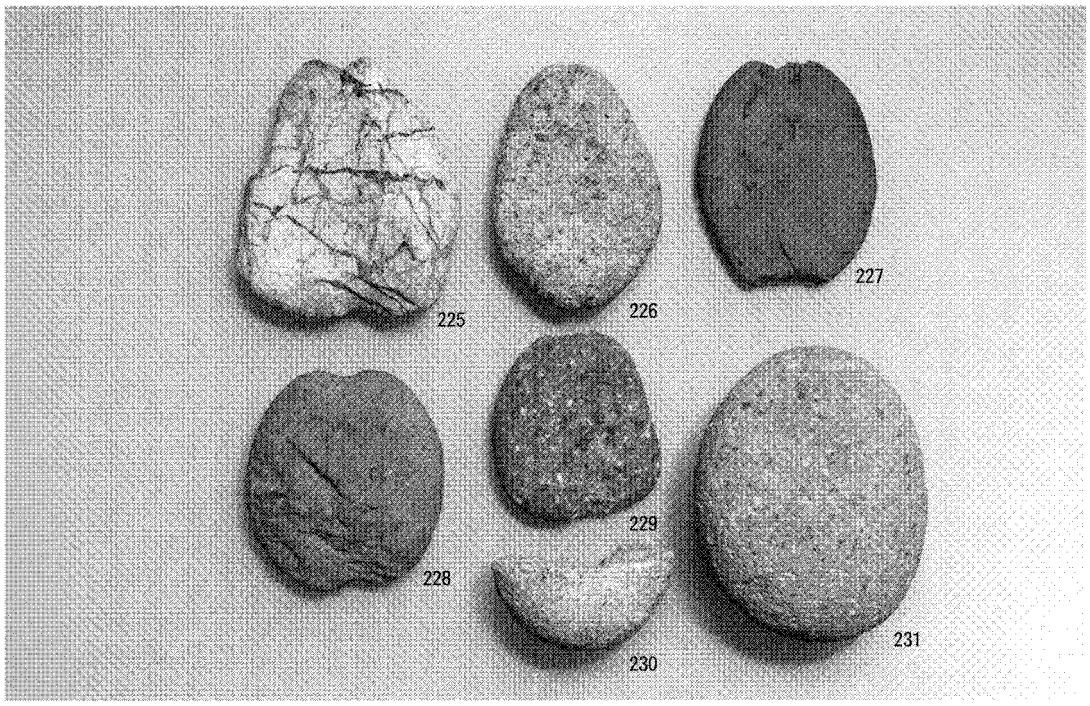
大川浦遺跡採集遺物14（石錐・スクレイパー・楔形石器）



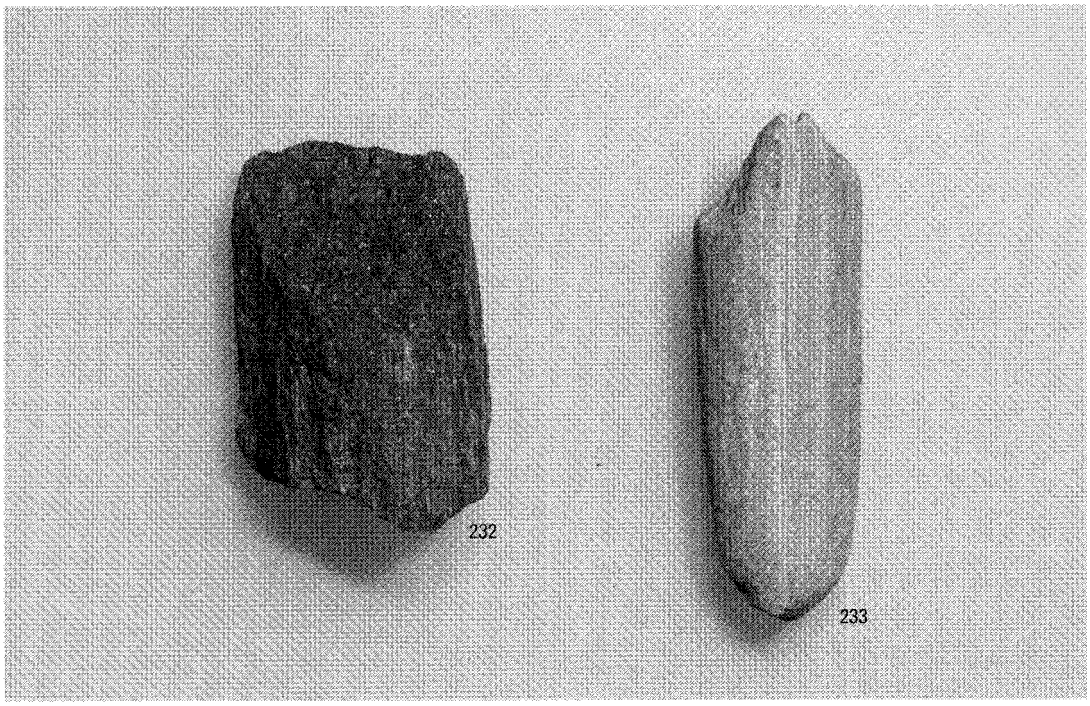
大川浦遺跡採集遺物15（打製石斧・刃器・剥片）



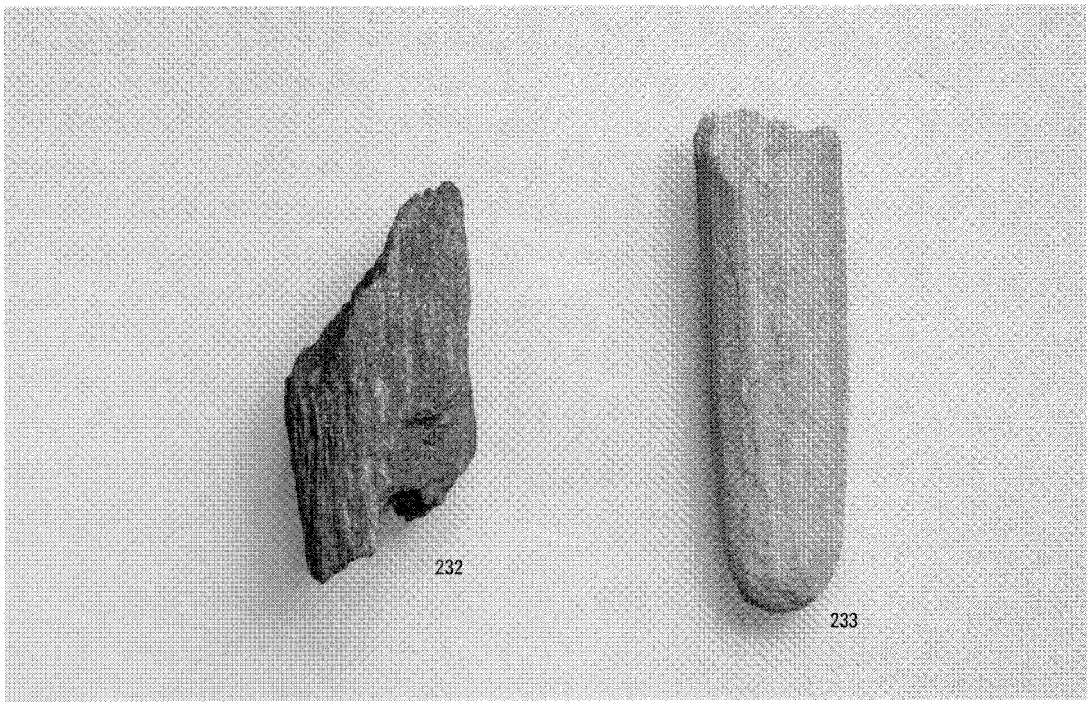
大川浦遺跡採集遺物16（石核）



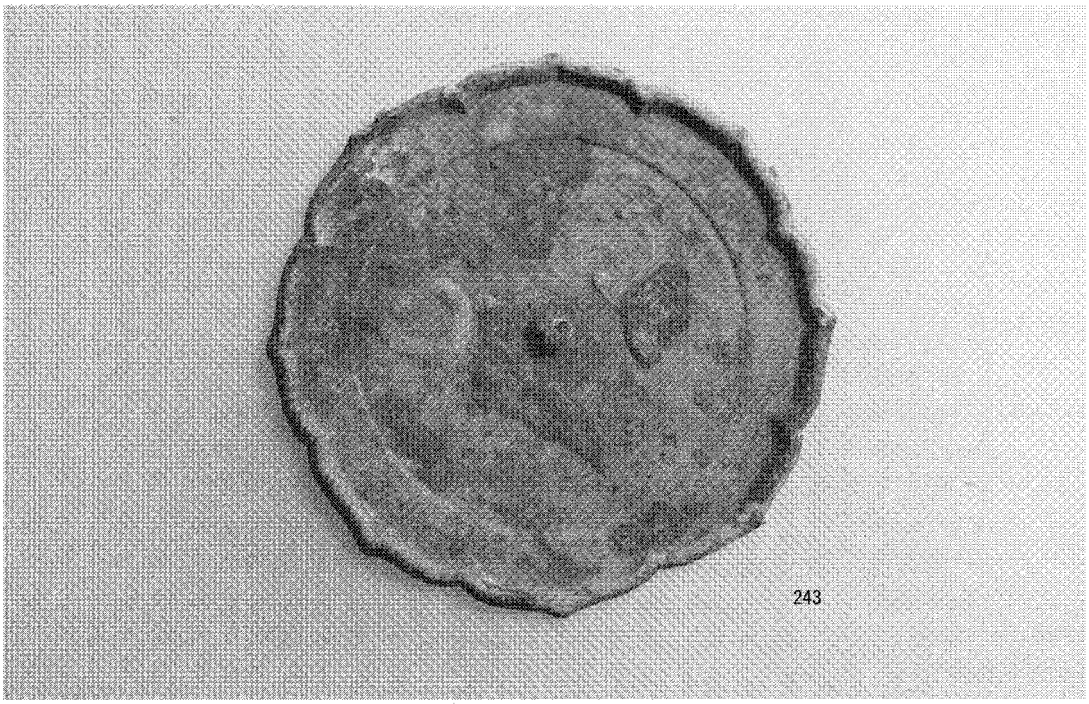
大川浦遺跡採集遺物17（石錘・磨石）



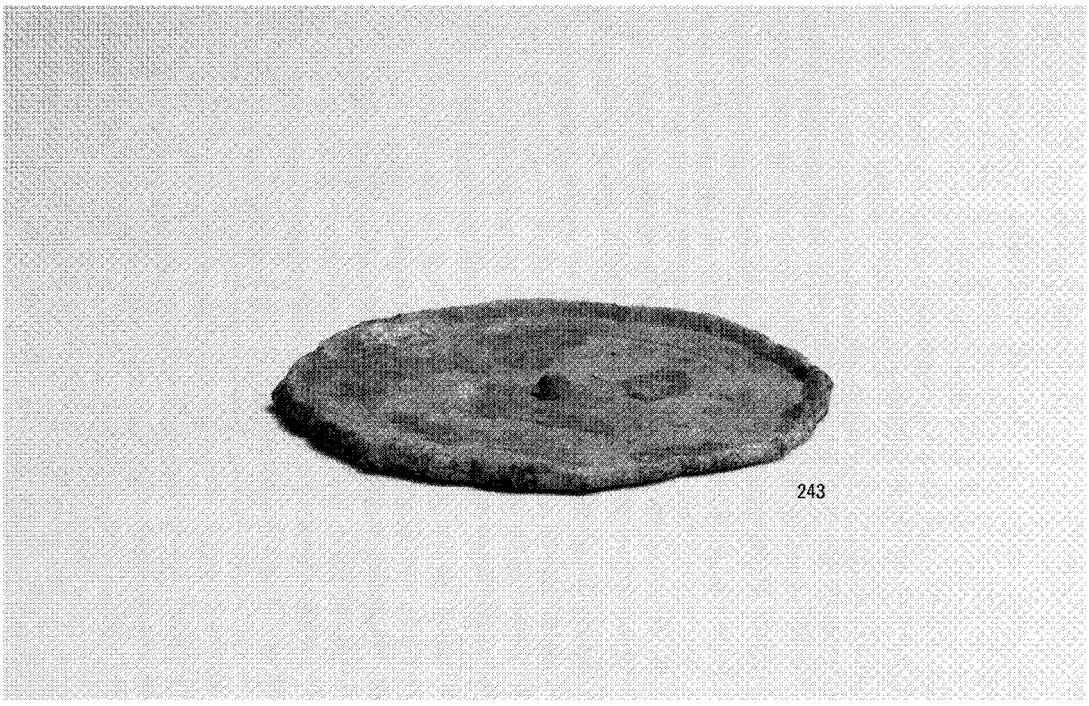
大川浦遺跡採集遺物18－１（石棒－正面）



大川浦遺跡採集遺物18－２（石棒－右側面）



大川浦遺跡採集遺物19－ 1（瑞花双鳥八稜鏡－鏡背面１）



大川浦遺跡採集遺物19－ 2（瑞花双鳥八稜鏡－鏡背面２）